

スモレットとフックとは多少影響を受けし跡あり。彼れはかくの如き學植深からざりしかば該博卓抜の識見は之れを彼れが作に望むべからず而も此缺點は偶々彼れをして深く中等以下の社會に同情せしめし所以にして美術上の意見政治上の主義社會上の問題其の何れを問はず常に所謂中級主義を以て之れに對しき。且つやかゝる性習の必然の結果として彼れは世の學を銜ふ者の乃至倨傲なる上級社會に對して平なる能はず其の筆を執るや絶えず此彼の徒を諷刺冷嘲して止まざりしが惜むらくは學者及び上流に關する聞見其の間接の知識と共に乏しかりしかば其苦心の想像も上流の真相に達する能はず隨うて其の諷刺も往々にして門外漢の落書にひとしかりき。さもあれ其の中級以下に對する觀察は穿細實に驚歎すべきものあり。一たびデッケンスの筆に上れば人や事や性癖や服裝や其の笑ふべきもの其の憫むべきもの其の賞すべきもの其の憎むべきもの微に入り細に入り言語や舉動や一々生きて躍らざるは稀なり。時を同うして此の伎倆に於て彼れに匹敵し得しものは恐らくはたゞ佛の名家バルザックのみならん。而も尙嚴密に觀察すれば此等人物の言語舉動性格も多くは彼れが作中の世界にのみ活動するもの現在には絶無にして稀有と評せざるを得ざるもの比々是なり。

されば彼れが作を讀む者そらろに篇中の人物に同感して憎み笑ひ悲しむと雖も到底眞に之れと同化し共に功過を経験すらんやう感ずることは稀なり是れ其人物が往々デッケンスが作中の人物にして現世間の人物たらざるが故なり。是れを要するにデッケンスの長所は其の剛健と活氣と其の無盡藏の滑稽と其の顯微鏡的外面觀察となり而して其の短所は誇張と不自然と膚淺と荒唐と戲謔となり。遮莫英國小説がデッケンスの作に至りては一進歩をなしたるや争ふべからず。十八世紀の末より十九世紀の首へかけてスコットが新に歴史小説の一體を創擧して天下靡然として之れに倣ひたりし中にデッケンスは所謂風俗的小説より脱化して別に寫實的社會小説を著し遙かにリチャードソン、フィールディングが脈を紹きて更に其精微に入りたりしは頗る多とすべき功績なり。兎も角も大體に於てはデッケンスはフィールディング等よりも一步を進めたりし作家なり。其の名聲近時大に降落したれど其の一大作家たるの譽れは長く英國文學史上に録せられて残るべし。デッケンスが著は小説の外に詩歌と記叙文とあり小説に比しては甚しく劣れるも

*W. M. Thackeray.

のなり。

十九世紀の中葉に於てチャールズ、デッケンスと相併びて文名一時に高かりしものを
 *ウィルヤム・メーク・ピリス、サッカレーとなす。(一千八百十一年に生れ同六十三年に
 逝きぬ。普く世人のサッカレーが異才なるを認知せしは一千八百四十六年以後即
 ち其傑作の小説“Vanity Fair”の世に出でし後なり。(此の作は同四十九年に完結
 せられき)。次いで“Pendennis”(小説)を著はしぬこは隠然著者か自傳とも見做し
 つべきものなり。後ち評論の作“The English Humorists of the Eighteenth Century”を
 著し、が縦横自在に其得意の筆を揮ひたるは一千八百五十二年に作りし“Es-
 mond”(小説)なり。『エスマوند』は此種の作にては古今有數と稱せらるゝ者にし
 て女王アーン時代の人物風俗を活現して躍如たらしめたる伎倆は彼の歴史小説
 を以て標榜せりしスコット等をして却走せしむるに足る。さて其の翌年より向ふ
 三ヶ年の間には“The Newcomes”といふ小説を作せり。風俗小説としては第一
 位のものたるのみならず時人の玩賞も亦第一位なりき。“The Virginians”と題す
 る作は第十八世紀末の風俗人情を寫せるものにて『エスマوند』と共に彼れが作中

の双壁なり。さて又彼れが妙文の短きものは多く“The Roundabout Papers”と名づ
 けたる叢書の中にあり。

サッカレーが作は其の青年期のと最短篇とを除くときは殆ど皆諷刺冷嘲の筆に成
 れり。作家が道徳上の觀念は隠たるが如くにして頗るよく現たり。社會の諷刺
 家としてはデッケンスに比してサッカレーの高きこと數等なり。彼れを稱へて豫言
 者と言はんは過ぎたりとも過ぎたり。但し彼れを貶して他の戲謔者者流の斑に
 置かんは失當の甚しきものなるべし。彼れの笑の裏面には餘んの涙ありしとを
 記せざるべからず。

彼れの韻語また見所なきにあらず其の名あるものは一千八百五十七年に出版せ
 し雜著集中にも載せられたれど其本領の詩歌に存せざるとは衆批評家の夙に認
 めたる所なり。按ふに彼れは社會及び自然の事物を詩眼もて觀若しくば感ずる
 と能はざりしにあらねど而も之れを觀若しくば感じたりといふは彼れの快しと
 せざりし所即ち其感慨情緒を在りのまゝに高唱せざるを良しとせりしなり換言
 すれば彼れは詩人的に事物を感ずるを惡しとせずして詩人的に歌ふを女々しと

せりしなり。曰はく「歌ふも何の効かあらん」と蓋し一種の實際主義にしてやがて彼れの英國人たるを證する者なり。但し英國人は人なり他の南歐人と共に泣かざるにあらざたゞ悲みて傷らざるのみ。眼は涙に沾ひながらも心に毅然たる丈夫貌の相を失はずして或は慰藉の道を講じ若くは救濟の方を案ずる是れサッカレーの特質なり。此の熱情と此の真情とあるが故に彼れは其の小説中にて嘲諷せる人物にして其の詩歌に於ては時に哀切なる悲調を漏らせるとなきにあらざ之れによりて詩歌が人心最底の聲なるとを見るべし。要するにサッカレーは詩情に乏しかりしにあらざ其の精妙なる想像其の壯大なる詞調は間々其の作中に於て見いだすを得べし。是れセイーンツペリ氏等が近時に及びて詩人としてのサッカレーを推稱するに至りし所以なるべし。

サッカレーが傑作の随一たる“Vanity Fair”は「男主人公なき小説」として名ありされど女主人公と見做すべき者は二人あり情なくして知あるソベッカシャープ女と智なくして情あるアミリヤ女と是れなり。前者は傲慢にして世才に富み且つ大膽なる生得なるが故に他の助けを借らて浮世を跋渉す後者は温良貞淑にして可憐な

れど其の性や魯なるが故に屢々數奇の境遇に泣く。全篇諷刺冷嘲を以て充たざる其の皮肉なる人生觀は間々人をして眉を蹙めしむる事なきにあらねど其の人物に至りてはさながら活きて躍るの概あり以て能く前の惡感を解除す。且つ之れを咀嚼し來たれば刺詆嘲諷の裏面に著者が同情の深く冷く潜めるを見る。

“Vanity Fair”に於て現代を描して成功したるサッカレーが筆は“Esmond”に於て百五十年前の風俗を寫破して同様の効果を收めたり。この作者元來脚色を構ふるに拙なるが此の篇もまた脚色の上に何の異彩もなく彼の『ベンデンニス』と同工なり即ちすべて記事を主人公カルテル、ヘンリ、エスマンドの自傳體となせり。只其のスケッチト王統の未造に於ける言語風俗を直寫して情を極めたるは驚べし。此の作や趣味の上よりいへば彼れの小説中第一に位すべしと稱せらる。

サッカレーは人物批論傳にも巧みなりき“On the English Humorists”及び“The Four Georges”の如きは其の最も傑れたるものなり。

第七章 其の他の小説家

マリヤット——リヴァー——ダズレトリ——ピッコック——ホルロー——コーチ

デッケンス、サッカレの周邊に輝けりし小説世界の小文星の主たるものは左の如し。

*フレックマリヤットは軍事小説を以て著名なりし作家なり。作中の佳なるものを“Peter Simple”“Mr. Midshipman Easy”及び“Jacob Faithful”などす。趣向も人物も海上の風景を寫すことなども重にスモレットの跡に倣へるなり。

*チャールズデームスリゾーは一千八百六年アイランドに生れき。“Harry Lorrequer”“Charles O' Malley”及び“Tom Burke of Ours”等は何れも活動と奮躍の氣との充滿せる軍事小説にして中にも“Charles O' Malley”は其の傑作なり。晩年に至りては人心内部の觀察に心を注ぎ實際の生活と種々の性格とを活現する小説を作らんと工夫せしが未だ一作をも成すに及ばずして死にき。

マリヤット及びリゾーと時を同うせる第三流以下の小説家中には“Captain Glascock, Chamier, Basil Hall, Michael Scott”等あり。

ベンチャミンチスレーリは近代著名の政治家にして總理大臣とまでもなりし人なり。

*C. J. Lever. *F. Marryat.

*B. Disraeli.

其の傑作はむしろ弱年の作に在り。“Vivian Grey”“The Young Duke”“Contarini Fleming”“Alroy”“Venetia”“Henrietta Temple”の如きは其の作の佳なるものなり。作意も筆致も双つながらリットン卿の作に髣髴たり但し“Vivian Grey”はリットンの處女作“Falkland”と同年に出てしものなればチスレーリはリットンを摸倣せりともいひ難し。彼れが著作に通じて最も著きは佛のブルテールの影響の著大なることなり而も藍より出て藍の色をすら其の儘には傳ふる能はずして徒らに其の短所をのみ套襲せる氣味ありすなはち其の諷刺時とし個人的となり私意的となり且つ屢々實際と離れたり。然れども朝野の紳士は當世の英傑の著作として一作出づる毎に之れを歓迎し兎も角も購ひ求むる事を忘れざりき。

*トマスラヴビーコックは一千七百八十五年に生れて不秩序なる教育を受けし作家なり。“Headlong Hall”“Melincourt”“Nightmare Abbey”“Maid Marian”“The Misfortunes of Elphin”“Crotchet Castle”“Gryll Grang”等の作あり。諷刺は頗る銳利にして動もすれば露骨に過ぐる嫌ありしが漸く圓熟するに及びては一種趣味ある滑稽のうち能く其の鋒鏗を包みたり。ビーコックは韻語にも長ぜりき特に其の宴席の爲

*T. L. Peacock.

にとて作りし作の如きは諧謔縦横も流石に野卑に陥らざる所愛讀するに足るといふ。

*ジョーシボルローはピーコックより若きこと十八歳なりしがピーコックにひとしく甚だ亂雑なる教育を受けたりき。幼きころより尋常人の心を向けざる方の文學に心を傾け例へばスカンヂナギヤ、ロシヤ、スペイン、ローマ、エチオピア等の諸國語を修め且つ種々の異常なる閱歷を経たりき。ボルローが小説は其の旅行日記と大差なし共に實地の見聞遭遇を材とせるが故なりるべし。其の文致には到底他人の摸すべからざる趣味あれども之れを小説として全局より評すれば多く珍重すべきものにあらざり。

*ハリエット、マーチノ、女史は初めはユニテリアン教義を主旨とせる宗教小説の作家なりしが後には活潑なる排宗教家として知られたり。經濟論に關する物語を作ることを得意とせしが一千八百三十二年に物せし "Illustrations of Political Economy" は時の好尚に投じて好評なりき。少年の讀み物にとて物せし作の中の其の最も名あるは "Fests on the Fiori" にして小説にては "Deer brook" 佳し。何

*G. Borrow.

*H. Martineau.

*M. R. Mitford.

れもエッチテオス女史の作意に倣ひたる者にて對話も圓熟せり。

*メレー、ラッセル、ミットフォード女史一千七百八十六年に生れき。家貧なりしが爲めに齡二十四歳の時作詩に従事して一集を公にし後ち又劇をも作れり其の脚本は演ぜられて名ありき。又雜誌『ロンドン』の爲めに數篇を寄せて令名ありき。後年此等の諸作を蒐め "Our Village" と題して出版せり篇中最も名高き叙景の材料は概ね其の居の近傍なるテームズ河畔の風光より得たりといふ。可憐瀟洒玩讀すべき價あり。

第八章 定期出版物の發達

十八世紀の新聞紙、雜誌——十九世紀の諸雜誌——『コッベット』と『ウィークリ、レジスター』——『ゲエツフレ』と『エナンバラ、レポーター』——『シドニ、スミッス』——『クォールターリー、レポーター』の諸記者——其の他の雜誌——ラム——ハズリット——ウィルソン——ロックハート——デクインシー——リ、ハント——コーレルツァー——マジン——スタンカー——フィッツゼラルド

大作家の出でざりしにも拘らずしし新作小説とだに言へば頗る歡迎せられたりし此の小説の隆盛期と相併びて否寧ろ此の隆盛と相俟ちて第十九世紀の初期以

來一時に長足の進歩をなししものを定期出版物となす。定期出版物の重要な部分を占むるは新聞紙と雑誌となり。蓋し新聞紙、雑誌は能く自ら發達せしのみにあらず、他の諸發達をも攝取して自家が生長の滋養分となししなり。彼の小説の如きも、一冊子となりて單行する以前に、大抵先づ新聞紙、雑誌に掲載せらるゝを例となせりき。韻語の作亦た然りき。其他政治、法律、經濟、風俗等に關する文章の如きも、歴史、神學、哲學等の立論、考證に關する文章の如きも、概ね先づ新聞紙、雑誌によりて、社會に紹介せらるゝを例としたりき。讀者も早く知らんことを望み、著者もまた廣く讀まれんことを希ふ、是れ實に近世の學問界、讀書界のならひなり。されば玉石同架は止むを得ざる結果にして、掲載の順序と其の論說の價值とは、每號もとよりまち／＼なりき。さもあれ、不朽の大文字は、流石に自ら定評を得て、後に大小の冊子となり、以後昆に傳はりたり。すなはち作者にとりては何等の不利もなく、讀者はた居ながらにして諸作品の陳列場に臨むの感あり、其の風の延いて我が邦に及び、今や世界の流行となりぬること、故ありといふべし。當時按ずるに、新聞紙、雑誌が發達の初期は第十八世紀の末二十年の間なるべし。當時

社會上の題目にはアヂソン風の輕妙なる論文尤も行はれ、宗教上にては非ヂャコピ
ン派の論戰甚だ盛んなりき。然れども到底十九世紀の初めに由りて「エヂンバラ
評論』週報』(“Weekly Register”)若しくは「ブラックウッド雑誌』に見えたるが如き目覺
しき批評、創作には比ぶべくもあらざりしなり。殊に雑誌は、第十八世紀の末には
僅かに“Monthly”及び“Critical Review”ありしのみにて、何れも尙ほ幼孩、四肢未だ
具足せざる姿なりき。

第十九世紀の初期に一時盛譽ありしはギフォード Gifford の創興せし「クォールターリ
ンジャー』(Quarterly Review)なるべし、是は第十八世紀の尤も注意すべき定期出版物な
り。一時はサウシー之れが主筆となり續いてコールリッヂ之れが寄書家となりき。
是に於て在朝在野の名士、碩學、時々之れに寄書し漸く讀書界を風靡せんとせり。
是れより同種の出版物次第に増加し遂に有名なる諸記者續々輩出するに至りき。
こゝに逐次に此れ等記者が功業と特質とを述べ、傍ら定期出版物の發達を示さん。
*ウイリアム、コッベット 一千七百六十二年に生れき。一千八百零六年有名なるウイ
クリ、マスタター (“Weekly Register”)を發刊す、此の『週報』は甚だ有益なりとして歡迎

せられき。かくてあること數年、偶々其の軍隊を攻撃せし筆時法に觸れて、一時禁獄の身となりしが、其の間に『週報』の基本金を失ひたり。出獄後(一八一七)再び亞米利加に航し、百方盡力の末一二月にして再び『週報』を刊行す。適切な記事陸續として絶ゆることなく、聲價前日に倍したりき。千八百三十五年にみまかりね。

コッベットが著は合綴せられて浩瀚なる冊をなせり。就中“Rural Rides”は記事の面白きのみならず、文章また甚だ佳し、記者が浮沈の境遇のさながらに現れたる、取りわけて面白し。但し“History of Reformation”は獨斷臆測の記事多く、其の他の時論亦た偏見多し。コッベットが文章は總じて雅馴なれとも、其の議論、好尚等には疵瑕なき能はず、而も尙十七世紀のバンヤン、十八世紀のデフォー等に比して耻かしからざる國文學の一代代表者たり。其の文牀はもとスヰフトに負ふ所尠からざりしが、其の性質、教育彼れに似ざりしが故に、後には嚴然たる一家をなせり。要するに、コッベットはスヰフトが諷嘲反語に、代ふるに直截の激語を以てせしもの、所詮スヰフトより得たる處はたゞ其の立言の俚々諤々たる點に止まりしなり。

コッベットが『週報』に於て卑近の考察と議論とを以て社會の事相を評論せしと同じ

*F. Jeffrey.

ころに、一層高尚なる題目を捉へて専ら文學的に評論を力めしものを『エヂンバラ評論』となす。此の雑誌の創始者に付きては二説ありて、今尙定まらざ。フランシス、デッフレイなりとするものとシドニ、スミスなりとするものと是れなり。されど二人が共同の發意なりきとする説最も事實に近し。前者は蘇國人にして後者は英國人なり。フランシス、デッフレイはスミスより若きこと二歳にして一千七百七十三年に生れき。エヂンバラの人、一千七百九十八年ロンドンに立ちいで、文士として世に立たんと欲しぬ、然るに急に地位を得る能はざりしかば、又其の生都に飯り來りてシドニ、スミスと共に『エヂンバラ評論』を發刊せしが、件の雑誌の方針に付きては全然スミスの創意に従ひきといふ、即ち發行者の意見を以て寄書家の議論を左右することなかるべしとさだめ、易めて批評の自由を許し、さて當時の名流、碩學に請囑し、相當の報酬を定めて稿を集めき。

『エヂンバラ評論』は、後年其の競争者の爲めに大打撃を受けて一頓挫せしが兎も角も十九世紀新聞雜誌の初生期に於て衆に先立ちて呱呱の聲を擧げし功は没すべからざるのみならず、初生の兒としては頗る健全に生ひ立ちしものと言はざるべ

からず。且つや其の立論の時としては過激に流れたりし失もあれど全冊に創新の氣の充滿して殊に青年が精神を鼓舞せしと常に射利の念を脱して誠意事に従ひしとは其不統一の失を補ふて餘りありきといふべし。其の記者の如きも主筆ヂェツフレールが才筆の外に學問と經驗とを兼ねたりしレスリーとフレールフェアとあり無双の機才ありて事變の處理に長ぜりしシドニ、スミスあり精勵倦むことなかりしブロー公あり所説堅實にして文藻浮靡ならざりしホルナーあり加ふるに博覽能文のスコットを以てし相結びて馳騁を試みしは實に一世の寄觀なりき。ヂェツフレールの筆は動もすれば鋒鏗發露に過ぎ隨うて多少の疎忽と失敗と無き能はざりき。バイロンを漫罵しウオルヅオスを嘲罵し甚しきは同雜誌の記者にして其の親友たりしスコットをすら誹譏せしとあり。其の他の小文士に對する不深切はた屢ありき、さもあれヂェツフレールは一方に於て超凡の長所なかりしにあらざり其の文學上の見解の往々にして宜しきを得ざりしのみ。さはいへど彼れは尙當時の一大評家たるを失はず就中衆に先んじて時文の趨勢を觀察し整然統括して評論するの技は當時彼れに及ぶもの稀なりしなり。又彼れは其の偏見誤解を

すら整然と組織するの能ありしなり。又彼れが提出せし問題は必ずや早晚來たるべき緊要問題なりしなり。

政治上の主義のほかは常にヂェツフレールと多少見解を異にして好對照をなし、者をシドニ、スミスとす。

シドニ、スミスとヂェツフレールとは其の生地異なるが爲めに氣稟上に英人と蘇人との差ありしのみならず其の好尚長短將た殆ど正反對なりき。ヂェツフレールは感情を重じ文學を文學として愛玩すること深かりしがスミスは之れに反し作を作為として玩賞することを惡み且つ感情に拘泥することを非とせり。ヂェツフレールは頓智諷諧の才に乏しくスミスは之れに裕かなりしと同時に其の諧謔の底に眞摯堅實なる思想を包みき。但し其の時人に愛せられしは此の眞面目の主義よりは寧ろ其の滑稽の機敏にして即妙なるにありしなり。蓋し溢るゝが如き其頓才は隨時隨處に迸發し嚴格なる政治論たると親友に與ふる手簡たるとの別を問はず尙も事を説き理を叙ぶるに便なりと思惟せし時は常に之れを用ひたり。兎も角もスミスの滑稽は『エヂンバラ評論』の一粧飾たりしのみならず合冊となりて世に

出でし後も尙ほ依然として玩賞せられき。

*ジョン・パーローパーローは『クォールタリー』の社員にして地理及び海軍史を擔當せる記者として名ありき。*アイザック・ヂスレーリはベカンズフィールド伯の父なり幼時特に嗜好する業務なかりし爲めに「智能不具」の童として輕侮せられしが廿六歳にして始めて文を草し之れより記者となりて終生其の業に力めたり。文學上の奇事逸話を集めたる“Curiosities of Literature”の前部は其のころに著ししものにして尙別に“Calamities of Authors”及び“Quarrels of Authors”又“Amenities of Literature”等の著あり。就中“Curiosities”は今も尙珍重せらるゝ彼れが傑作なり。

前叙三雜誌に次ぎて世に出でし著名の雜誌二種あり“Blackwood's Magazine”とLondon Magazine と是れなり。前者は一千八百十七年エヂンバラにて發刊せられ歩武堂々長き年月の間繼續せり。後者も同年にロンドンに現はれ一時は華やかに運動せしが幾程もなくて斃れたり。前者は保守主義を懷き後者は自由主義を取れりき。但し前者にも自由主義の人なかりしにあらず後者はたデクインシーの如き保守主義家を有しラムの如き中立主義家をも有しき。二雜誌相對峙して互角

*I. Disraeli. *J. Barrow.

*C. Lamb.

の勢を張ること數年に亘りしが『ロンドン』は其の主筆ヂモン・スコットを失ふに及びて復た頭を擡ぐることに能はざるに至りぬ。其の掲載範圍の廣かりしことに於ては二者共に雜誌の名に負かざりき。按ふに『エヂンバラ』と『クォールタリー』とは所謂評論の雜誌にして記載の事項も批判評論の外にいざりしが『ブラックウッド』は然らず最初より詩歌、小説、評論、傳記及び其の他の事項に對しても平等の地位を與へたりき而して『ロンドン』はた此の例に倣へりき。後者はチャールス・ラム、ハズリット、デクインシー、フッド、ミットフォード女史等之れを扶け後者はウィルソン、ロックハート及びウミトリック、シムバードの三頭政治にマチンの應援其の誌面を飾りき。以下年齢の順に従ひて先づチャールズ・ラムより叙せん。ラムの文致は未だ剛健といふべからず著す所もまた甚だ少かりしが其の着想と其の措辭とは共に群に超え精緻簡淨加ふるに輕妙洒脫の致あり。ラムは千七百七十五年ロンドンに生れき。ラム幼より十六七世紀の諸作を愛し熱心に研究せりき故に其の初期の作は大抵該紀の風調を帯びたり。彼れが姉と共に著しし“Tales from Shakespeare”『沙翁劇を種の物語』(チャールズは悲劇のをメレーは喜劇のを物せり)は其の文致精妙にして簡に善

く原作の面影を傳へたり。之れより先き千七百九十九年エリザ朝の悲劇に倣ひて“John Woodvil”といへるを作しき此の作世評の悪しかりし割合には拙からざる作なり。これと前後して“Poem”“Rosamond Gray”“Specimens of English Dramatic Poets”“Adventure of Ulysses”及び“Poetry for Children”等の著ありき。但し彼れが才筆の十分に現はれしは彼の『ロンドン』雜誌發行の後なりそは齡四十六歳の時なりき。件の誌上にて彼れは名高き“Essays of Elia”の正續兩篇を續載しき。是れラムが傑作の文集にしていみじき諷諧の文に富めり。要するに彼れが諸著に通じて歴々たる特徴は其の十七世紀の作家殊にバートン、フルラー及びブラウムより嫺雅温藉の文致を得たりしこと其の十八世紀の論文家より精緻纖巧の筆意を受けしこと其の諷諧を如意にして悲より喜に轉するの自在なりしと其の人生觀の健全なりしこと其の先天的に文學を愛して之れを解釋するに妙を得たりしこと其の想像の高上なりしこと等なるへし。ショー曰はく

ウォールズチオスは隱者風の由圖詩人なり而してラムは都會の生活中より其のインスピレーションを得たり而も誠實、微妙、深遠は毫も彼れに譲らず

と。げにやラムは純然たるロンドン兒なりき。彼れは都會を去るとを無上の不

*W. Hazlitt.

幸と感じたりき。當代の批評家トマス、デクインシーは彼れをたゞへて單に英國にてのみならず歐洲にても第二流以下には下らざる文士なりとなし其の文學上の功績は佛のラ、フンテーヌと伯仲すと評しき。

*ウィルヤム、ハズリットはチャールズ、ラムとは異なる方面に於て時の文壇に重きをなし、詞客なり。一千七百七十八年に生まれて一千八百三十年九月に歿しき。最後の三十年間は彼れにとりて最も不幸なりし年なりき。生計の不如意なりしが上に妻に棄てられ人の爲めに欺かれ又主義の敵として保守黨の雜誌殊に『クォールタリー』及び『ブラックウッド』に攻撃せられ親しき友とすらも交りを途ぐる能はざりき。是れしかしながら情熱餘りありて猖けに過ぎたりし性の致し、所なり。文士の不遇は境遇乃至社會の状態などに因由することも多かれどハズリットの不幸の如きは主として其の自ら招く所なりき。セイーンツベリ氏曰はく

批評の才と無愛相の性質とが相伴ふは必然か將た偶然かはしばらく措く兎に角にハズリットは其の性質の矯激なりしと共に非凡の批評的伎倆を有せしは事實なり。種々の點に於て彼れは當時の大批評家なりき。

と。總じて彼れが著作は其の部分よりも其全軀に興味多きを常とせり。

但し其の最長篇“Life of Napoleon”〔那翁傳〕及び其の初期の作“The Principles of Human Action”の如きは殆んど價値なきものなり。彼れが得意の著述は品評叙説の小品なり而して其の題目の範圍いと廣く集めて別冊子となしたる物のみにても十種の多きに及べり。之れを大別して三種とす第一は美術演劇に關するもの第二は總稱して雜論ともいふべきものとて第三は文學に關する評論なり彼れ雜種の評論にも秀てたれど文學の評論には更に一段の妙を得たりき。按ふに文學に於ける其の學植は他の場合に於けるよりも一層深淵なりしなり。然れどもまた時にはラム、ハント等の容易に發見し得しことをすら誤解せしこともあり而して多少の偏頗と迂濶とは彼れが評論のこゝかしこに常に存する缺點なり而も“The Characters of Shakespeare” “The Elizabethan Dramatists” “The English Poets” 及び “The English Comic Writers” の四大篇及び其の他無數の斷片に就いて之れを觀るに彼れは英文學を評論せし英國人中に裕かに第一流たるの位置を占むべきものなり。彼れは彼のスペンサーが「詩人中の詩人」と稱せらるゝ如く或は批評家中の批評家とも推稱せらる。彼れが過誤は部分に於ける過誤にして全體に於ける其の批評

の實質は人の容易に企及し得ざる所なり。

此の時に方り所謂コクテール派即ちハント、ハズリット等の一派に反對し且つ保守主義に抵抗して興りたる壯者の一團夥あり之れを “Blackwood's Magazine” の一派とす。筆鋒の鋭利なる之れに當る者悉く傷くの概ありき而して彼の『エヂンバラ評論』に伴へりし黨同伐異の陋風絶えて無かりき。最初はジョン・ウィルソン John Wilson チョーン、ギブソン、ロックハート John Gibson Lockhart 及びチャームス・ホッグ James Hogg 等筆を執りて盛に『エヂンバラ』の固陋を攻撃せしが程なく愛蘭土の南部より學識經驗に富めるウイリヤム・マギン William Maginn 來りて之れを扶け大に其の誌面を整頓しき。此の一團中最も年長なりしものは

*ジョン・ウィルソンなり。抑『ブラックウッド雜誌』は名義上はブラックウッドの發行なりしが其の編輯は共和的組織によりて成り別に主任と稱する者なかりしが常に其の運動の指導を掌りしはウィルソンとロックハートとなりき。

ウィルソンの叙説文は平凡稱するに足らず其の詩歌はたスコット、バイロン及び湖畔派詩人の間に立ちては特別の光輝を放つ能はず只其の雜種の叙説文は此の種の

*J. Wilson.

筆に一生涯を開きしものと稱すべし。其文の強健にして富麗なる古今に比類多からずとす。按ふに雜種の記事たるや従前は概ね無味乾燥にして散文を以て名ありしパーク、ギボンなどに尙ほ時には冷淡枯槁の憾ありしにウィルソンに至りて一機軸をいだし花あり實あり肉あり骨ある一軀を翫め枯淡の記事には尤も句調を注意し嚴肅なる論文の次ぎには輕快の談話を置くなど全體の配置調合甚だ宜しきを得たりしかば讀者卷を終るまで厭倦をおぼえざりき。さもあれもと深大の學識準確なる持説あるにあらねば其の百般の事を評騭するや往々にして是非眞實を混同せしことありされば其の雜著集大抵『ブラックウッド』に掲げしもの十卷を取りて之れを通覽するに其の文章の形式雜多なると同時に其の内容はた精粗不同なり忽ちにして嚴肅雄大忽ちにして些屑陋俗忽ちにして沈痛激越忽ちにして冷淡輕浮時には文學の深刻なる解釋者の如く時には區々たる死記の徒たり。讀書社會の彼れに對する褒貶の一定せず今日に至りては一時赫々たりし名望の大に衰へたる趣あるも宜なるかな。

ウィルソンと相併びて『ブラックウッド』社の牛耳を執り善く之れと相交り而も別様の

*J. G. Lockhart.

趣味を以て當時に顯はれたりしものはジョン、ギブソン、ロックハートとす。

ロックハートの雜著は未だ別冊に蒐集せられたるものなけれど其の作はいと夥し其の論說の範圍も廣く諸方面に涉りて見るべきもの尠からず。彼れは論じ且つ作せし人なり。嘗て『ブラックウッド』紙上にてキーツを罵倒し又『クォールタリー』にてテニソンを譏刺せしが如きは其の過失の甚だしきものなれど流石に詩人としても取り所なきにあらざり否超凡の才を有せしと明らかなり。其の“Spanish Bards”は(一八一三)サウシーとスコットとを典型として作せしものなるが頗る見るべきの作なり。又彼れが時々物せし小篇は諷諧に秀で且つ間々燃ゆる如き情熱を示せり。然れども詩歌は畢竟彼れが閑餘のすさびにして其の本領は散文に存したり。散文の著作中最も名あるものを『スコット』傳とす。スコットが人物の温良高雅にして才學のいみじかりしと其の閱歷に關する材料の富豊なりしとは蓋し此の書の成功に尠からぬ便益を與へしならめど編者が功勞もまた多きに居る。こは彼のボスエルが『ジョンソン傳』と相併びて古今人物傳中屈指の名著たり。『那翁傳』スコットの『那翁傳』を撮要せるものはた多く之れに譲らず。彼れの小説は概

ね失敗の作なるが中にて最も佳なるは“Adam Blair”なりこは“Valerius”と同年(二八二一)に成りしものにていと短かき作なれど脚色も人物も宜しきを得たり主人公なる寡夫が隣家の細君を戀慕する切情などよく寫したり。

*トマス・デクインシーはウイルソンと同年(一七八五)に生まれて同五十九年に歿しき。彼の全集すべて十四冊に收めたるものの中“Confessions of an Opium Eater”(一八二一出版)は最も有名なる作にて文章の雄渾暢達古今多く其の儔を見ず。レズリー、スチーブン氏が彼れの文章を稱揚して之れを假りに意義なき文字とせんも其の高渾なる風調は尙よく讀者を動かすに足るといへるは必ずしも溢美ならざるべし。さて其の史論雜説の類にては“Flight of the Kalmuck Tartars”を最も佳なりとす。蓋し其の篇の何等の種類に屬するを問はず彼れが作の最も精妙なる個處には概ね夢を假りて其の想を表せるもの多し是れ其の得意の獨壇場なりき。曩きにウイルソンを評したる『クォールタリー』の記者又デクインシーを評して曰はく

たび去りて『フラックツッド』は其の繼相者を得る能はざりき彼れが文章は他の倣ふべからざるものなればなり云々。

*リー・ハントは詩人としても知られたりしが其の本領は寧ろ散文の批評にありしが如し。而も其の詩人的温情は他作家を諷刺嘲弄するよりも寧ろ其の末技にだにも同情を寄するの傾向を馴致せりき。彼れは健筆比ひ少なく一人にして日刊の諸記事を擔當し“Tatler”を發行せし時の如きは十八ヶ月間全く他人の力を借らず又“Leigh Hunt's London Journal”を刊行せし時の如きも二年間其の紙面の半ばを引き受け尙ほ傍ら他の新聞紙雜誌の寄書家となりて絶えず其の著を掲げきといふ。但しかゝる斷篇は概して劣著たりしこと勿論なり。彼れは力めて説の偏頗を避け穩健着實を貴びしが如しされど尙動もすれば淺慮狹局の弊なきこと能はざりき。彼れは物の真相を看破する力敏ならざりしにあらねど流石にセイツペリ氏の所謂「蝴蝶的性質」より來れるものも多く彼の翻々として菜花に戯れ徒らに飛英を追隨するが如き失ありき。其の逸早くキーツが異品を看取せしも恐らくは此の種の觀察に基きしならんか。然れども彼れの作家を稱揚せしは一

々其の眞に銘感せし結果なりき批評の爲めに批評するが如き振舞は無かりしなり。要するに彼れはラム、ハズリット等に比すれば其の觀察の深さこそ劣りたれ誤謬は彼等よりも少かりしならん。彼れが位置は詩人たるキーツ、シェリーと批評家たるラム、ハズリットとの中間にありといふべし。

*ハートリー、コールリッチは詩人サミュエル、テール、コールリッチが長子なり。遺著七篇は家弟編輯して出版せり“Poems”一巻“Essays and Fragments”二巻“Biographia Borthies”三巻なり。中にも“Biographia Borealis”（後ち父の補修を経て“Lives of Northern Worthies”と改題して世に出だせり）は其の觀念持説の表はれたる點こそは『詩集』『論集』に及ばざれ兎に角彼れが傑作の隨一にして其の眞文學史家たることを證せり。彼れが詩篇亦父を辱めざる佳什に乏しからず而も其の本來は詩人たるに適せずして寧ろ批評家たるに適したりき。彼れが詩を作りしは周圍の風尙に動かされたりし結果のみ。其の批評の才分如何は其の『論文集』に於て見るべし庸劣なる個處も少からねど着眼の周細にして用意の全局に亘りたるは稱すべし就中“*Ignoramus of the Fine Arts*”の篇もてはやさる。

*H. Coleridge.

*ウィルヤム、マッソンは從來の史家には輕視せられたれど其の記者としての筆力と功業とは以上の諸文士と伍を與にして愧づる所なかるべし。

マッソンが著は雜誌物の外に詩歌小説の作あり詩集中“*Homere Ballads*”は有名なり。或は痛く之れを推重するものもあれど詩としては格別の作にあらず。小説は一も成功の作なけれど『*フラックウッド*』に掲げたりし小品は何れも特得の文章にして中にも“*Story Without a Tail*”の如きは趣味ある作なり。嚴正なる評論中シエークスピアに關する評論の如きは以て彼れが學識見を見るべく又其の批評眼の鋭利なるを見るべし。彼れは滑稽頓智に富み兼ねて愛蘭土風の悲哀と風調と美とを具へき。マッソンが“*Fraser*”社に網羅せりし一群の英才はいづれも當時の錚々たる詞客なりき其の業の中道にして廢せしは惜むべきとなり。件の一群は當時 *Fraserians* (フレイザー派) と稱せられたり就中最も名ありしを擧ぐれば Irving, Gleig, Egerton Brydges, Allan Cunningham, Carlyle, D'Orsay, Brewster, Theodore Hook, Lockhart, Croker (愛蘭土鬼神譚の作者) “*Jerdan, Dunlop*” (有名なる『小説史』の著者) Colt Hogg, Coleridge, Harrison Ainsworth, Thackeray, Southey, Cornwall 等あり。此等諸記者同時に

*W. Maginn.

相併びて執筆せしにはあらねど舊新過渡時代のサウヤー、コールリツヂが全く新時代なるサツカレ、カーライルと共に同一紙上に筆を執りしは奇觀なり。即ち此の雜誌は過渡時代と新時代との第二の過渡をなし、者なり。按ふに斯る現象を生ぜしかば所謂偶然の結果なるべく又雜誌其の物の性質にも由りしならんか。或は當時雜誌新聞紙類の非常に數多く出てしが爲めに其記者の估價の經濟上低減せしにも由るならんか。さもあれサツカレの如きカーライルの如きは他のエヂンバラ『改革後のマコーレー』『ウェストミンスター』のミル等と共に單に一雜誌氏を以て終りし者にあらず否或は哲學に或は歴史に或は小説に別に嚴然として殊なる一格を持ち隨うて其の文學上の事業も自らヂェ、フレイスマイス、ウイルソンの輩と異なる所あれば今此の章に於て彼等の上に説き及ぶべくもあらず委しくは章を別にして講述する所あるべし。

*ジョン・スターリングの名の今日に高きは其の文學上の功業の偉なるに由らずして寧ろ(一)其の性行のカーライルが不朽の筆によりて傳へられたると(二)彼の有名な「スターリング社の開祖なり」とに由れり。其の一生の閱歷と其思想の經過と

*J. Sterling.

より見れば常に所動の位置にのみありしが如しと雖も其著作に於ては内容外形ともに儼然たる一家の機軸ありて主張の見るべきものありしなり。但し彼れは事に當りて自ら營々せず寧ろ同輩をして其の長を表はさしむる度量ありしが故に其の社の如きも十分に當時の英才を集むるを得たりしなり。社中の重立たるものは Tennyson, John Stuart Mill, Carlyle, Allan Cunningham, Houghton, Francis Palgrave, Thirlwall の如きをはじめとして其の他第二流以下多くの學者文人を網羅したれば種類は様々なれど兎に角親密に相結合して大に當時の雜誌的文學を飾りたり。スターリング社の一員にはあらねど此の社と親密の關係を有して常に雜誌の寄書家として著はれたりし者を

*エドワード・フィッツェラルトとす(一八〇九—一八三三)。其の全集は三冊となりて出てしが書簡其の多分を占めたり這は其の批評眼を窺ふに足るべきものなり。人と爲り篤實なりしが多く人と交はらず交はれば必らず誼厚きを常とせりき。此の性質はよく其の評論に表はれたり其の言ふ所常に一方に局し自家が敬重せざる人の作に賛辭を加ふると稀なる代りに其の一たび意に稱ひし人の著に對すれば分

*E. Fitzgerald.

析解剖微に入り細を穿ち作中の妙處は一々指摘して至らざる所なし。亦一種の批評家といふべし。

以上挙げたる者の外に當時の雜誌新聞紙に關係せし詞客を數ふれば數十百の多きに達すべけれど其が文學上の事業は到底以上列擧せる者の上に出づる能はざれば今は一々之れを擧げず。

第九章 歴史家

史家と詩人——十九世紀の史家——ハラム——ロスコー——ミトフオード——
ターナーとリンガード——バルクレイヴ——マククリー——アーノルド——其
の他諸家

按ふに十九世紀に諸種の文學の勃興せしは其の前世紀の遲鈍無爲なりし反動にして自然の數のみ譬へば枯木の陽氣に逢うて再び其の芽を開發するが如し。其うち歴史は此例に似ず反動の結果といはんよりは寧ろ一進歩と稱すべきなり。前世紀の史家が遺せりし史的著述は當時の研究に尠なからぬ便利を與へたればなり。常盤木の春に遇ひていよ／＼其の緑を増せるに比すべし。蓋し十八世紀

*H. Hallam. *Napier. *Southy. *Mackintosh. *Gadwin.

に於ける大歴史家ヒューム、ロバートソン、ギボン等が餘業は革命時代に及びても打破せられず詩人政治家社會學者等に利用せられて多少の利子を生み以て十九世紀に傳へられき。

先づ過渡時代の史家を觀んか第一には餘暇乏しく史材不如意なりし時代に尙ほ一生を斯道に委ねたりしウイリヤムゴドフィン(一七五六—一八三六)あり哲學に本領を措きながら史學の功業尠からざりしジェームスマッキントッシュ(一七六五—一八三二)あり史的叙事の一新軀を擧めて“History of the Peninsular War”〔半島戦争史〕をもて讀史界を風靡せしロバートサウシーあり同じく『半島戦争史』を殆ど同時に物して批評家をして異口同音に英國海戦史中最も精好なる者と讃せしめしウイリヤム、チーピヤー(一七八六—一八六〇)あり。その他モリア、カムベル、スコット等が著作の中にも後の史家の採用すべかりし筆致着眼も少からざりき。彼等は間接若しく直接にマコーレー、カーライル等の爲めに基礎の一角を築きしものなり。以下少しくこれらマコーレー前の史家に就きて觀察せん。

*ヘンリ、ハラム(一七七八—一八五九)は歴史を以て本領とし傍ら文學に力を盡しき。

*W. Roscoe.

“View of the State of Europe during the Middle Ages” (中古歐洲諸國の情況) “Constitutional History of England” (イギリス七世よりエドワード一世まで) 及び “Introduction to the Literature of Europe in the 15th, 16th and 17th Centuries” (十五十六十七世紀中歐洲文學概論) 一八三七—三九)等は彼れが名を作し、作なり。彼れが著は政治に關するものと文學に關するものと其の價值相等しからず。前者は其の偏狹なるホイッグ派(改進黨)の主義の爲めに誤まれて少なからぬ瑕疵を有し觀察はた冷酷に過ぎたりされどかゝる一部の失は未だ以て其の長を没するに足らず證據の精確と記事の明晰とに至りては當時他に比なければなり。然れども其文學史と文學的評論とに至りては頗る服すべからざるものあり其確説として引照せる言は今や何の價值なきもの多く且つ著者みづからの所論の如きも尋常一様の人物題目に關する限りは必ずしも當を失せざれど少しく異様の題目人物を評論するに當りては一概に其の偏せる準繩を以て之れを律せんとしたるが爲めに不妥に流れ淺露に失し然らざれば乾燥となり讀者をして事の真相を會せしむる能はず。

*ウィリアム・ロスコー(一七五三—一八三二) “Life of Lorenzo de Medici” “Life of Les the

*W. Mitford.

Tenth” (レオ十世傳)の兩者共に英國によりては寧ろ大陸に愛讀せられき。ロスコーは熱心のホイッグ黨にして幾分か頑固の失なきにあらざりしかど其のホイッグの脈を紹きてよく歴史精神の普及を力めたりし功は没すべからず。

*ウィリアム・ミトフォード(一七四四—一八二七)はロスコーよりも年長にして史學上の功績も亦た多く彼れに譲らず。キッポンとは同僚にて共に熱心なる保守黨なりき而して政治上の主義を歴史に適用せし點はキッポンにも越えたり。是れ其の一生の大作 “History of Greece” (希臘史)(一七八四より一八一八に至る三十四年に亘りて出版せらる)に著大なる瑕疵ある所以なりさもあれ當時行はれたりし希臘史中には之れに匹敵すべきものは絶無なりき。

ロスコーとミトフォードとが斯く外國古代の歴史をのみ研究せりし間に二名の壯年史家現はれて國史研究の緒端を開きぬ。之れをシャロンターナー(一七六八—一八四七)及びジョン・リンガード(一七七七—一八五一)となす。

リンガードは舊教派の僧にしてはじめは宗教上の著述と説教とに従事せりき。其の歴史上の著述は事實の精確と編纂法の熟練と自家が宗教主義に拘泥せざる

*S. Turner

*J. Lingard.

公明と其の文章の雅馴とによりて空前の良著と稱せられたり。實に彼れが著は其の斷片の末までも後の史家の模範たるに足れり。ターナーは彼れに比して更らに幾分かの異彩あり其文の美こそ遠くランガーに及ばざれ英國史の研究に熱衷して陸續著はし、史籍のうち『History of Anglo-Saxons』、『アングロサクソン史』一千七百九十九年出版は従前の史家が進むに躊躇せりし難境に歩を投じ遡焉たる開國の昔に浜りて雜然たる傳説の中より仔細に虚實を討究して始めて一道の明路を開きしもの其の功勞は永く後人の謝すべき所なり。

*フランス、バルクレイズ(一七八八—一八六二)は英國古代史に關してはターナーの繼嗣たり。『History of Normandy and England』の一書は一生の大著としても耻かしからぬものなり。其の二子亦た父に繼いで名あり其のうち一人は尙存すといふ。バルクレイズと相併びて

トマス・マクラー(一七七二—一八三五)あり蘇格土新教派の史家として一方に雄視せりき。ウオルター・スコットが『Old Mortality』を痛罵せし評論の如きは固陋淺薄殆ど讀むには堪へざるも熱心の考察を以て蘇格土と英倫土との古史を調査して編撰

T. M'crie. *F. Palgrave.

せし『Lives of Knox』(一千八百十二年出版)及び『Melville』(同十九年出版)の如きは價值ある著述なり。前に漏れたる知名の史家と其の著の重なるものとを次第不同に擧ぐることに左の如し。

バトリック・フレージャー・チャター Patrick Fraser Tytler (一七九一—一八四九)……『History of Scotland』など。

アーチボルド・アリソン Archibald Alison (一七九二—一八六九)……『History of Europe during the French Revolution』など。ヘンリ・ハート・ミルマン Henry Hart Milman (一八六八)……『History of Christianity to the Abolition of Paganism』、『History of Latin Christianity』など。ショール・マクロー George Grote (一七九四—一八七二)有名なる『History of Greece』の著者なり。コンノップ・サールナル Connop Thirlwall (一一九七—一八七二)……『History of Greece』など。

此の他マコーレー出でしまで一時尤も合名ありし歴史家は彼のクラッドストロンの師たりし。

*T. Arnold.

*トマス、アーノルドなり。『History of Rome』(『羅馬史』)、『Introductory Lectures on Modern History』等の名著あり又其の宗教文學の議論は當時尠からぬ勢力ありき。此の歴史は叙事の粹裁學術的にして取捨選擇宜しきを得たり。其の文亦明晰にして適勁なり。

第十章 マコーレー

マコーレー——其の著述——其の特質——韻語家として——論文家として——歴史家として——彼れが史筆の特質——マコーレーの人格

天の人に附與する無上の恩賜は聰明なる資性を享けて生れ恩威偏せざる父母の手に育てられ終生順境に處して名を揚げ家を興し永く後生に推重せらるゝとは是なり。^{*}トマス、バベントン、マコーレーの生涯は恰も此の例に當れり。一千八百年某月に生まれ全五十九年二月逝く。彼れが名譽ある閱歷性行及び逸事は一時の話柄となりて喧傳せりしが尙ほ其の詳傳は數年の後ち甥ジョーロッパ、トレメルヤンの手にて編せられき。この傳趣味ある記事に富み文章また雅馴平明ホスエルの『ジョンソン傳』、ロタハートの『スコット傳』と共に人物傳記中屈指の著に屬す。彼れが

*T. B. Macaulay.

傳はこの書に譲りてこゝには今述べず。

マコーレーは當時の實際社會に於ける理想的紳士とも稱すべく種々の方面に於て傑物たりし如く文學上に於いても亦第一流の地位を占めき。今便宜のため其の一生の著作を韻語論文及び歴史の三類に分つ。こゝに其の演説類を畧せるは其の内容の政治に關する所多く文學には縁遠ければなり而も文章として之れを見れば論文よりもむしろ一層雄渾にして抑揚波瀾の妙に富めり特に老後の演説の如きは麗を銜はず奇を求めざるに威儀自ら備はり十萬の王師肥馬盛裝して以て胡兵に向ふの概あり。

さて以上三者は何れも稀有の好評をもて迎へられしものなるなるが稱贊の眞價以上なりしだけに其の反動も亦た甚だしく歿後程なく種々の批難を蒙りたり。其の史論は淺薄を以て目せられ其の文章は千篇一律と筆辯とを以て難ぜらたり。就中最も劇しく攻撃せられしは其の韻語の作にして博學卓識を以て第一に推されたりし批評家マッシュレー、アーノルドの如きも彼の『Lays of Ancient Rome』(『古羅馬譚』)を甚だしく嘲難したりき。而して韻語に對する此等の非難はマコーレー恐ら

くは辭する能はじ彼れは決して秀てたる詩人にはあらざりしなり。彼れが思想は餘りに積極的、實際的にして其の辭句はたあまりに明白(時としては露骨)なりき。されど彼の夢現の兩界に逍遙し現にありて夢を描き夢に遊びて現を寫す底の妙機は彼れの到底企及し得ざる所なりき。詩として稍見るべきは其の最短篇(寧ろ世に知られざる)『Jacobites』『Epitaph』『The Last Buncleer』等たるべし但し其の詞(彈例へば『Jury』『The Armada』及び『Naseby』の如きは押韻嚴正にして句々金玉の響あり意達し筆從へる概あり。而も彼れは到底文章家にして詩人にはあらず其の辭は妙なるも俗腸を悦ばしむるに足るのみ其の調は佳なるも俗耳を樂ましむるに過ぎず天地人の神韻を歌ふがときは彼れの能くせざりし所なり。要するに彼れが詩は其の政治的事業と一般、一時的にして永久的にあらず宜なり其の『無敵艦隊』に成功して『古羅馬譚』に失敗せしや。

詩に全敗せしマコーレーは散文に多大の功を成せり。其の論文の如きは兎も角も同種類中たぐひ多からざる者なり。『ミルトン論』のはじめに『エヂバラ評論』に掲げられしやヂマフレは其の文の異彩あるに驚き嘆稱して曰はく、君はそも那

邊よりか斯かる文致を得來りしぞと。而してマコーレーの能文は決して偶然に成りしものにあらず彼れは大學に在りし間常に思を潜めて希臘羅馬の古文章を研鑽し傍らよく近世の名文章に注意し就中キッポンとハズリットとに私淑し嘗て私かに二氏の躰を折衷し之れに自家特有の風致を加へ推敲万回して一篇の論文をものせしとありそは公にせざりけれど是れは『ミルトン論』よりも數年の前に成りしものなりといふ。彼れは老年に至るまで當時の苦心を忘れず常に該篇を以て『ミルトン論』の上にありとなしにき。一生中に物せる傳論の重なる者は『ミルトン』『サウザー』『ピット』『チャーサム』『アチンソン』『ホレース』『ウォルポール』『クライヴ』『ヘスチングス』『フレデリック大王』『王政復古時代の劇詩家』『ボスエル』『ハラム』及び『ランケ』等にして何れも皆殆ど同様の得失を具せり。蓋し彼れが議論と批評とは動もすれば岐路に走り本論の範圍外に亘る。かゝる批評も或種類の讀者にとりては却りて興味あり亦幾分かの益なきにもあらねど惜むらくは文學に對するマコーレーの所見は高尙深遠なるものにならず隨うて俗流を抜け出でたる讀者にとりては著者が縷々の辯は偶々以て厭倦を醸さしむるに足るのみ。加之著者が博覽強記

は往々にして其の著に累をなしき又其の過分なる材料準備は往々著者をして其の取捨に迷はしめき而して其の弊殊に印度に關する諸論説を多しとなす。是れ其の論の概して散漫に流れ徒らに廣きに過ぎて深きに至る能はざりし所以なり。且つや彼れの積極的なる如何なる難題をも疑問の姿のままに存し置く能はずして強辯曲解以て其の斷案を得んと欲しき彼れが眼より見れば如何なる者も不可思議ならず如何なる人物も隱微を有するとなかりしなり。其の人物を批判するや庖丁の牛を解くが如く而も餘りに截然たりまた餘りに歴然たり。其のスヰフトを「天才ある猶太人」と速斷しベーコンを「大智ある俗骨」と速斷しマーボローを「貪欲にして慧智ある狗盜」と速斷したるが如き概ね此の類なり。然れども彼れが文章には一種靈活の氣あり其の見聞若しくは想像せし光景其の信ぜし所の議論其の感ぜし所の情念は最も明快なる文章によりてさながら讀者が心念に入る。彼れは此の明快に加ふるにスヰフト、コッベット輩が企て及ばざる詞藻の豊富を以てせり故に其の文雄渾にして瑰麗晴日高厦の輪奐たるを望まんが如く暢達又平順なり駟馬を大路に驅らんが如し。而も是れ皆彫琢刻鏤の餘に成りしものなり。

以下少しく彼れが本領たる歴史上の著作に就きて觀ん。

彼の大篇「History of England from the Accession of James II」は流石に其の全學識を集注してもものせる者なれば一見恰も彼れが諸論文を集大成したるものゝ如く中にも第一卷は最も勝れたり。其のチャールス二世崩御後の英國の狀勢を叙せるや銳利透徹の史眼を以て從來の諸史藉傳記を博涉しよく事實の眞否を判別し錯綜混亂せる當時の社會を整理詳寫せる縦横自在の筆は尠くとも稀有と稱するを得べし。然れども此の書あまりに浩瀚なるがうへに著者が其の黨派心を禁ずる能はで動もすれば或個人の爲に曲説強辯し要もなき些事に紙筆を費し竟にかゝる過大なる冊子をなすに至りしは惜むべき次第なり。さはいへど此の失は始終マコーレーに纏綿せしにはあらず黨派に關せざる事を記するや彼れは史家の公正を失はず秩序整々繁簡宜しきを得たるのみならず毎に一樣の熱心を以て仔細に周圍の事情を察し例の明快の筆を以て之れを叙し諸者をして親しく聞睹するの感あらしむ。

更に一言すべきは彼れが其の歴史中に文學の變遷をも併叙せしこと是れなり。

按ふにこの歴史と文學との併叙法は英國にありてはマコーレーに始まるといふを得べし。彼れは十分の注意を以て時勢と文學との關係を觀察せしのみならず彼の好古家若しくは風土記著者の如き熱心を持して親しく詩人文士の生地を觀察し以て其の地勢風土の特質をも活寫せり。

要するにマコーレーは英國紳士の好標本なり。彼れは多能多才當時の學問藝術殆ど通ぜざる所なかりき。たゞし抽象的なる數學と哲學とを好まず中にも哲學を無用の長物と貶し詩歌の妙を判ずるにも人情の微を察するにも悉く英明なる常識を以てせりき。然れども又よく他人の説を聞くを好み如何なる劇務にある時も嘗て讀書を廢せざりき而して其の強記なりしはミルトンの『失樂園』を暗誦するにたゞ二回の通讀をもてしきと傳へたるによりても知るべし。彼れは終生無妻なりしが幼兒を愛すると人に超え其の甥と共に戯に演劇するとをこよなき樂みとなせりき。其の自作の脚本は全く此の用にとて作りしなりき。又友誼に厚く一たび交はれば必らず其の誼を遂げにきされば人稱して「全身悉く善良の人」といへりき。

第十一章 カイライル

其の血統——其の諸著——カイライルの品性と功業——文學者——歴史家——
其の特質——其の人生觀——宗教觀——諸家の批評

凡そ如何なる時世にも謳歌すべき方面あれば必ず彈効すべき方面もあり。第十九世紀前半の如きは此の兩面の最もいちじるかりし時代なりマコーレーと共にカイライルの世に出でしは蓋し異しむに足らざる也。兩者は共に散文學上の傑物たりしのみならず政治上社會上の思想に於ても其の進歩せるもの、代表者なりき。第十九世紀半前に於ける英國世相の全豹は略々此の二人によりて窺ふことを得べきなり。

トマス、カイライルは一千七百九十五年十二月蘇格士ダムフリースシャヤなる小邑エックレフェカンに生れき。

彼れが輕營慘憺の著は有名なる「*Sartor Resartus*」『衣服哲學』なり架空の獨逸教師トイフェルスドロアを一篇の主人公として盛に宗教、哲學及び文學に關する奇説を吐かしめたる縱横自在の滑稽の間深刻骨に透る諷刺あり兎も角も奇著といふべ

し。此の書の成りしは一千八百三十一年なり。而してロンドンの書肆中一人も其の出版を承諾するものなく、纔かに親友ロックハートの厚意によりて『フリーザー雑誌』に掲載せしが大聲俚耳に入り難く罵詈嘲譎の悪評は雨の如く下り中には彼の文は句頭より讀むも句尾より讀むも全く同意なりとすら譏笑せし者もありき。獨り只一面識の友たりしエマソンは亞米利加に在りて大に之れを推稱し百方盡力の未始めて一巻の書として米國にて出版せしめたり。既にして世は漸く偉人の聲を解するに至りしかば爾後四十七年の間に彼れが最大作『History of the French Revolution』、『佛蘭西革命史』をはじめとして有名なる『Heroes and Hero-Worship』、『英雄論及び英雄崇拜論』、『Christianism in Past and Present』、『過去及び現在』、『雜論集』及び『佛蘭西革命論』に次ぐの大作『クロムエル傳』、『Oliver Cromwell』等成りぬクロムエル傳の成りしは一千八百四十五年なりき。此の時彼れが名聲漸く高く世人はた作毎に其の意を理解するに至りしかば此の著はじめて廣く歡迎せられ忽にして數版を重ねき。之れをカーライルが著作の社會に好遇せられし初めとす。エクレフェカンの窮措大は今や文壇の獅子王を以て目せられて一吼百獸

を偕伏せしむるの概ありき。

この他には最も激烈なるスキャットの諷刺(寧ろ叱咤)ともいふべき『Latter-Day Pamphlets』穩雅周細の文彼れが著作中稀れに見る所の『スターリング傳』及び彼れが畢生の心血を搾りて成れる苦心經營の作『フレデリック大王傳』等いづれも一世の讚歎を博せしものなり。一千八百十一年に殆しき。齡八十七。

カーライルが遺篇は其の傳と共に史家フルードの手にて出版せられしが其の記事所傳者の性行及び内密事に亘りてカーライルが名譽威信を毀損する嫌ひ多かりしかばカーライル崇拜者は皆起ちてフルードの所爲を咎めたり。されど兎に角にカーライルが品性の不具なりしと其の一生涯の幸福ならざりしとは明かなり而して彼れと生涯を共にせし者もまた幸福たる能はざりしや事實なり。其の妻ウエルシが晩年人に向ひて天才の人の妻たることの不利不幸なるを戒告し遂に其の夫に請ひて別居を求むるに至りしにても其の然りしを知るべし。按ふにカーライルは傲岸の人唯我獨尊の人何人に對しても其の現存者なる以上は決して敬意若しくは満足を表する能はざりし人なり否大概の人に對しては嘲罵の口を

衝いて出づるを禁ずる能はざりし人なり。其の例外たりし者按ふにゲーテのみならんか彼れは口を極めて社會の敗風を叱咤せしも如何にして之れを救ふべきか明確なる方策を建てしことはなし。彼れは寧ろ破壊者なりき。野に叫ぶ豫言者に似たる所はあり理想ある救世者を以て目すべくもあらざりしなり。彼れの語は常に漠々たりき。是れ其の初めに於て世人に了解せられざりし一因なり。さもあれ世の漸く彼れを知りて其の語を解するに至りしや初めは無意義の妄語の如く思はれしものも導世の箴言となり矛盾の怪説を見えにしものも語逆理順の格言となり十九世紀の英國に於ける豫言者として有爲なる青年間に偉大の感化力を有するに至りき。而して此の反動は最近二三十年間に至りて更に第二の反動を惹き起しカーライルが名聲は甚しく墜落するに至りたれどそは前の崇拜のマコーレーの場合にひとしく眞價以上に流れたりし必然の結果のみ二つには時勢進歩の結果なり。

いふまでもなく溢美なれど豫言者としてのカーライルの功も没すべからざるものなきにあらねどそは社會上の事業なれば暫くさし措き偏に其の文學上の事業にのみ就きて觀んに彼れは所詮詩人たるよりはむしろ宗教論者、宗教論者たるよりはむしろ批評家、批評家たるよりはむしろ歴史家たりし人物なり。其の著述いと／＼浩繁なれど其の半ばを占むるものは彼の三大著『佛蘭西革命史』『クロンウェル傳』及び『フレデリック大王傳』にしてこれらは皆純然たる歴史若しくは詳傳牒の歴史なり。其の他『シルレル傳』『スターリントン傳』は史と傳とを兼ねたるもの『サルトル、レザルタス』は自傳牒の著而して主題の多く文學的なる『雜論集』すらも大かたは史傳の質を有せり。例へば『英雄論』『過去と現在』の大部分『那威古代の諸王』『ジョン、ノックス論』の如き是れなり。夫の政治上の議論を録せる『ライスト、デー、パンフレット』すらも凡そ一國の政事は其の歴史的事件に至大の關係ありといふ主意に基きて物したるものゝ如し。個人の行爲は歴史を造り歴史は又よく個人を造る猶ほ一波の動いて萬波のつゞき起らんが如しとカーライルが終始口にせりし所なり。さればこそ彼れの文學を批判するや文學を單に文學として獨立的に批判せずして常に之れを史上の一現象として批判し且つかくせざる世の批評家等を異端を修する者として難じたれ。さて此の歴史主義はそが哲學上の意見に

も及びたり彼れは政治哲學、宗教哲學、純理哲學其の他の哲學其の何れを問はず其の終極の目的は社會の現實を離れて抽象的に事物の眞理を學ぶに有らずして寧ろ實際的に現在に應用し未來の人間を嚮導して正道に上らしむるにあり換言すれば現在未來の人間をして天上界に到らしむるの道を發見するに外ならずとなせりき。

彼れ既に斯かる主義を持して史傳を編めりき文致はた此の主旨に伴はずんばあらず。彼れは謂へらく史上の出來事は成形の固^{コウ}躰^{テツ}なり幅あり長あり深さあり筆紙の記叙し得る所は線のみ線は以て躰の各外面をすら描く能はず况んや其の内^{ウチ}面部^{メンブ}と實質^{シツシツ}とをやとの於是彼れは其の叙事の躰に一機軸を出だし破格の筆を驅りて不羈奔放ひとへに事件を叙寫して餘蘊なからんとを力めたり。試に『佛蘭西革命史』を繕きて之れを見よ。忽ちにして繕窓の麗姫、忽ちにして野人ミラボー乃至其の父の狂行、忽ちにして暴徒の囁集、忽ちにして南園の葡萄架。外國の關涉を叙しては列國公使の容貌態度得失に及び前代の盛世を論じては英雄事業の頽廢と不滅とに及ぶ。何れが先にして何れが後なるか何れが主にして何れが客なる

か秩序あるが如く亦た無きが如く關係あるが如く亦た無きが如し。テームスは曰はく、知りて之れを讀めば身活劇場裡にあるが如く知らずして之れを讀めば徒らに岑々たる頭痛を醸成するのみと。然りカーライルは該革命の活劇をまづおのが腦中に書きいだし頭ゆらぎ目くるめくに及び咄嗟之れを筆に現じたりしなり。『クロンフェル傳』と『フレ德里ッキ大王傳』はた同一の筆致に成れり。冷靜なる史家の眼を以て觀察し慎嚴なる史家の筆を以て徐かに過去を叙述せんよりはむしろ炎々たる詩人的同情を傾けて全身を其の事件の爐中に投じ造化に代りて再び該事件を活現し以て後の讀者をして大人間史の一端を睽々裡に看得せしめんとする是れカーライルが修史の理想なり而して其の文章の滅烈と險怪とは此の意に伴へる必然の結果のみ。

彼れが本領たりし歴史の特質は略以上の如し。以下少しく彼れが人世に對する觀念を窺ふべし。

テームス曰はく、カーライルは清淨教徒の隨一人なりと。而してカーライル亦た曰はく、清淨教徒主義は吾が所謂英雄主義の殿最後の現象なりと。然れども彼れは

到底純粹なる清淨教徒にはあらざりしなり。其の信仰の根本はあくまでも眞摯にして上帝を尊び永劫を忘れざる點はげに清淨教徒の信じたりし所にひとしと雖も彼の嚴に己れを持するの餘り他を律するとの峻嚴に過ぎ遂に甚しく情に悖り冷酷に趨るが如きはカーライルの(趣)とも理想上に於ては(思)む所なりき。彼れは詩人的熱情を以て衆に同感するを理想とせりき。清淨教徒は塵寰を穢土と觀じ人間を罪惡の動物と見一意上帝に奉事するをもて善となす。而してカーライルは謂へらく是れ豈に自然と人間の半面を限蔽するものにあらずや。「人は盲徒と束縛とを脱してさて信心堅固なるを得べきにあらざるか。正義の爲めに不撓不屈而もよく邪を怒るの度を失せざるを得べきにあらずや。德行高くいみじうして而も能く向上擴張の近世的精神を有しべきにあらずや」と。是に於てや彼れはゲーテが著を繕きて其の所信を固め其の疑團を釋きにき。清淨教徒は曰はく「善を行ひ以て上帝に事へよ」と。ゲーテは曰はく「善美を併せよ一切を併せよ而して圓滿の人となれ」と。見るべし前者の峻嚴にして偏局し後者の自由にして廣大なるを。是れカーライルの竟に清淨教主義以外に逸出せし所以なり。

カーライルが哲學、宗教に關する思想は獨乙の碩學に負ふ所多し。然れども彼れは抽象的に人間及び天道の解釋を求めんとせし者にあらず。ゲーテはカント、ヘーゲル等に比すれば其の説きかた抽象的ならざれども尙ほカーライルとは趣きを異にす。ハリエツト、マーチノイ曰はく

「ゲーテの廣大にして明光ある人生觀は晩年のシェークスピアの同じく氣霽れたる時高きに登りて靜かに人界の景象を見渡すの概あり。カーライルの豫言者的運動は譬へば垢面敝衣にして雜沓紛擾の間を縱横に馳驅するの趣あり」と。

夫れ英國第十九世紀の初期は有形無形の事物の一事に伸張せし時新生存の途の頓かに開かれし時農業工業商業の希有の勢ひを以て一時に隆盛に赴きし時なり。而して之れを獎勵し之れに謳歌せし者は彼のマコーレーなり。さもあれ人間は永く燦然たる外飾にのみ眩惑して其の當來のと歸趨とを窺ひ知らずして止むべきものにあらざりカーライルが熱罵も亦た所以ありけり。

第十一章 カールライル以後の歴史家

キングレーキ及び其の同時の諸史家——フォオスター——バックル——フリーマン——グリーン——フルード——其の傳——其の諸著——其の文章

カールライルの歿後歴史界は一頓挫を経験し只纔かにフルードのありて舊全盛の餘光を傳へたりしのみ。さりとして修史の業の萎靡せしにはあらず否マコーレー、カールライル等の蹤を追うて一生を史的研鑽に委ね種々の方面に於て史界を開拓せし者尠少なりきといふべからず。今その中に就きて最も有名なる者を擧げんに

*アレクサンダー・キングレーキ(一八一——一八九一)は博覽強記考證の精を以て一時に冠たり。“Fothern”と題せる東洋漫遊記“History of the Crimean War”(クリミア戦争史)は彼れが二名著と稱せらる前者は文章の華麗を以て勝れり後者は博引傍證所謂恐るべき考證の一例に屬す。但し著者は最も些細なる事件だに能く其の相互の關係を發見し一々之れを組織して有機的全體たらしむる技倆を有しき。只惜むらくは一回の戦争に一卷を費し二年間の記事に八巻を費せるが故に史と

*A. Kinglake.

しては寧ろ煩に過ぎたり。且つ其の文體は甚だ華麗にして流暢なるも往々にして新聞紙の雜報若しくは小説の如き文體となれり且つや自家が政治上の私見に泥みて記事に公平を失したる個處も少からず。

*ジョン・フォオスター(一八一二——一八七六)は多年「エクザミナー」の記者として史傳の著に名あり殊に英國内亂時代の史に精通し“Arrest of the Five Members”を著しし傳記ものには「ゴールドスミス傳」「スキャフト傳」「ランドレア傳」等の著あり。純文學の考證にも長じカールライル及びブラウニングに精通せり。

さて此等の史家の中にて最も異色を呈したりし者はヘンリ・トマス・バツクルなるべし。“History of Civilisation”(文明史)は其の名著なり。著者はもと全歐洲の文明史を編述せん志なりしが此の第二卷の出でし翌年に夭折せしかば完成せしは纔かに英國の分のみなり。此の書の出でし當時は世間の好評甚大なりしが程なく反動生じて遂には不當の嘲罵をすら蒙るに至りき。此の書や其の編述の軀裁は勿論文致論旨に至るまでも盡く純然たる佛國風の著にして着眼の奇警觀察の精刻叙事の明晰議論の大膽など佛人中にてもテーマを除きては當時殆ど比肩す

*H. T. Buckle *J. Forster.

べきものなかりしならん只動もすれば粗放なる獨斷に流れ事件の關係を見ることあまりに直線的なりしが上に彼の佛人の口癖を學びて絶えず英國人は職工氣質の人種なりなど嘲刺せしかば一しほ英國人の反感を招き非難攻撃一身に集りにき。按ふに公平なる眼を以て見るも獨斷の甚しき箇所多かるは拒むべからざる所なり。彼れが議論の憑據として引用せる事實は大概議論の奴隸たるに外ならざる姿あり。彼れは事實を基礎として議論を立てずして議論成りて後ちに事實を取捨選擇せし觀あり。されど其の着眼は流石に奇警にして發明する所尠からざるのみならず其の文章はた明快にして力あり殊に初學の讀者は知らず識らず吸引せられて卷を掩ふに至るまでも餘事を思ふの邊なからんとす亦た以て史壇の一名著となすに足る。

*エドワード・オーガスタス・フリーマンはバツクルと同年に生まれ三十年の後に歿しき。文明史家としてはバツクルに似たる點も尠からねど教育好尚及び宗教上の思想は兩者全く途を異にせり。"History of Norman Conquest" (ノーマン征服史)はそが第一の名著なり。他に"History of Sicily" (シチリア史)の未定稿あり。彼れ

は當時の史壇に於ける最も忠實なる學者なりき。其の所説の今尙ほ依憑すべきもの多きはいふを要せず史中に建築の變遷を附説せしなど彼れが創意として最も推稱せらるゝ所なり。フリーマンが文章の畫的なるは悦ぶべしと雖も爲めに動もすれば冗漫に流れ厭倦を催さしむるもの少からず且つ其のあまりに多く隱喩を用ひたるは彼のマコーレーが聯句癖にひとしく叙説の躰を傷けて餘りあり。されど兎に角もフリーマンは當時の史界第一流の人たり殊に其の十一二世紀の記事の如きは他の企て及ばざる所多し。彼れは雑誌新聞紙にもたづさはり「土曜日評論」の寄書家として多年社會問題政治問題に筆を執りにき。フリーマンが門下彬々たる英才多し中にも其の秀でたるを

*デモンリチャード・グリーンとす。數多の著述ありし中に殊に"Short History of English People" (英吉利國民小史)は最も好評あり。グリーンは熱心に時人を導きて社會文學、風俗、宗教、其他百般の事に史的觀察を爲す風を養はしめんと勵めき。此の希望は従前の史家とても抱けりしがグリーンの如く通常の方法を用ひて好結果を收めし者はなかりき。彼れは時人の耳に入り易き近代の思想に基礎を置きて

*J. R. Green.

*E. A. Freeman.

古へを觀察し其の今日あるを證し加ふるにマコーレーぶりの瑰麗なる文を以て論叙し知らずくの間讀者をして詩的觀察の趣味と利益とを知らしめき。又「一事史」といふ者の編著に従ひ時代を逐うて國史の出來事を詳叙し數十篇を以て完結せんの豫定なりしも夭折せし爲めに纔かに「The Making of England」『英吉利開國』「The Conquest of England」『英吉利克服』等二三篇にして止みにき。かばかり歴史家は多かりしが其のうち特に著きはフルードなり。カーライルの歿後歴史家として文章家として十九世紀後半の文壇に驍名を轟かせし^{*}デュームス、アーンソニー、フルードは千八百十八年四月ダーチントンに生れぬ全九十四年に逝りき。一千八百五十六年「History of England from the Fall of Wolsey to the Defeat of the Armada」の第一卷を編せしを始めとして雜論集「Short Studies」「The English in Ireland」「愛蘭土に於ける英國人」「Oceana」及び「The English in the West Indies」「The Two Chiefs of Dunloy」「愛蘭土に關する歴史小説」等の著あり「English Seamen」は其の死後に梓に上りぬ。フルードが歴史編述の方法を見るに彼れは事實を精叙するを主とせしよりは寧ろ之れを論定するに力めし傾きあり隨うて頗る物議を醸したりしが所詮彼れをしてかゝる体裁を撰ばしめしは半ばは時勢の然らしめし所なり。夫れグロー、マコーレー及び晩年のカーライル等が當時の讀史界に歡迎せられし主なる理由は事々件々を精細詳細に叙説したる點にあり而してかゝる精細詳細なる叙説は多年間の精勵の結果なりとして稱歎せられき。然るにフルードの事を叙するや之れに比ぶれば遙に粗なり而も其の議論を行るや更に密なり是に於て輕斷なる讀史界は臆測すらく其の力むる所疑ふらくは少なかるべく其の推斷臆測に成る所恐らくは多かるべしと。さもあれ其の實はフルードのかた彼の三史家よりも私見を以てして人物事件を褒貶すると却りて少かりしなり。而も其の長所は敵の爲には缺點と推思せられ中立者の爲には不可なき者と見られたり。所謂長所とは何ぞや。熱心堅節なる愛國者にして能く自國の長所を看取し之れを推奨せしこと其の一なり之れを難ずる者ある時は彼れは全力を傾けて之れに當り舌に筆に辯駁し反論せり。よく歴史の眞義を會得し事實の取捨概ね其の宜しきに叶ひしこと其の二なり。按ずるに古今史家多しと雖も單に事件を年代的に録

して能事畢れりとなせる者多し隨うて其の記叙するや典據は正確に考證は該博なるも記叙に生氣無く往々にして宛然事實の臚列に止まるもの比々是れなり而してよく此の失を脱し活寫の妙を兼具せる者古くはシーシヂャーゾありヘロドタスありクラレンドンありキッボンありカイライルあり而してフールドの如きは其の尤なる者の一人なり。さてまた第三の長所は其の文致の雅馴と明快となり。彼れが文章はマコーレー、キンクレイキ若しくはラスキンの如き瑰麗を以て勝るものにあらずされば廣く世俗の喜ぶ所とはならざりしも氣品俗を超脱し平淡一奇なきが如くにして而も衆妙の躰を具へ貫くに一片靈活の氣を以てす十九世紀後半第一の妙文たるを失はず。

第十三章 テニソン

十九世紀後半の詩壇——其の特質——其の代表者としてのテニソン——其の諸作——桂冠詩宗の由來及び傳統——キーツとテニソン——テニソンの詩人としての特質價值

第十九世紀後半期の詩歌は之れを彼の純文學の極盛期たりしエリサベス女王朝

若しくはアーン女王朝の詩歌に比するに種々の點に於て毫も遜色なきのみならず觀念の深邃といふ點に於ては夙かに兩者に超越するものあり。夫の辭句の華麗と結構の纖巧とを以て特色とせしアーン女王朝の詩歌が其の觀念に於て見るべきもの乏しかりしは更にもいはず彼の情熱と創新とを以て勝れりしエリザベス朝の詩歌とても其形而上の想念は概して卑しく若し其の詞句の上に明かに見えたるを標準とすればスペンサー一人を除くの外は重に人情の浮沈を歌ひ人事の成敗を歌ふに止まり未だ直接に天地人の究竟問題に觸れ人性最奥の消息に接しおらはに之れを咏歌せしことは殆ど無かりき。蓋しかゝる問題は當時の社會のいまだ留意せざる所なりしなり。降りて十九世紀に至れば時運の大變動は人々の思想を刷新し來り人皆外界の昌平に知足する能はずして反省的となり顧慮的となり競うて生存の大問題を講ずると共に過去將來を推度して處世の方針を定め安心立命の地を作らんと欲しき隨うて詩人はた此の風潮に化せられ其の多涙多感の性に驅られ率先して這般大疑問の解釋を與へんとせり。是に於て彼等は思を凝らし心を潜め哲學宗教の問題に亘りて其の抱懷を抒し其の漸く覺悟

する所ありや更に其の聲を高うして慰諭の福音を歌ひたり。彼れ等はや舊詩人の如く、單に自然美を謳歌するものにもあらず、又單に人情を咏ずる者にもあらず、はた又單に自家一身の興感咄嗟の哀樂を吟哦する者にもあらず、否仔細に人生の秘機を察し、煩惱の由來を概念し、さて後靜かに筆を採りて、且つ批判し、且つ同感しつゝ、作せしなり。是れ其の片言隻句に深遠なる觀念の影を映せる所以なり。新詩風の一先驅として、又其の代表者の隨一として、眞に錚々の名あるものをアルフレッド・テニソン卿となす。

*A. Tennyson.

*アルフレッド・テニソンは一千八百九年八月リンコンシャーなる一村サマービーに生まれ、全九十二年十月逝りき。その集中金玉の響あるものを擧ぐれば、“Poems, Chiefly Lyrical, by Alfred Tennyson”〔抒情詩を主とせるアルフレッド・テニソンが詩集〕中の“Ode to Memory”〔記憶力に與ふる歌〕“The Poet”〔詩人〕“The Poet's Mind”〔詩人の心〕“The Deserted House”〔廢屋〕及び“The Sleeping Beauty”〔睡美人〕“Poems by Alfred Tennyson”〔アルフレッド・テニソン詩集〕中の“The Lady of Shalott”〔シヤロットの妖姫〕“The Miller's Daughter”〔磨粉者の女〕“The Palace of Art”〔美術殿〕

“The Lotus Eaters”〔無爲の島人〕“A Dream of Fair Women”〔衆美人の夢〕第三集中の“Ulysses”曰はく“Love and Duty”〔戀と道〕曰はく“*The Talking Oak*”〔解語の榊樹〕曰はく“*Godiva*.”曰はく“*The Two Voices*”〔二聲〕曰はく“*The Vision of Sin*”〔罪業の夢〕。(就中『二聲』と『罪業の夢』とは當年のテニソンを表現するものとして最も留意すべき價值あり、殊に前者の如きは十九世紀のハムレット皇子が獨白と稱せられたり)。“*The Princess, A Medley*” (長篇の物語歌) “*In Memoriam*” “*Mand*” “*Idylls of the King*” “*Enoch Arden*” などとり、皆作者が錦心に成れる名篇にして一代に噴々せられたるものなり。

是れより先、時の桂冠詩宗ウォルヅォオス率して其の後を襲ぐ者なし。テニソンとエリザベス・ブラウニングとは候補者に推されたりしが、多少の動搖の後、與論はテニソンに桂冠を捧げき。此の決定に與りて最も力ありしものは其の作 “*In Memoriam*” の好評なりきといふ。

エミー・シャープ曰はく、世に大詩人の初期の作を研究するばかり趣味あるはなし、さるは其の作の文學として價值あるが爲めならで、件の詩人の作として思想進歩の

跡を討ね得べければ也」と。此の心を以てテニソンが初期の作を見之れを他の詩人の作と比較する時は趣味一層深きものあり。セインツベリ氏曰はく

「或人は英國詩風の傳統を論じてテニソンを以てキーツに超ぐものとなす。接ふに不當ならし。(中略)キーツの短命なりしや其の作未だ圓熟に至らずして止みきと雖も彼れをして若しテニソンが例の十年間に爲ししが如く其の作を自ら批判していろく、に修鍊し琢磨する餘裕あらしめば其の作必しもテニソンのに下らざりしならん。げにもキーツが初期の作の幾分は當時の批評家も既に難ぜしが如く一氣にして千言立ちどころに成れるが爲め概ね蕪辭巴調に止まり好尚も觀念も粗雜淺薄なりしことテニソンが初期の作よりも甚しかりしならん而も感情の精緻といふ一點より之れを見ればテニソンが作中一としてキーツが傑作に及ぶものなきにあらずや。要するに兩者の類似は争ふべからず彼れ等は共に繪畫的表現と音樂的表現とを併用する妙技を有し彼等は共によく人道を解し普通の事物にも亘りて靜穩平直且つ健全なる觀察を有せりき而して此の點に於いては彼の實際界を離れ現世間を無視せりしシェリーに勝りしこと一等なり。

と。精評といふべし。

テニソンの好尚はキーツに比すれば少時より一般多方面にして受容の量將た一層大に且つ序を逐うて進前するの歩武も亦たキーツよりは確實なりき否實に此

の點はテニソンが衆詩人に卓出する一特徴たり。彼れは詩人の天職と自己の天才とを認識し古人の名作を讀むも曾て之れが爲めに逡巡眩惑することなく寧ろ其の短所及び不熟の個處を發見して自ら深く警めたりき。之れに加ふるに彼れは詩人として夥多の長所を有せしかば其の二期の作は初期のよりも又三期の作よりも次第に年を追うて精微高妙の域に進めりき。按ふに繪畫的にして音樂的な事は詩技の上より見て極致とする所何れの時の詩人も之れに到らんと易めしは明かなる事實なり。されど能く其の目的を達し得し者を數ふれば英國古今の詩人中たゞ四五指を屈すれば足りぬべし。成熟期のテニソンは實に其の隨一人たり。加之彼れは其の先進が繁詞を以て歌ひしもの(例へばウォルヅチオスが『エキスカルシジョン』の如き)を醇化して短篇となし無限の情致と幾多の變化とを盡し其の言々句々をして讀者の心魂に泌せしむ。この點に於て彼れに匹敵すべきものは古今其の人多からざらん。スペンサーが『宮殿』及び『夢』の二篇はやゝ這般の趣致ありキーツ、シェリー、コールリッジ、ブレイク等も時に此の技を試みたりきされどテニソンの圓熟なるには如かず。且つや『Oenone』の律調壯大なるは彼の山海の

如きミルトンが無韻律語をも凌ぎ“*The Lotus-Eaters*”の荒唐にして雅適なるは彼の夢裡の天樂に比すべきスペンサーが『神女王』にも譲らず。テニソンは時代の精神を歌ふに於て二様の方面より取りき自然界を主觀的に歌ふこと、十九世紀の精神に立脚して過去の事蹟を歌ふこと、是れなり。前者の可憐なる情致はウォルズチオスより得たるなれど尙彼れの如く乾燥低調ならず後者の華麗と濃とはスコット、バイロンより來れるなれど尙ほ彼れの如く淺露粗厲の失なし。蓋し彼の三詩人は嚴密にいへば其の思想も感情も到底テニソンの如く十九世紀的なる能はざりしなり。

彼れが才華の最も老熟せし所謂老期の初めに於てし作二篇あり“*The Princess*”及び“*In Memoriam*”是れ也。是れ等の作に至れば詩體と感情とが調和せるのみならず繪畫的と音樂的との妙の兼ねられたるのみならず其の思想の根柢に一種從容たる覺悟あるものゝ如し。二篇のうち前者はいさゝか滑稽の趣味を加へたる長篇の物語歌にして作者が苦心の作なり其の滑稽の如きは成功といふべからざれど兎も角も傑作の一たるを失はず。後者は温厚誠實なる著者が情誼のあら

はれたると共によく當時の或思潮を歌ひ得たる作なり。或思潮とは彼の半懷疑的宗教思想にしてテニソンは所謂自由的保守主義リベラル、コンサervativeの人(否寧ろ保主自由の間に彷徨せし人)なりしなり。『インメモリアム』は昂起二歩格 *iambic dimeter* もて綴られたり。此の體は庸常の作家に用ひらるれば單調讀むに堪へざるを常とすればテニソンは之れを此の長篇に善用して一句のたるみなく卷を終るまで厭倦を起さしむることなし以て其の韻律家としても當時第一流なりしを證す。

テニソンの多才なるや其の作せし所一様ならず山野の風物に關係せる物語歌あれば幽玄深遠なる哲理に關係せる冥想の作あり古代の詩歌より翻譯せる軍歌もあれば寫景狀物を主としたる作もあり。又尋常の抒情歌あり又純然たる劇の詩あり。就中狀寫諷詠の趣致はゆたかに當世紀を代表するに足れり。但し其の劇の詩は寧ろ其の短所を示せるものなり。第一科介の妙乏しく第二篇中の人物に彼のシェイクスピアに見るが如き宛然たる入神の妙相無し。所詮テニソンは抒情狀景の巨擘兼ねて物語歌の妙手なり。

按ふに英國の詞壇古來名家に富めりと雖も自ら詩人の天職を意識して其の天職

の神聖なるを信じ十年一日の如く忠實に熱心に慎嚴に眞摯に勇猛精神片時も其の理想を忘れざりしものは果して幾人かありし。其の理想テニソンの如く其の精勵テニソンの如く其の妙技テニソンの如くにして初めて十九世紀の詩人たるを得べし。十九世紀の英國が彼れを好遇せしは至當の禮なりと評すべき也。終りに尙一言すべきは彼れと時勢との關係なり。テニソンの如きは素より未だ時世を先導せし作家とはいひ難ければ之れを豫言者と稱せんは溢美なれど毎に當代を代表せりといふ稱は何人も否拒せざる所ならん。彼れが作には毎に宗教上、道徳上、社會上すべて此等の問題に關する當時の進歩せる輿論の影映れり。勿論嚴密にいふ時は彼れが歌へる所は必ずしも當年最勝の思想にはあらず最も創新なる思索最も進歩せる想念にはあらず而も其の作に見ゆる所は當時の上流思潮を反射せる者不明ならざる英國人全體の最近年に於ける修練と經驗との結果苟も當代の不明ならざる者が自家の影なりとして首肯せざるを得ざりし者なり。是れ豈時勢を代表せる者にあらざらんや。或は晩年のテニソンが時勢に後れしを實とするもそれは功成名遂げて寶を易へんとせし頃のテニソン也其の壯時のテ

ニソンは正に新しき思想の謳歌者にして時には新理想の鼓吹者なりき。例へば千八百十二年に出だし、『ロクスレー、ホール』を見よ彼れは人物の口を借りて自家の感慨を抒らし更らに轉じて將來の期望を歌へり是れ明かに時の改進黨の希望なりき。尙後年に及び『六十年後のロクスレー、ホール』を著はして時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌へるが如し。或はまた『Princess』を見よこれはた當時の新問題たる女權論の旨に密接せるものなり。若しくは『美術殿』の旨を味へ是れはた當代の一弊たりし出世間熱の誤謬を諷刺し暗に眞善美の相關を説き世間と出世間との關係を歌へるものなり。『美術殿』の美術に於けるは『St. Simeon Style』の宗教上の僻見に於けるが如し後者は爲我的、古禪主義の弊を難じ世間的義務の重んずべきを説けり。何れもテニソンが理想の影にしてまた當代思想の影なり。要するにテニソンが終生の理想は天法を畏敬するに在り精進向上を推奨するにあり秩序を亂さずして進歩するにあり義理を重んじつゝも人情を重んじ平等を愛しつゝも差別を愛し出世間に遊びつゝも現世間に處するにあり。是れカーライルがゲーテに於て其の實例を見たるを喜びしものと相近し而して

其の平生の行實も頗るよく其の理想に副へりしに似たり。デニソンの如きは按ふに詩人中の君子人たるに近かるべし。

第十四章 ブラウニング及びブラウニング女史

ブラウニングの傳——其の諸作——エリザベス、パレットとの結婚——環と卷——ブラウニングが作の是非——ブラウニング研究会——其の作の特質——ブラウニング女史——其の諸作——其の特質

デニソンと世を同うして更に清新なる感情更に深遠なる思想を謳歌し遂にデニソンを凌ぐの名あるものをロバート・ブラウニングとす。一千八百十二年五月生れ同六十九年逝りき。齡二十二歳の時はじめて“Pauline”と題したる詩を作す。ブラウニングが作に終始附随せし一種の缺點は既に此の作に表はれたり而して其の傑特の詩才は未だ之れを認むるに由なかりき。此の篇に顯れたる特質は凡そ三あり第一。詩句の悉く劇白の躰なること第二。長き聲音の語の目立ちて多きこと第三。彼れが作の特色と稱せらるゝ「晦澁」の甚しきこと是れなり。此の中第一と第二とは別にいふべきとなし但し何が故にかゝる奇異なる劇詩躰を用ひしか審

*R. Browning

かならざるのみ。さて所謂晦澁の失は寧ろ一氣呵成を要とせし結果なるが如し即ち情の向ふ所やがて之れを筆に傳へ殆んど辭句の選擇をなさず偏に氣に任せて作せしが爲ならんか。さもあれ此の『ポライイン』は推稱すべき作にてはあざりしなり。彼二年を経て“Paracelsus”と云ふを著しぬこは前作に勝ること數等也。これも同じく劇白の詩なりしが對問の呼吸圓熟し到底上場の見込はなけれど傾瀉するが如き急調と疾驅するが如き一氣呵成とは其の無韻律語の特質を成し蕪雜險晦の瑕疵あるに拘はらず隱然一種の靈氣を具へおぼろげながらも作者が特得の美感を傳へたり。要するに此の作や詞致尙調はざるところありて後の作に見るが如き壯偉の妙はなけれど抒情詩として獨創の一躰にして新大詩人の初作たるに愧ぢざる者なり。而して世間の之れを遇するや冷々然たりしがブラウニングの自信の厚きや敢て其の詩躰を改めんともせず二年を経て更に其の友某の爲めに“Stratford”と云へる正劇を作しき。此の作妙處乏しきにあらねど如何せん其の思想例の如く時世を超越し其の表白はた含糊なりしが爲めに之れを讀み物とせずして演ずるものとするときは興味索然たるを得ざりき。後ち

又三年にして“Sordello”といふ劇を作しぬ此の作取りわけて異色を帯びたりしかば常に俗衆に悦ばれざりしのみならず平生ブラウニングを愛讀する輩すら此の作者遂に其の作詩の方針を誤らんとするに非ずやと危みにき。

かゝる疑惑は一千八百四十一年より同四十六年の間に成りし“Bells and Pomegranates”と總題せる詩集出づるに及びて跡を絶てり。此の集中の劇詩にも例の缺點は伴へりしが奇異なる“Pippa Passes”を除くの外は必ずしも讀者をして茫然自失せしむる底の異質あるに非らず而して其の抒情詩的短篇の或作に至りては優かに其の作者の單に語るに堪ふるのみにあらで歌ふにも秀でたる由を證したり。一千八百四十六年は彼れがはじめて大詩人の列に入りし年なり。同年エリザベス、バレットを娶りて妻とすテニソンと桂冠詩宗の選舉を争ひし令名の女詩人ミセス、ブラウニングとして名高きは是れなり。結婚後ブラウニングは伊太利に遊び一時フロレンスに居をトシ妻の逝りしまではかしこに在りき此間にものせし作は僅かに二篇のみ“Christmas Eve and Easter Day”(一千八百五十年出版)及び“Men and Women”(同五十五年出版)是れなり。是れを既刊の二詩集即ち“Bells

and Pomegranates”及び“Dramatis Personae”(同六十四年ロンドンにて出版)と併べ稱してブラウニングが壯年期の傑篇を蒐めたるものとなす。こゝに至りてブラウニングの名聲漸く定り世間多數の讀者はた彼れが歌に一種深遠の意義あるを認むるに至りぬ。

一千八百六十九年無慮二万餘句の長篇を著しぬ題して『環と巻』“The Ring and the Book”といへり這は四卷に分ちて出版せられ大に世に歡迎せられき。是れ雅俗が一濟にたへてブラウニングが最傑作となせる異昧の敘事詩なり。然れどもブラウニングは一時の虚譽に眩惑して濫作するの遇をなす人にあらずなはち退いて筆を作詩に絶つこと十有四年此の間ひたすら精神を修養し或は人生の大問題を攻究し或は希臘の古詩歌を玩味しさて一千八百七十一年に至りて再び詩壇にあらはれたり。胸中成竹ありて詞藻また豊かなり最近英國思想の謳歌者としてブラウニングが名を不朽に傳へし作は此の際に出でたり今其の名あるものを下に掲ぐ。“Balauston's Adventure”(一八七一)。“Prince Hohenstiel-Schwangan”(同)。“Fifine at the Fair”(一八七二)。“The Red-cotton Nightcap Country”(一八七三)

“Aristophanes, Apology” (一八七六) “La Saiziaz” (同) “Dramatic Idylls” 二卷(一八七九—一八〇) “Jocoseria” (一八八三) “Fersblah's Fancies” (一八八四) “Parleyings with certain People of Importance” (一八八七) 及び “Asolands” (一八八九)

晩年の作中『アンランナー』は二十五年にもせし “Dramatis Personae” 以來の名作と稱せらる。總じてこの期の作には異様の無韻律語を用ひ普通の話説體と劇詩の獨白體とを相交へたり。この獨白體はアラウニングが終生棄てざりし筆致なり。

アラウニングが作の是非は今も尙ほ全く確定するに至らず况んや當年に於てをや。其の中年以後二三の總明なる批評家は彼れが作の美を看取せりしが多數の讀者は蕪雜粗笨險晦含糊等の非難を挿みて一概に彼れの作を斥けたりき。或は附和して褒稱せし輩あるも只漠然と其の清新の致を認めしのみ何れの個處に眞個の妙あるかを明知せざりしが故に世間多數の嘲罵非難(就中大學出身者の劇しき攻撃)に對しては作者を回護するの辭を知らざりしなり。所詮當時のアラウニング黨が勢力はいと微弱にして當に世間に向ひて十分にアラウニングを推舉す

る能はざりしのみならず自家はた其の妙を會得する能はざりしなり。然れども彼れが作も追々に出で十年二十年を経過するにつれて世間の非難も流石に舊の如く頑ならず又其の景仰者も漸く其の所信を固め文壇の一隅に所謂アラウニング社を起こし一千八百八十一年には公然アラウニング研究會といふを組織し入會者には其の趣意書を交附して賛成の意を表せしめ且つアラウニングが特殊の辭句譬喩等を解するが爲めに『アラウニング辭典』を編するに至りぬ。崇拜者の運動斯くの如くなりしかばアラウニングを擯斥する輩更に起ちて反對運動を試みこゝに再び批評海の一大波瀾を捲き起しき。さもあれ今這般の愛憎を脱し虚心にして彼れが作を観るに彼れは圓滿の詩人とは稱すべからざるも偉大の詩人たるとは争ふべからず其の缺點は其の詩の外形にありて其の内容に存せざればなり。

論者曰はく新詩人中の新詩人たりしアラウニングの如き作家には多少の破格も許さるべからず時尚に先だてる思想は時尚の言語のみをもて表しがたければなり。其の晦澁を以て難ぜらるゝも止むを得んや。カーライルが散文も嘗て晦

溢の諷を得たり散文既に然り況んやカールよりも更に幾歩をか進めたる新
 思想新感情を表する場合をやと。是れ今のブラウニング黨の所論の要たり。然
 るに他の論者は曰はく詞意の險晦は技の足らざるに因るにはあらざるか。テニ
 ソンが或作の如きは雅馴穩健の詞致をもてして能く時尙に先だてる感想を歌へ
 るならずや。所謂新詩人は何故に通常事を歌ふ場合にだに晦澁險怪なる語を用
 ひざるべからざるか云々。是れ非ブラウニング派の今尙主張する所なり。よし
 とするものは缺點にだに私し難ずるものはひとへに其の短を擧げて其の長を蔽
 はんとす。世の論客が是非は概してかくの如しよく其の兩端を叩かん者ひとり
 能く事物の真相を知らん。畢竟ブラウニング是非の由來はテニソンの比して
 遙に高遠なりしと同時にテニソンに對する社會の歡待のあまりに甚しかりし反
 動なり。いづれにもせよブラウニングが運命は彼のパーンス、キーツ若しくはウ
 ーヅチオス、シエリーに比すればむしろ幸ひなりきといはざるを得ず彼れは其の存
 生中に十二分の景仰を得たればなり。
 彼れが諸作は其の形の上より見るに概して律呂押韻の調諧に乏しきものにして

其の詞の如きも往々にして滑稽劇の人物の白の如く或は電信用の文句の如く簡
 に過ぎて義をなさざるが如きもの多し。言語を思想の符號となさんか彼れが語
 は更にまた他の語の符號たりしなり。其の長篇を讀者の厭ひて重に其の短篇を
 よろこびしは洵に所以あり。加ふるに彼れは詩中に於て或は人心の解剖を行ひ
 或は哲理上の議論を試み剩へ生硬若しくは險晦なる言辭を以て之れを行りしか
 ば讀者はいよ／＼其の解に苦みたり。彼れが作に對しては質を減じて文を加へ
 よと求めざるを得ず。さもあれ彼れが詩には一種いふべからざる情趣ありて知
 らず識らずの間に人を魅するの力あるドライアン以後空絶と稱すべし。且つや
 心理上の研究を利用して悲哀と諷諧とをほしめしにしたる伎倆はシェイクスピ
 ヤ以外殆ど空絶なり。

さて其の劇詩は其の最も熱衷せし跡あるにも拘らず舞臺上の伎倆を缺きし爲め
 に實際の脚本としては殆ど稱するに足るものなかりしも人物の性格を活現する
 伎倆は頗る歎美すべきものあり。又自然の風物を歌ふに於てはウォルヅチオスの
 如く精妙ならざりしも其の不羈宏恢の氣ある所は殆ど何人も及ぶ能はじ。要す

るにブラウニングは之れを抒情詩人として見れば最高作家の一人なり。彼れは悲哀の歌を能くし又戀愛を歌ふに巧みなりき。總じて短篇に其の最長を見る。中にも“*Asolando*”に收めたる六篇の如きは聲調や色彩や思想や共に頗る見るべきものなり“*Pippa Passes*”に收めたる數十篇殊に“*Last Ride Together*”の篇の如きは抒情詩中醇乎として醇なるもの彼のテニソンが夢幻的作物と相對して一代の珍たり。

ブラウニング女史エリザベス、パーレットは夫より六歳の姉なりき又其の名聲は普通の讀詩社會には一時は夫よりも高かりき。女史は一千八百六年ダラムなるカールトン、ホールに生まれき。

ロバート、ブラウニングがもてはやされしは夫人が歿後なり其の生前にはパーレット女史あるを知りてブラウニングあるを知らざりし者も多かりき。高遠なる詩人としては女史の其の夫に及ばざるや明かなれど夫人また英國の女流詩人(抒情詩人)としてクリスチナ、ロセツチ女史を除きては前後及ぶ者なき伎倆を有せり。其の詩(殊に晩年の作)は夫ロバートの詩風を學びたるが爲め詞句の意義不明なる所

少からねど尙ほ其の夫の如く、甚しからざりしのみならず間々其の朦朧たるが爲めに神秘的感情を寓し得たるともあり而して其の少時の不幸と多病とより來たる悲哀の感想は屢、可憐巧妙の詩となりて其の愛讀者を泣かしめたり。蓋し(一)其の至誠なる宗教心はよく其の作品を高からしめ(“*Cowper's Grave*”は其の好例)(二)其の博愛慈悲の主義はフッドが作デッケンスが作と呼應し(“*The Cry of the Children*”)(三)其の女性の特技は其の家庭的切哀を寫すにあらはれ(“*Isobel's Child*”)(四)其の傳奇的空想(“*The Duchess May*”及び“*The Brown*”、“*Rosory*”)と(五)其の倫理及び政治の思想(“*Lady Geraldine's Courtship*”)はた讀詩社會の愛を博しき。さて其の辭句は律格押韻共に嚴正なるにはあらねど諷詠の間言ふべからざる情趣あり其の詞の選擇は間、宜しきを得ざりしかど尙創新の譽れあり。其の悲哀を叙するや女子の癖としてや、饒舌に流れたる所もあれど眞實と純粹とを失はずして句々能く人を動かす。而して自然の風物を歌うて繪畫の如き妙ある當時テニソンを除きては敵する者なかりき。女史が十四行詩に至りては遠くテニソンの上にあり其の夫に送れる“*Sonnets from Portuguese*”の諸篇の如きはシェイクスピア以後(十六

七世紀の名篇と伯仲の間にありと稱せらる。但し女史が作に一大缺點ありそは女流作者の通弊ともいふべき一種の自信強く毫も他の批評を顧みざるのみならず反省の念に乏しく只管才に任せて作せしとこれなり識見素養の深からざる一女子にして之れを爲す失なきを得べけんや。其の律格と其の押韻とが杜撰に流れたること屢にして破格の詞句頗る多かりき。此の弊尤も其の初期の作に多しアラウニングと結婚するに及びて夫に教へられてや、此の失を改めきといふ。而して其の主題を擇ぶや亦た甚だ杜撰なりき或は他が物せる小説の筋を其まゝに歌ひ或は一知半解にして或種の哲理を詠ずるなど識者の鑿を買ひしと一再のみならず。女史が長所の缺點と共に夥しきは彼のバイロンにいとよく似たりき。一言もて蔽へば女史は實に一世の才女にして鬼才アラウニングの妻たるに愧ぢざりし者なり。

第十五章 其の他の詩人

マッシュュー、アーノルド——プリ、ラファエル派——其の作及び特質——ロセッチ兄
妹——其の作及び特質——オシローチン、及びトムソン——タッパー以下の諸

詩人——スバスマガツク派(際物派)——クラフ——ロッカー——リットン——モオリ
ス——ス、井、バーン

テニソンとアラウニングとが第十九世紀後半の文壇に日月の如く輝きし時尙別に幾多の明星ありて天の各方に耀けりき。中につきて最も著きをマッシュュー、アーノルド、ロセッチ、ロセッチ嬢、トムソン、クラフ、ロッカー、リットン等とす。左に順次に略叙すべし。

*マッシュュー、アーノルドは詩人としてテニソン、アラウニングに亞ぎしのみならず批評家としても一世に推重せられたり。一千八百二十三年に生れ同八十八年歿しき。

現今に及ぶまでアーノルドを批評する者に二派あり一は彼れが散文を推重して詩歌を貴はず一は彼れが詩歌を愛て、散文を珍とせず。兎も角も彼れは兩方面に秀でたり就中詩人として世に知られしは散文家としてよりも二十年の前にありき。

アーノルドは其のはじめ深くウォルヅチオスを景慕せりき其の晩年にはウォルヅチ

*M. Arnold.

オスが缺點若干を擧げて論難せしこともありしが其の私淑せしこと深かりしは其の詩牀に揭焉たり。又ミルトンの風調をも學びたる跡あり。又半無意識にしてテニソンの影響を受けしことも少からず。而もテニソン、キーツ等がローマン派の流麗華縟なる作に對しては反動し力を竭して別に新古詩派を建設せんと欲しき。一面よりいへばアーノルドは所謂正格派に屬する者なりポーブが十八世紀の正格派なりしが如くアーノルドは十九世紀の正格派なりき換言すれば結構音韻の格法を重んじ辭を彫琢すると共に情理趣致の洗鍊を勗めたりき。されば其の作の最も秀でたるものに至りては其の妙十九世紀詩人中第一に位すべきものもありしなり。批評と創作とが別才に屬するとは嘗て論ぜられたる所なれども近代の論者は一步を進めて批評の能なき詩人は未だ圓滿といふべからず而して詩才ある批評家は眞に無上なりといはんとなす。第十九世紀について之れを見るに獨りコールリッジはアーノルドより五十年代の前に出で、アーノルドにひとしき學者にして兼ねて詩人としては寧ろ一級を進めたるものなりき而も其の自作自評はアーノルド程には嚴ならざりき。スコット、バイロン、キーツに至りてはも

とより正當の學者批判家にあらずシユリー、テニソンはた批評家たる譽れなかりき。之れによりて之れを觀れば或一派の徒がアーノルドを稱揚して九天の高きに置かんとするも其の所以なきにあらず。

自作自稱して自ら勵むことはアーノルドの夙に實行せりし所なるが故にや其の初期の作既に見るべきもの多し。シエクスピアを歌へる十四行詩 “Myerinus” と云ふ六行一解の詩其の他 “Requiescat” “Strayed Reveller” 及び “Empedocles on Etna” (獨白劇) “Merope” “Sohrab and Rustum” “The Sick King in Bokhara” “Balder Dead” “Tristram and Isent” “The Scholar-Gipsy” の如き皆佳作なり。總じて短篇を佳とす是れは十九世紀後半期の詩歌の特質なるが如し。中にも “The Forsaken Merman” は觀念の深遠よりは思想の創新と興趣の湛々とを以て著はれ “Dover Beach” は彼れが散文中の殊なる宗教思想を聲調めてたき韻語をもて表はしたるが故に名あり而して “Baechanalia” 及び “Summer Night” これに次ぐ。彼れは頗る追懷の詩を好みきウォルヅオス及びハイテを歌へるものゝ如きは其の好例なり。就中『ウェストミンスター・アペー』は其の語意の莊重端嚴ミルトンが “Nativity

Ode” に匹敵すと稱せらる。蓋し此の作ミルトンを聯想せしむるものあるは決して偶然にあらずアノールドは常に詩題の選擇に重きを置きて經營頗る力めたりしなり。現に前にいへる『詩集』の序文中に「詩題に關して論じたることあり思へらく」詩歌の貴きと然らざるとは全く主題の大小によるともいふべし些末の事を捉へ刹那の感想を寄せて之れを歌ひ以て一時の歡を買はんとするは是れ豈に最近詩人の通弊にあらずや。かゝる詩篇を取りて之れを推獎し其の多く産出せられんを望む是れ豈に最近批評家の通弊にあらずや。百千の螢火は一月の明に如かず片々たる小品朝に作せられて夕に讀まる爲す所果して幾何かある」と。セインツベリ氏以爲へらく古今の大詩篇主題の大なるものとより多からん而其の盡く然るか否か輕々しくは斷ずべからざるなり。所謂大詩篇とは何ぞ。絶妙の詩篇といふ意か。主題の大ならざるもの何故に絶妙なるを得ざるか。大主題のみを歌ふべしとせんか。詩人の主題は遂に盡くるの虞なきか。悉くアノールドがいふ所に従はば吾人は遂にミケランゼロ又はレオナルド、ダ、ビンチ等をすて、彼のピラミッド若しくはエスキエリアルなどいふ粗大なるもの、計畫者を尊ば

ざるを得ざるに至らん。豈にかゝる理あらんや」と。アノールドが作としても必しも其の言に副はざりしなり。そは兎も角も彼れが作の最も妙巧なる者に至りては其の數割合に少きだけに英詩の衆妙を盡したりと稱して溢美ならざるもの間あり。是れを好む者の彼れをテニソン、ブラウニングの上に置かんと欲し彼れを好まざるもの、に其の人道(所謂大題目)發揮の功をたへて彼れに同情を表する所以なり。

前にもいへる如くマッシュュー、アノールドはもとウヰルツヲオスの流れを汲みて其の詩田に灌せし人なり而して彼のキーツ、テニソン一派がローマン派の潮流に對しては力を極めて其防遏に竭めしが故に此の流れは爲めに方向を轉じて所謂プリ、ラファエルの運動(Pre-Raphaelite Movement)の一潮流となり延いて今日の詩界に及べり。ローマン派とプリ、ラファエル派とは共に彼の宗教上の一派、オックスフォード派の運動と密接の關係を有し始終これに助けられて其の勢を加へし者なり。さてプリ、ラファエル派の起りしは第十九世紀の中葉にて當時はアノールドを首めとして有名なる詩人批評家のうちに之れに反抗せし者も少からざりしが此等二三子の

死後は其の志を継ぐ英才なく而して新派の方にはロセッチ、モオリス、スフィンバートンの名家出て中にもスフィンバートン氏の如きは今も尙存生せる程なれば此の派は遂に全勝を得現に英國詩壇の大半を占領す。

*ガブリエル、チャールズ、ダンテ、ロセッチ(通稱ダンテ、ガブリエル、ロセッチ)は一千八百二十年

八年ロンドン府に生まれ齡五十五にして逝きぬ。ロセッチ、モオリス、スフィンバートの三詩人は全く同一の詩風を奉じて立ち以て一派の根柢を固めし者なれど流石に各々特色あり。モオリスは佛蘭西英吉利の中古の詩風を慕ひスフィンバートンは古代及び列國の作に其の模範を求め而してロセッチは主として伊太利文學の上に脚を立てんと試みき而も共に中古派に屬せしは明かなり。ロセッチが壯時の作“The Blessed Damsel”を取りて之れを見るに其の想を全くダンテが或節より取り來りて之れに中古佛蘭西風の快活と中古英國風の創新とを加へたるが如き跡歴々たり。否彼れが一生の作は大抵然るのみならず中古の荒唐なる思想感情に加ふる十九世紀風の半ば神秘的なる幽玄の趣致を以てせしものいと多し。エミール、シャープは曰はく彼れに取りては戀愛は一種の神秘

的情熱にして美もまた幽遠不可思議なる精靈の意義を一種の符號を以て表現せるものに外ならずと。げにや彼れはかゝる點に關してはダンテとや趣きを同うせるならん。蓋しロセッチの所謂戀愛は闇黒面なき戀愛なり。人間に於ける天道を鞏固にするものは是れ即ち彼れが所謂戀愛にして斯かる戀愛は男女が形骸以上の美若しくは恒に精靈に宿れる形骸の美を思慕するより生ずるものなり。而して其の精靈といふは皆中世伊太利詩人のいへりしものに同じく最近英國の思想には既に跡を絶ちものなりしなり。實に彼れは最近の思想に對しては殆ど同感する所なかりしもの如し十九世紀歐洲思想ほのかにも見らるる者は一生中二三篇に過ぎず。

要するにロセッチが特質は其の作の繪畫的なるにあり其の中古の思想感情をスコットよりも一層深く詩中に蘇生せしめんと勗めながら尙十九世紀的幽玄の趣致を帶ばしめたるにあり其のコールリッジ、キーツによりて一たび試みられ更にテニソンに至りて漸く成熟するに至りしローマンス風の詩句と語調とを一層圓熟せしめたるにあり。

ロセチの小妹は名をクリスチナ、シャルツナと云ふ、ロセチ嬢とて才貌双絶の名ありき。嘗て兄ロセチがテニソンの作“Morte'd Arthur”に基きて皇后の愁然として思ひくづをれたる姿を書きし時其の畫の標本となりしは此の女なり。一千八百十三年に生れき。熱誠敬虔なる教會員にして母に仕へて孝順身を持すること貞淑女詩人の模範たるに堪へたりき。同九十四年に没しき。其の作は多からず“Goblin Market and Other Poems”“The Princess' Progress”“Sing Song”“A Pageant and Other Poems”今日に於けるロセチ嬢が評價は甚だ高く批評家は之れをブラウニク女史に比較して其の變化の多きと作の夥しきとに於ては彼れに劣る所あれど其の瑕疵いと少なく未練と長舌の弊なく溫柔優雅なる點は彼れに優るとなせり。兎に角大轉よりいへば英國女詩人中抒情詩につきていふ嬢に匹敵するもの殆んど無しともいふべからん。要するに其の名作を收めたる“Collected Poems”一卷は英國古今の抒情詩集中稀に見る所なり最も可憐にして情趣深き花籠にも喩ふべく嬢が贈遺の餘香今尙馥郁たる感あるなり。

*O'Shaughnessy.

*オショーチョーシー(一八四四—八一)詩集三卷あり“The Epic of Women”(一八七〇出版)

“Lay of France”(一八七二)及び“Music and Moonlight”(一八七四)是れなり。別に遺稿一卷あり“Songs of a Worker”と云ふ彼れは例のブリ、ラファエル派の夢幻詩想の極端を悦べりしがゆゑに其の作世俗に厭はれ、人間的興趣を缺けりといふ批難を得て空しく其の生を畢へたり。彼れが音樂の好尚に富めりしは“Music and Moonlight”の詩篇によく見えたり。其の詩のあまりにローマン派風に馳せて荒唐怪僻となりたるは厭ふべしと雖も尙ほ流石に棄てがたき趣味もありとぞ。

*チュームス、トムソンは十八世紀の末に出で、『四季の歌』の作者として詩名を一世に揚げしチュームス、トムソンと同性同名の詩人にしてブリ、ラファエル派中最も異色ありし詩人也。彼れは不平の間に人となり不平の間に業を執り終始不平の歲月を送りて生を了へし詩人なり而して其の不平の氣はよく其の詩にあらはれたり。又夙に散文家時文家として名をあらはし時文學を評せしが殊なる素養あるにもあらず識見はた卓拔とは稱し難けれど着眼流石に奇警にして筆鋒銳利なりき。彼のブラッドローが主筆たりし“National Reformer”と云ふ雜誌にBVといふ假號にて屢々時文評を掲げしものは即ち此のトムソンなりき。一千八百七十四年初めて

*J. Thomson.

*M. F. Tappan.

The City Dreadful Night”と云ふ詩をもつて例の雑誌に掲げしが願ふものなかりきかくて後八年にして又“Yon's Story”など題せる篇を著し、が世間の冷遇は以前の如くなりき。かくして輻軻の間に逝るに及びて世人は遽かに其の作に注意し其の詩集は忽にして二三版を重ねしが作いと少かりしかば今尙其の眞價を評定すると難し。“The City of Dreadful Night”は厭世的精神の一貫せる作也宛たる虚無黨主義の深刻なる作にして冷酷なる狂憤の語時に人をして悚然たらしむ而もところ、華麗莊嚴掬すべき情致あり。最後の作“Insomnia”亦た鬼氣あり。而して其の未だ幸福なりしころの作“Sunday at Humpstead”“Sunday up the River”“the Naked Goddess”等の二三篇はや、光明界に近き作なれど尙は狹隘一律にして不自然背理の悲愁あるを逸れず。其の消極的絶望的なる神秘界の消息を傳へて鬼哭啾々の聲あるところ彼のロセツ嬢が瑞氣霽々たる積極的有望の神仙界を歌ひしと相對してブリ、ラフェル派の両面を代表せるものと評すべし。

*マーチン、フリークロー、タッパー 温厚の士なりき。未だ出版に及ばざりし詩篇數十ありいづれも短詩の模範とするに足るものなり。“Proverbial Philosophy”は其の

*T. G. Hake *R. Trench.

傑作なり其の平易にして花やかなる尤も俗衆によるこばれし所以なり。アルフレッド、テニソンが作“Poems by two Brothers”は其の二兄と共に作せしものなるが其中長兄フレリダックは今年九十二歳の高齡に達して今も尙ほ存生せりといふ。次兄チャールズ(一八〇八—一八七九)亦詩名あり殊に十四行詩に秀でたり。彼のテニソンをして『イン、メモリアム』をものせしめし親友アーサー、ハラムもまた散文にも韻語にも名ありき。取り出で、いふべき長所とはなけれど雅馴にして瑕疵の少きは見るべし。彼の「スターリング」社を開きし散文家ジョン、スターリング亦たテニソンが親友にして時々作詩あり常にテニソンの詩風を摸せりき。カーライルは彼れを評して詩文共にテニソンとハラムとの間にありとなせりき。

*リチャード、デネキクス、トレンチ (一八七〇—一八八四)其の名著“Study of Words”は學者的の著述中最も通俗、而して通俗なる著述中最も學者的なるものと稱せらる。彼れは重に中世紀のラテン文學中神秘端嚴なるものを英國に紹介するに力めたり。

*トマス、ゴルドン、ヘリック の作は多く稱せられざれど詩としては珍とすべき者あり

り。"Old Souls" "the Snake Charmer" は其の三傑作とす其の平生の主義に曰はく
苟くも完全なる詩歌と稱すべき詩歌は其の意義を理解するが爲めに讀者をして多量
の智識を要せしむる底の者なるべからず。さりとして一讀して其の内容の一切が明々
白々に讀者の眼に入るがよしとはあらずたゞ智を以て謎語を解するに心を奮はれ
詩を樂むの餘裕なきに至らざらんを要す。

と彼れが作はこの主義を實現せるものといふべし。

*W. E. Aytoun

ウイラム、エーツーン(一八三一—一八五六)は『ブラックウッド雑誌』の重要なりし記者
にして法律と文學との論說に名ありき。其の傑作は大抵 "Bon Gaultier Ballads"
及び "Lays of the Scottish Cavaliers" の中に收められたり。要するに小スコットとも
いふべき作家熱心なる保守黨にして兼ねて中古武士の愛慕者たりきされど其の
抒情的伎倆は大なりといふべからず。

此のころスパスモヂック派(瘧癎派)といふ一種奇異なる名稱によりて文壇に知られ
たりし一派の詩人あり、もとより明かに誰れ〜と定まりたりしにはあらず或時
はカーライルの如きも此の派中に算入せられしことありテニソンもまた此の派
に流れたりと見做されしことあり。そも〜如何にして此の稱は起りしかとい

*S. Dobell.

ふに名附親はエーツーンにして其の動機は此の派の詩人を嘲倒せんとするにあ
りしなり。按ふに瘧癎的とは其の着想の不自然牽強なると其の措辭の奇矯破格
なるを病者が煩悶して七癩八倒する容態の苦しげなるに比較したるよりの稱な
らんか。強ひて感慨し強ひて呻吟し強ひて激越するの僻はげにも此の派の弱所
なりしなるべし。十分の詩才なくして強ひて人を動かさんとすれば主として想
の奇辭の奇を求め往往にして此の失に陥るスパスモヂック派は特リボクトリヤ文
學の所産にあらず文學の革新期はかゝる派を産するに多縁なるなり。
一時此の派の牛耳を執りしはシドニードーベルとアレクサンダー、スミスとなり。
共に十分の教育もなく秀でたる詩學上の意見もなく衣食に追はれて筆を一時の
爲に執りしものゝ如し。

シドニードーベル 處女作 "The Roman" といふことは所謂書齋劇 Closet drama なり
外に "Balder" "England in Time of War" スミスとの合作 "Sonnets on the War" といふ
るものなどあり。

アレクサンダー、スミス(一八二九—一八六七)が生涯と詩風とはドーベルのと大差

なし。ドーベルの作の取るべきは着想の異風なるにあり“Tommy's Dead”は其の傑作なるべし。たゞ其の篇餘りに長く且つ詞調平板なれば讀過に堪へがたし。スミスは着想ドーベルに劣れど辭句は巧みなり其の處女作“Life Drama”最もよし。

*A. H. Clough.

*アーサー・ヒュークラフは如何なる故ありてか當時上流の人々より「愚詩人」といふ綽號を得たりしがこは別に故ありての惡名らしく彼れが作は決して愚詩と稱すべきものにあらず其の“Qua Cursum Ventus”の篇の如きは諷誦三嘆指く能はざる名句に富めり。全軀に亘りて彼れが作を見るにクラフは十九世紀の懷疑思想に感染したりしあゝと歴然たり。按ふにクラフの出でし時は恰もフルードのいへる如く「オックスフォードは信仰と不信仰との二氣が有爲なる青年の惱裡に旋風の秋葉を捲くが如く相追驅せし中心にしてクラフは此の間に於て兩者の一に就くの輕忽にして危險なるを知り斷然中立してたゞ最も穩健なる道念に依頼して一身を修め以て靜かに大聖の降誕を待ちしが故に其の外見一見甚だ卑屈なるが如く遂にセインツベリ氏等をして彼れは信ずる力を缺き反抗するの勇氣を缺きしものな

る如く思はしむるに至りぬ。されどこは畢竟ずるに彼れが中心の頗る強健なりしが爲なるべし。ダウデン氏のいへる如く彼れが健全なる道念より出でたる詩歌は他の徒らに懊惱する青年輩に取りては一貼の安慰劑とも稱しつべし。たゞ惜むらくは彼れが心中の信仰と不信仰とが兩々相軋して火を發するに至らざりしが故に其の詩篇に於て雲湧き龍躍るの壯絶の觀を見る能はざりしことを。其の“Latest Decalogue”の諷刺は見るべく田園詩の朴茂また愛すべし。

*フレデリック・ロッカー“London Lyrics”“Lyra Elegantiarum”“Patchwork”(詩歌と散文との雜著集)等の作あり。“My Guardian Angel”は短篇の逸話にして文致の簡潔雅馴なる同種中稀れに見る所なり。セインツベリ氏曰はく若しチャールスラムをして此の時代に生れしめて此の境遇に立たしめば必ずロッカーと同一様の作をなし、ならん」と。

*エドワード・ロバートリットンRobert Lyttonは小説家として名高かりしリットン伯の子なり。其の世に出だし、詩篇には久しくOwen Meredithとす、假號を用ひたり。詩歌の作頗る多し“Clytemnestra”“The Wanderer”“Lucile”“Songs of Servia”“Fables in Songs”

*E. R. Lytton

*F. Locker.

“Glenaveril” “After Paradise” 等は其の重なるものなり。此の他傳記小説及び他人との合作詩集あり又遺稿は “Marah” といふ詩集及び “King Poppy” といふ叙事詩の二卷となりて歿後に出版せられき。

リットンが全作についての眞價は今尙ほ定まらず。其の作いと多きのみか諸種の詩人の影響を受けて其の躰も種々なり。さりとて摸倣者とはいふべからず獨創の方も見ゆればなり。又批評家に擯斥せらるゝは俗受けを主となせるが故かと見れば世俗には寧ろ高尚に過ぎて悦ばれざる趣あり。隨うて批評は紛々たれど要するに彼れが聲價は其の眞價よりも下にあるが如し。彼れが詩風の晩年に至りて粗々一定せしが如くなれどはじめはテニソン、ハイチ、ブラウニング等其の他あらゆる名家の作に摸倣し時には換骨奪胎にもあらず斷章取義にもあらず他の趣向をも詞藻をも其のまゝに借り來て殆んど増減せざりしことあり爲めに剽竊家といふ非難を被るに至りき。然れども第一彼れが詩は抒情詩として得難き實際的眞誠的不易的の質あり以て其の詩躰の燕雜なる弊を補へり第二は其の獨得の獨語風の話説なりこは他の企て及ばざる所にして後には一變して寓言風とな

りしが若し初より終まで此の詩躰に従事して此處に其の脚を立てしめなば其名聲或は今日の如きに止まざりしならんか。モオリスとスキャンパインとは詩統の上より見れば前にも云へる如く彼のロセッチと同派に屬す。其中後者は尙現に生存しモオリス將た一昨年逝りしばかりにて其の評未だ定まらざる有様なれば茲には唯々一わたり其の名作に付てのみ略説し置くべし。

*W. Morris.

*ウィルヤム、モオリスは一千八百三十四年ロンドンに生る。其の全躰の詩風はチーサーが物語歌を師とし且つ荒唐復古 “Renaissance of Wonder” を主義とせる一種新躰の物語歌を以て本領となせりしが如し。處女作を “The Defence of Guevere” といふ傳奇風の短篇を集めたるものなり。例のロセッチ風にブラウニング風の獨白躰を雜へたるものなり。篇中ブラウニングにひとしく晦澁の個所も少からねど又一種の妙味あり。其のアーサーに關する物語歌はテニソンが “Idylls of the King” に比すれば遙かに劣れる作なれどテニソンの出でざりし前に出版せられしかば世評は頗る高かりき。モオリスが世界及び人間に對する當時の感想の最

もよくあらはれたるは“Haystack in the Floods”の篇中にあり。七年の後“Life and Death of Jason”と題せる長篇の物語歌をものしこゝに全く其の詩材を定め遂に程なく彼の最大作“The Earthly Paradise”『地上樂園』を作するに至りき。『地上樂園』は四長篇より成り一千八百六十八年より同七十年に亘りて出版せられき。チーサーが『カンターベリ物語』の筋とほぼ相似たるものなり。卷中の物語は孰れも作者の創案にあらざ或は古詩歌或は古傳説の中より得たる者にて通常人の見聞きて無趣味殺風景の物語となせるものゝ中に一種の生命を發見しこれを醇化して生氣を與へ是れに衣するに典麗華穠の章を以てしたる也。而して此の長篇は話説の程合ひ其の宜しきにかなひ押韻句法亦た頗る變化に富めるが故に讀者厭倦の情を催さざるのみならずよく篇中の人物と共に夢幻の境に遊ぶを得。且つ作者は大に自然界を愛し戸内よりはむしろ戸外に於て生活せし人なるが故に篇中こゝかしこ自然を歌へる所清新快活の氣に富みたり。時に人をして快哉を呼ばしむるものあり。モオリスの作は尙“The Story of Sigurd the Volsung”及び“Hope and Fear for Art”の二著あり。『アセニヤム』雜誌は前者を以てモオリスが

最成功の作となし其の文章の強健なるところ其の結構の劇詩的なるところ共に『地上樂園』の上にあるとなせり。後者は美術講話集(五回分)なり南歐の美術を推稱シラフェル以前の典雅高渾なる繪畫趣味を論じたるものなり。

*アルヂェルノン、チャールズ、スフィンバロンはモオリスよりは三歳の弟にて同むくロンドンの人なり。二十三歳の時の處女作“The Queen Mother”及び“Rosamond”共に一種の筆力を具へざるにあらねど筆路結構なほ未だたどぐし。一千八百六十五年劇詩“Atlantia in Calydon”といふを作しぬ想形共に全く希臘風のものなり想像の豊富シリーに次ぐとの好評ありき。同年又“Rosamond”をもものしき。蘇國の女皇メレーを主人公となせる悲劇なり女王が冷薄荒淫の性格よく寫されたり作者は之れが爲めに蘇格土黨の人々には頗る憎惡せらるゝに至りきといふ。翌年“Poems and Ballads”といふ詩集を出だしき。作者が彼の世間の批難に抗して美術は道德宗教政治以外に獨立すべきものなりと極端に論じて愈々物議を醸すに至りしはこの時の事なり但し當時の極端なる主義及び缺點は次第に後年に至りて緩和せられ若しくは除かれたり。一生中の最長篇を“Bothwell”とす同七十

*A. C. Swinburne

四年の作なり“Clastelard”の續篇として女王メレーの後日譚を劇詩体にもつせる叙事詩なり凡一万五千行を以て成り登場人物重要なるもの數十人の多きに及びりあまりに長篇なれば舞臺に上らしむる望はなけれど人物の性格はよく現はれ殊に彼のフルードの史筆に基きて物せる女王メレーの如きは執拗多情酷薄にして詭策に富めるマクベス夫人の面影ありと稱せらる蓋し彼れが劇詩中の白眉なり。これより現今に至るまでの著作中にて重なる者を擧ぐれば“Poems and Ballads”の第二集“Songs of the Springtides”“Studies in Song”“Mary Stuart”“Tristram of Lyonesse”“A Century of Roundels”“Marino Faliero”“Miscellanies”“Victor Hugo”等なり。

さて全体に亘りてスキャンパインが作を見るにシャープのいへる如く思想及び意義の深邃幽遠よりも感情の富麗にして光炎あるところに其の長處は存するが如し彼れが思想は到底アラウニング、テニソン、アーノルドの深く且つ高きに及ばず否アリ、ラファエル派中にもロセツチ、モオリスの飄逸なるに及ばず。而して後年の作を取りて調査すれば(第一)甚しくポクトル、ユーゴの感化を受けたる(第二)甚し

く小兒を愛すると(第三)大に自然界を愛し殊に海洋を嘆美せしこと等の特質歴々たり。彼れは其の海洋癖を利用し以て其の詩調の變化を扶けたり平潮漫々歎帆の斜陽を帯びて走るが如き激浪澎湃虬蛟の雨を帯びて叫ぶが如き皆彼れが聲調の素となれるもの也宜なる哉さばかりの長篇に於て讀者の毫も單調に厭くことなきや。實に彼れが詩は「意義の詩」といはんよりもむしろ「音調の詩」と名づくべし。意義の上に於ては到底シユリーとも併ぶを得ずと雖も音調の上に於てはよくテニソンをも凌がんとす。

尙ほ説きもらせる第二流の詩人若干あれどこゝには省きつ。

第十六章 最近小説家

時勢と小説——チャロット、プロンテ女史——其の姉妹——カーラー、メル——其の傑作「アエモン、エイル」——ジョールツ、エリオット女史——マリヤン、エヴンス——其の諸作——ヘンリ、リュニス——チャールス、キングスレー——其の小説及び韻語——アンソニー、トロ、アップ——チャールス、リード——ヘンリ、キングスレー——スチゲンソン

第十九世紀前半の小説家は曩きに「新代小説家」の章に略説したる如し。彼等ほも

とより新代小説家の先驅たりしには相違なけれど之れを同後半期に出でし小説家と比ぶるときは其の間顯著なる差等なきを得ず。何ぞや。前半期の小説家も何れも一世の英才にして其の作に玩賞すべきもの頗る多かれどよく觀れば時勢との關係流石に未だ親密ならず隨うて第十九世紀前半期の英才と特稱すべき點乏しく寧ろいつの時代に置くも差支なき類のものたり其の然らざる者だに新代小説家の特徴を備へたるは殆どなし。一千八百五十年以後に出でたる小説家は是れと異なりいづれも時勢の推動と大關係を有しオックスフォード派の運動、科學の勃興、教育の普及、美術の重視せらるゝに至りしこと、クリミア戦争後英國の再び大陸政略に關涉するに至りしこと、盛んに汽車、汽船を用ひて大に貿易を興ししと、澳大利及び其の附近諸島の開拓、印度騷擾 (India Mutiny) の後ち東印度會社の權力の移動及び一般社會に於ける改進主義の發達等の如きは皆小説家に影響する所大なるものありき。さて一々につきて其の影響を精査せば我が讀者を益すること多かるべけれど今は之れを試みん餘地なければたゞ就中最も著明なるプロンテ、エリオット、キングスレー等數名の上のみを略叙して止まん。

清新獨創の思想と華麗遒勁の筆致とを以て新代小説の先驅をなししものをチャロット・プロンテ女史とす。一千八百十六年に生れ四十歳にて逝りき愛蘭土の人なり。

プロンテが作は一方に於て甚しく攻撃せられながら一方に於て非常の喝采を得たりき。之れ蓋し女史が作は新小説の先驅たりしに因る。抑女史の出で、其彩筆を揮ひしは恰もスコット既に死してリッカルド尙未だ出でずスコットが模倣者も概ね様に依りて葫蘆を畫くに止まり讀者漸く其の千篇一律に飽かんとしデッケンス一流が近代的家庭小説はた纒かに呱呱の聲を揚げしに止まり其の四肢は未だ發達せずして宗教的と懷疑的との間に彷徨せりし時にあり。女史が小説は此の過渡時代と新時代との間に架せる一橋梁にして實に女史が名をして不朽ならしむる所以のものは一つはかく新代小説の先驅たりしに因り一つは其の固有の特質の大に見るべき者あるによれり。所謂固有の特質とは何ぞや。女史が半世の關歴より得たるものは是れ也。其の傑作 "Jane Eyre" に就きて見るに女主人公「ローラの性格の其の自叙傳の文に於いていみじく現れたるは更にも云はず醜主公」

「セスター」の如き人物を描きてよく其の神に入りしものは皆其の閱歴より來れること衆批評家の嘖々して止まらざる所なり。プロンテ女史が閱歴の其の小説を助けしことの少小ならざりしやまた争ふべからず。然れども第二流以下の詩人を利するものも双つながら閱歴なり某批評家もいひし如く女史をして若し尙十年二十年の壽を保たしめこれをして例の如く小説に筆を執らしめば其の名聲恐らく今日の如きを得ざりしならん。何が爲めぞや。女史が閱歴は女史の爲めにほい其の用を成し果てたればなり。女史が多少の創意を加へきといふ「醜主公」の性格の如きも沙翁の大才あるにあらずばよく之を再びすること能はじ况んや女史が筆は少妹エミリが如き妖嬌を欠きたれば永く讀者の愛玩を持続する能はざるべきをや。畢竟ずるに「Jane Eyre」の如きはたゞ一篇にてこそ珍品なれ二篇三篇と續出するに及びては讀者漸く之れを厭棄せんや必せり。論じてこゝに至ればプロンテ女史が天折は寧ろ其の幸なりしものゝ如し。

小妹エミリが作また名あり一時はプロンテ女史を凌ぎたりしほどなりき。概ね短篇にして其の描く所の性格はた廣からずと雖も創新の點に於ては其の姉に譲らず輓近小説の一佳什なり。

プロンテがみまかりし一千八百五十五年の翌秋に綴られ同五十七年の一月より「Scenes of Clerical Life」と題したる小説集陸續「ブラックウッド雑誌」に掲載せられき。

*著者はジョーエル・エリオットと稱せり。ジョーエル・エリオットとはマリヤン・エヴンスの假號なり。女史が此の匿名を用ひて作せしや其の作巧妙なりしが爲めに大に讀詩社會の好奇心を呼び起こし作者の實名に就いて推測揣摩紛々たりき。評壇騷然たること二年餘迷誤は迷誤を重ねて著者をマリヤン・エヴンス女と知るものなく獨りデッケンスが煥眼のみ著者の到底女性なるべきを看破し万一男子ならば古來未曾有の女性的頭腦を有するものならんと言へりき。マリヤン・エヴンスとは何者ぞ。

マリヤン・エヴンスは一千八百十九年に生れ全八十年逝りき。女史は後年スペインの紹介によりてジョーエル・ヘンリ・リユカスと相知り遂に之れと婚して獨逸に遊びぬ時に一千八百五十四年なり。是に於て夫は『グレート傳』を起稿し妻はスピノ

ザの倫理書を反譯して辛くも其の生を支へ此の間若干の知人を得て歸國しぬ。リュクスはもと哲學者にして科學的頭腦を有し亦た詩人的詞才に富み小説作者ともなり得べき資質ありき其の批評の眼識は最も犀利にしてつとに其の妻の劇詩家的才能あるを認めしかば屢々勸めて脚本を作らしめんとせり。エヴンスは夫に勸められて遂に年來の神興を驅りて一篇の小説を作しぬ前にいへる "Scenes of Clerical Life" この第一篇は是れなり。夫妻は世間がこの小説を喝采する聲々をわとにして再び獨逸に遊び妻は第二の小説に着筆しぬ。此の著は歸國の後に脱稿し "Adam Bede" と題して出版せしに讀者の喝采は前者に過ぎヂッケンス、スペンサーの如きも賞讃措かざりきといふ。一千八百六十年第三の小説 "The Mill on the Floss" 出でてエリオットの名聲は全く定まりぬ英國空前の女作家として騷壇之れを稱揚せざるものなきに至れり。引きつゞきて尙ほ種々の作あり。同七十八年夫リュクス歿しぬ。二年を経て女史はジョン、クロスに再嫁し同年十二月に歿しき。一生の言行と書簡とは歿後其の夫クロスの手に輯録せられ題して "Life and Letters" とすべし。

女史は自由を尊尙せしと共に敬虔の念も深く剛毅なる氣象と慈悲深き情とを兼ね具へき。女史が朋友の驚きを顧みずして鰥夫リュクスと婚せしが如き俠氣將た此の間より起りしものなりといふ。

女史が著作は頗る多し詩歌、論文、翻譯等其の冊數殆ど小説に匹敵す。されど是等は要するに皆識者を益するに足らざるもの畢竟女史が眞價はその小説にあり一千八百六十年より同七十年に至るまで即ちサッカレ、既に筆を絶ちてヂッケンス未だ傑作を出ださざりし間に於て英國小説壇中人意を強うするに足りしものはひとり女史ありしのみ。况んやヂッケンスの歿後をや「英國空前の女作家」といふも敢て溢美にあらざるなり。

エリオットが小説を讀みて何人にも明かに了解せらるゝは此の作者に二方面あることなり而して件の二方面を代表せる作を "Silas Marner" と "Romola" とす。第一、女史はよくユーモアの眼を以て些末の人事を洞視し其の奇灰を描きて巧みに人情世相の微を穿てり。"Silas Marner" はさふに及ばず "Scenes of Clerical Life" の各篇は皆此の種の伎倆をあらはせり。此の伎倆たる女史が小説に不易の價値あり

らしむるものにして亦女史が他の一面に比するも一層健全にして精妙なるものなり。按ずるにこれ女史が不幸なる半生の長日月間静かに人世の辛酸を味ひたる結果にして其の成功は女史が結構的創才のいみじかりしに因るといはんよりは寧ろ其の諷諧的觀察の精微なりしに因るといはんがはた隱當の評なるべし。蓋し女史が創才は豊かなりしにあらざる寧ろ科學(若しくは準科學)を好みしなり此の科學癖は遂に女史をして第二の方面を營ましめき。女史が科學に偏する傾向は女史が "Silas Marner" をものせし後更に一層著くなり遂に特別の蘊蓄によりて "Romola" を作るに至りぬ女史の "Romola" をものして材を伊太利の學藝復興に取るや經營慘憺女史自らも我れ此の書の稿に着手せしときは妙齡の處女なりしも其の脱稿の際はや白髮の嫗となりきといへり。女史が苦勞の大なりしを見るべし。

而して女史が此の研究の作は女史が近代英國を主題とするに及びて一層著くなりぬ。女史が後半の作は明に或る「目的」を標幟としてものすることゝなりたり。然らば女史が目的とは何ぞや。女史が所謂科學(準科學)とは何ぞ。夫れ近世の科

學は其の進歩の結果として人間の情を破棄しきながら其の愉快をたる希望を絶滅せんとするものゝ如し。此の時に際し情を以て立たんとする人々は當さに如何してかこれに處すべき。これ女史が其の想像の才を驅りて自ら解釋を試みし問題なりき。女史は及ばん限り科學的智識を攝取し科學を經とし感情を緯として一種の倫理觀を織り成さんと企てき即ち其の最高目的の爲めに科學を使用せんと企てしなり。最高目的とは何ぞや。倫理上の大信仰を確立するとは是れなり。實に倫理思想は女史にとりて第一義にして詩歌と學理とは要するに其の器具たるに過ぎざりき。されば女史の科學を研究せしや主として倫理の方面に於てせり及ぶべくんば科學と調和し人情と調和したる新倫理觀を得んとを望みしなり。而して其の研究の結果として女史は「世界に和樂なくしてたゞ安心あり」といふ結論に達したり。曰はく

世には(少くとも現今の如き世には)眞の和樂なるものなし若しこれありとせばこれ其の人の心の淺薄狹隘にして世界大の悲痛を感ずる能はざるが故の迷妄のみ。心の大なるものは接觸するもの多し彼等は概ね悲痛に接觸す。彼れの處すべき唯一の方法はたゞ自棄の安心のみ云々。

こゝに於て女史は此の上の研究を無要とし或は寧ろ研究するに堪へずして直ちに其の所信を表白するとに力めたりき。女史が後期の作は多くかくの如くして成りしものなり。

女史はかくの如く世を哀觀せりき而も厭世觀に陥りしにはあらず。人間は殆ど必然的に罪惡に傾くものなりかるが故に毅然として罪惡に打克ち其の誘惑に堪ふる是れ即ち最高の徳にして最高の勇なりといふ是れやがて女史が終世の確信なりき。女史は常に此の思想を以て小説を作せしなり。故に其の人物は多く缺點ある人物にして美德の模範たるは殆ど絶無也隨うてふと見れば女史が倫理觀と矛盾馳せるが如く思はるゝもこれやがて女史の小説をして不朽ならしむる所以なり。女史は人間罪惡の必然なるを熟察し深くこれに同感し以て其の筆を執りしなり是に於て讀者は其の人物の缺點を知りて尙ほ愛すべきを感じ時には以て人間世相の實體を見得たるが如き感をなす。是れを倫理小説の泰斗たるリチャードソンに比せんに兩者共に小説に倫理的目的を置く兩者共に英國的なり而も前者は自己の感想を作中の人物に注ぎて之れを理想的ならしめ後者は作中の人

物に自己を同化し自ら其の人となりて悲喜哀觀す。前者を主觀的と名づければ後者は客觀的前者を教訓的といはゞ後者は心理的なるべし而も其の倫理的なるに於ては一なり。リチャードソンとエリオットとをしてかくの如く異同せしめものはもとより品性の相異にもよるべけれど一つは明かに時勢の異同すなはち變遷に歸せざるべからず。讀者の人世觀の未だ哲學的ならざる時代に於ける倫理小説はリチャードソンの教訓小説にして事足るべけれど讀者の人生觀の全く哲學的なる十九世紀に於ける倫理小説はエリオットの如き心理的のものならざるべからず。エリオット謂へらく今代の人士にはもや教訓の必要なしと自ら思辨すればなり且つや小説を以て教訓の奴となすは美術を賊するものと。是に於て女史は其の所觀の世相に従うて心理的に之を活寫し讀者をして自ら人間の何物たるを覺らしめ自ら處世安心の最良法を知らしめんと欲しき。是れエリオットが倫理小説の特質にして亦た最近倫理小説の特質なり。

女史の歿後其の名聲は生前の勢ひに反動して頓に墜落し遂に諸批評家をして女史が晩年の哲理癖を酷評せしむるに至りしがよく好惡を離れてこれを觀れば女

史が倫理小説はもとより意義なきものにわらずまた其の小説的伎倆の尋常ならざるは更に拒言を容れざるべきなり。

ウォールズ、エリオット女史と同年に生れ之れと同時代の小説壇に於て名聲相譲らざりしものをチャールズ、キングスレーとなす。風光畫の如きデブンシャヤの州中にて最も明媚の一邑に住める牧師の家に生れ和照春の如き家庭に生ひ立ちし彼れは嚴格にして變化なきミッドランドの山中に生れて夙に蕭殺たる秋霜に惱まされたりしエリオット女史と共に各其の境遇の特色を表せり。前者は和平流暢後者は森巖精刻而も共に十九世紀後半の思想を代表す。

キングスレーの作は頗る多し其の種類亦た多く概して佳作なり。始めての作を“Village Sermons”といふ平明流暢なる論文集なり。次ぎに韻語の作若干あり又“Saint's Tragedy”といへる悲劇をもしきハンガリーのセント、エリザベスの事蹟を材とせるものなり脚色變化に富みて詞句華麗なり。外に小説“Alton Locke”“Tailor and Poet”及び若干の詩篇ありいづれも見るべし。彼れが本領たる小説の處女作は一千八百四十九年に成りし“Alton Locke”“Yeast”

*C. Kingsley.

といへる亦名あり文軀も結構もなほ未熟にして生硬の個處多けれど一種の生氣あり當時英國を聳動せし勞働問題民權擴張問題等を捉らへて具象的にその解釋を試みたる點裕かに一家の風をなせり。是れより先きキングスレーは基督教的社會主義派に入りてモーリス (Maurice) と相結び短篇を草して新聞雜誌に盛んに其の主義を發表し又“Fraser's Magazine”の誌上に富麗の文章を以て文學上遊戯上其他種々の方面より同じ主義を唱導せしが遂に彼の社會主義を描ける第二の小説“Hypatia”をものし續いて一千八百五十五年には其の傑作“Eastward Ho!”を作しぬ。二年を経て“Two Years Ago”成りぬ材をクリミア戦争に取れるもの也。最後の作を“Hereward the Wake”とす同六十六年に成りぬ。キングスレーに對する評論は今尙ほ紛々たり。

キングスレーが社會上宗教上に關する意見は以上の著作の外公開の演説及び讚美歌論文集等によりて發表せられ何れも多少の聲譽ありき。但し其の社會改善に熱心なるや實に其の小説に累をなして粗雜の議論癖は常に其の作に伴へり。而して其の議論たるや論理錯然趣旨散漫情あまりありて理隨はず而して他の攻

撃に遇ふや憤激怒罵毫も假借する所なし。ニーマンとの論争の如きはこの瑕疵の最も著く現れたるものなり。ローデン氏は曰く。

キングスレーの一方に於て論客説教家たりしとは其の詩人小説家たりし方面に一方ならぬ不利を與へたり。彼れはあらゆる争闘の爲めに静穩なる創作者たるを得ざりしなり。さはれ争闘はもと人間の本性に屬す何ぞ獨りキングスレーを咎めん況んやキングスレーが諸名作は件の争闘の主題たる社會問題に對するキングスレーが抱負意見の所産なるをや。吾人は唯其の平明なる説明に流れて美術の神秘を忘れ人生の隱微を歌ふ能はざりしを惜む。而も當時の風潮に徴すればキングスレーが此くの如きに至れる亦た止むを得ざりしものあるなり。蓋しカーライルのいへる如く所謂労働問題は吾人が當來直接の大問題なり。苟も熱誠ある士にしてそが研究に志さんか一步は一步と其の放棄しがたきを感じ來たらん。しからは熱誠燃ゆるが如き詩人のこれが研究に熱衷せる異とすべけんや況んやあくまでも實際的なる十九世紀の英吉利人をや。此の問題たるや彼の下級労働者を煽動することを能事とせる一種の俗社

會主義とは大に趣を異にせり。其の主導は彼のモリスにしてキングスレー、ラッポロー(Ludlow)等これを補黨し一千八百四十九年一盟社を建てにき。基督教的社會主義派これなり。謂へらく人間は凡て上帝の兒孫なりよろしく基督を媒として相結合すべし基督教の正教として奉ぜられん限りは彼の労働者も相結合一致すべし労働者も兄弟なり競争を停めて共働せよと。該派の所説は實に此くの如き單純なるものにして或は刺りて是れ粗暴なる凡神教的大言と言ふ者もありたりしが其の所説の生命に至りては容易に奪ふべからざるものあり基督教の經典はこゝに至りて愈々人間に密接し又人間の肉體と密接し陳腐の凡説と譏られしものも竟に一世の大問題となりぬ。實に當時英人中にても精神界の人間にして普通社會の人間たるキングスレーの如きは無く普通社會の人間にして精神界の人間たるキングスレーの如きはなかりしなり。

*アンソニー、トロップは(一八一五生一八八二歿)第十九世紀後半に出てたる一派の小説家の泰斗なり。一生の作甚だ多く中には散逸せるもの少からねど其の名作の大概は『パーセット・シャヤ叢書』のうちにあり例へば一千八百五十五年のものせ

*A. Trollope

し端物 “The Warden” 其の一生の傑作 “Barchester Towers” を始め “Doctor Thorne” “Framley Parsonage” “The Small House at Allington” “The Lost Chronicle of Barsat” 等皆この中に收めらる。トロップが小説は嚴にいへば彼れが世界人間の真相につきて深く感得する所ありしが爲めに成りしものにはあらて寧ろ種々の殊なる境遇に觸れて諸種の人物に接せしより其の皮相上の諸現象に通じさながらに之れを叙寫したるものと見るべし是れ所謂寫實小説の一派にして理想の分子を含まざるを特色とせるものなり。

*チャールズ、リード(一八一四生一八八四没) リードは頓智機才に富めり “Peg Woffington” “Christie Johnston” “Hard Cash” “Griffith Gaunt” “Put Yourself in his Place” 等の作皆能く讀者を感動するに足る然れども往々にして好悪偏局し褒貶宜しきを得ざりしかば時に讀者をして眉を蹙めしむるものあり。 “Never too Late to Mend” (二八五六) “The Cloister and the Hearth” (一八六一)などの如きは識者輩の賞美する所也。彼れは「雜報小説家」の名ありき些少の事實を種として咄嗟の間に能く其の詩趣を傳ふるに巧みなりし故なるべし。只惜むらくは近世詩人に必要なる批評

*C. Reade.

的眼光微々たりしが爲めに主題の高下を選択するに拙く隨うて可惜逸才の往々にして其の用途を誤りしことを。

*ヘンリ、キングスレーはチャールズ、キングスレーの弟にして其の才或は阿兄をも凌ぐべしと稱するものもありき。按ふに感想の鋭さは阿兄より微弱なるも諷諧の力は阿兄に優りたり要するに作者としての性質は阿兄よりも健全なりき。惜むらくは壽ゆたかならざりしのみか生活の必要の爲め筆を執りしこと多かりしかば十分に驥足を伸ばすに至らざりき。 “Geoffrey Hamlyn” はその一生の傑作と稱せらる。其の作大概は腹案粗漏にして首尾相應せず支離滅裂に了れるもの多けれど兄チャールズに同じく光景動作及び性格を寫すことに長じ且つ十九世紀作者たるの特質あれば少くとも阿兄のに次ぐ作として何れも讀むに足る。

*ロバート、ステュヴンソン Robert Louis Balfour Stevenson は十九世紀の後期に出て、小説に於けるローマン派風の新派を創始せし人なり。一千八百五十年に生れて一千八百九十四年に逝りき。彼れが名聲の漸く揚がりしは彼の有名なる “Treasure Island” を著し、後にあり。青年の讀み物としてはカピテン、マリヤットの作以來第

*H. Kingsley

*Robert Louis Balfour Stevenson

一に位し而して文學的價値は復かにマリヤットを凌ぎたり。かくて後更に一轉して神、仙譚に趣向を凝らし飄逸なる空想譚“New Arabia Nights”をもものし引きつゝきて同種に屬せしむべき作あまたを作せり。はじめスチンアンソンは論説家としても知られたり。さて其の論文は一種獨得の着眼の流石に見るべきものなきにあらねど論旨多くは散漫に失して堅實を缺けり。されば已れもまた論文の其の長所たらざるを曉り遂に専ら物語をのみ作するに至りしが其の神仙譚は多少の瑕疵あるに拘らず尙ほ十九世紀の奇什として長く後昆に傳ふるに足るべし。彼れは其の得意の話説文を修得せしに先ちて大に内外の物語を玩味しはじめは甲に倣ひ乙に摸し頗る經營する所ありしが竟に一家の躰を定め兎も角も讀者をして一たび其の作を緋けば亦た應接に暇なきの感あらしむるの妙に至れり。其のあまりに誇大に失し形容のわざとらしきは厭ふべしと雖もこはスコット以下物語作者の通弊ともいふべきものなれば深く咎むるは酷ならんか。只惜むべきは女性を描くに拙なるとなり宮媛や處女や妖婆や大抵は活動せずされば篇中に女性が多きもの程兎角に興味の索然たるを感ぜしむ。

第十七章 最近評論壇

雜誌世界——「ハッスホルド、ウオオグ」——主筆「ツッケンヌ」——ウィルキ、コリンズ——「サターデー、レジャー」——「スペクテーター」——「コナンヒル、マガジン」——「イタリミラン、マガジン」——「サッカレー」及び「アーノルド」——「キングスレー」——兄弟——雜誌と評論——「フォオトナイトリ」——「コンテムポラリー」——「十九世紀」——評論家——文章家——「バジオット」——「アーノルド」——「ラスキン」

定期出版物の興隆と其の記者の特質とに就いては既に前章に其の要を示したり本章に述べんと欲するは件の定期出版物を牙營として最近の評論壇に覇權を握りし二三論客の特質に關することなり。然るに第十九世紀後半の文學界は他の點に於ても前半のと其の趣きを異にするが如く定期出版物に於てもまた頗る従前のと異なる所あれば批評界の變遷を叙するにさきだちて定期出版物の若干種につきて其の變遷の跡を點檢するの要あり。

當時舊方地雜誌及び月刊雜誌類も未だ悉く廢刊せしにはあらず。「エヂムバラ評論」及び「ブラックウッド雜誌」の如きは十九世紀の中ごろまでは盛んに「ジョーナル」や「リョットの小説キングスレー」及び「フルード」の論文などを掲げて其の紙面の光彩尙

は陸離たる者ありき。されど新をめて舊を厭ふは讀書社會のならひなり彼等は
その質の良否をばさて置きて只管題號の新を喜び体裁の奇を求めしかば自ら機
運一轉して新刊諸雜誌の續出を見るに至りき。もとより此れ等多數の片々たる
もの過半は所謂朝起暮廢の「三號雜誌」たりきと雖も此の間また自ら多少の改善と
創意との加はれたるものなきにあらざれば全躰よりいへば往者よりは兎も角
も幾分の進歩をなし、と共に一方に於ては印刷輸送等の便利も加はり隨うて紙
面も擴張せられ價格も低減せられ讀者の數も増し遂には今日現に見るが如き狀
況に達したり。さて此の間に於ける變遷の跡を尋ねれば畧、下の三段をなすべし。
第一週刊六ペニー新聞の流行第二月刊雜誌の紙面擴張第三新月刊評論の發行
是れなり。而して週刊新聞の中最も著名なるを「Household Words」〔家庭新
語〕及び「Saturday Review」〔土曜日評論〕とす。

「ハウスホルド、ウオオズ」一千八百五十年の發刊にしてヂッケンス主筆たりき。大
躰に於ては「ブラックウッド」又は「ロンドン」と体裁を等うせり言はば其の發行の
回數を増して價額を減じ論說の程度を低うして通俗的となしさて政治上の評論

を除き去りたるに過ぎざりしものとも見るべし。件の週報の長所は議論の通俗
にして雜報文の輕快洒落なるにありき。但し中には「ロンドン」及び「ブラックウッド」
を掛持ちにて勤むる記者も交りたりしことなれば多少件の二雜誌の特質も加は
りたり隨ひて其の体裁も全く獨創といふべからず且つ美術文學の論の如きはも
と二三の學者に悦はれんよりは寧ろ多數の好尚を啓導せんことを所志とせしか
ば一世の評論壇を支配する力なかりし代りにこれによりて多少文學思想を社會
に弘布するの功はありしなり。爾後此の週報に摸して成りしもの夥多出づるに
至りしが特に取りいで、いふに足らず。

『サターデー・レビュー』は主義特質共に前者と異なり小説の如きは之れを掲載する
こといと稀なり。この種の週報にして著はれしもの既に二種ありき一は「エキザ
ミナー」と題しハント、フアンブランク、フォルスター及びミントー等相續ぎて其の主筆
となり當世紀の三分の二に亘りて紙面の光彩曾て衰へず。「スペクテーター」と
いへるはレンツール Rentoul の主筆となりし以來聲價はじめて定まり持續して今
日に至りぬ。兩者ともに改進黨を以て立てり其のうち「サターデー・レビュー」

は初めは貴族主義を以てあらはれいつしか Independent Tory (獨立トリー)即ち Liberal-Conservative (自由保守主義)を主張するに至りぬ。されば其の紙上に於ても彼の改進黨及び Radical Party (急進黨)の名士が寄稿を歓迎せしと共にオックスフォード及びケムブリッジ二大學の俊才に論説の寄稿を請ひて古文學の研究を鼓吹せり。而してこれと共に彼の當世紀前半に於ける新聞紙の通弊ともいふべき個人の性行を褒貶することを避け其の主義持説に付いてのみ堂々論難する方針を取りしかば其の論説は兎も角も公平真面目の文學として一世の注目する所となり特に文學上の評論の如きは頗る勢力あるものとなりぬ。

『ハウズホールド、ウオオツ』と『サターデー、レヴィー』とにつぎ世に出てしを『The Cornhill Magazine』及び Macmillan's Magazine とす。概し『ブラックウッド』『フレージャー』などと異なる所も見えねど價額の半減せると寄稿に知名の士の多くなれると見れば當時新聞雜誌業の如何に日進の勢ありしかを察するを得ん。『ゴオンホル雑誌』はサッカレーの發行にかゝりマッシュニー、アーノルド之れを扶け『マシラフ』はキングスレー兄弟の寄書を以て其の紙面を飾りき。

雜誌流行の餘勢は一轉して『評論』の興隆となりぬ。但し『評論雑誌』の興隆は政治思想及び文學思想の廣く社會に布及せりし結果なりと見るべきか或は單に當時の佛國に流行せし『Revue des Deux Mondes』の模倣と見るべきかは學者間の疑問に屬すされど兎に角に其の最初にあらはれし評論雑誌『Fortnightly』(隔週評論)が徹頭徹尾件の佛國の評論雑誌に倣ひたりし者なるは事實也。『隔週評論』に次ぎて出でし者を『Contemporary』(當代評論)及び『Nineteenth Century』(第十九世紀)とす。何れも謹嚴周密を以て知られて今尙持續せる評論批判の雜誌なり小説の如きは絶えて掲載することなし。

週刊の雜誌にて最も名高きは『Athenium』にて刊行七十年の長きに及べり『Academy』これに次ぎて出で別様の趣味を以て名聲を前者と争へり。此等の雜誌にて文學上の評論として一時盛んに流行せしは古人の作を取り評議することにしてこれと共に古人の詩選を取りて其の特質を論ずることも盛なりき。さてこれ等の雜誌新聞紙にたづさはりし批評家中其著名なるものを舉ぐればジョン・ウィルソン・クローカー及びアラハム・ヘーローは初期の地方雜誌の名家にして『ミル

ジョージ・リムリー、ヘンリー・ランカスター、ウォルター・パット等は第二期の論客なり中にもパット等はテニソンが異材たるを其の初期の作によりて早くも観破しこれを世人に紹介せし烟眼の解釋者にしてランカスターのサッカーに於ける亦たこれに同じ。パットは多能多材博識洽聞其の評論は政治、經濟、文學、宗教に亘りて餘す所なし中にも復古主義とローマン派主義との中間に脚を立て、仔細にウォルツオスが詩能を論じたる一篇の如きは最も名あり。其の他の文士にては博士ジョン・ブラウン ("Horae Subsecivae" の著者) デームス・ハンチー ("A Course of English Literature" の著者) 及びアーサー・ヘルプス等皆名あり。

マッシュレー、アーノルドが經歷と詩人としての特質とは前章すでに略説せり。其の批評の論文の初めて世に出でしやオックスフォード大學の哲學教授が所論として忽ちに世人の注目し推重する所となりき。此のころ諸雑誌の爲めにもせし評論の文は同六十五年一冊子となりて出版せられき。有名なる "Essays in Criticism" (『批判論文集』) 是れなり収むる所九篇何れも主として文學に關するものなれども論旨博大にして科學、宗教、美術、音樂等の諸科に亘り前人未言の卓説多し。アーノルド

は詩人としては小心翼翼の人にして改削又改削左顧右盼一語苟もせず寧ろ用意の餘りに周到なるに失せしが如き觀ありしが論客としてのアーノルドは殆ど別人の如く直往勇斷一氣湖山を吞吐するの概あり。されば着眼は甚だ奇警にして讀む人を啓發する所尠からずと雖も其のあまりに獨斷的なるや所謂獨り合點に流れて時に論理の順道を逸したる憾あり。

アーノルドと共に同時代の散文壇に馳騁して盛名相譲らざりし文豪をジョン・ラスキンとなす。一千八百十九年に生まれき。其の最初の名著を "Modern Painters" (『近代畫家』) となす二十四歳のをりの文學卒業論文なり其のはじめ此の書の第一卷の公にせられしや文學界一時大に振動しき蓋し其の論の斬新なると其の行文の巧妙なるとが一方に於ては激しき反對論を喚び起し一方に於ては夥多の歎美者を生ぜしなり。

ラスキンは又別に建築論數篇を草して陸續出版しき "Seven Lamps of Architecture" 及び "Stones of Venice" 是れ也。ラスキンは彼のラファエル以前の畫風を主唱するアリ、ラファエル派の柱石にして一千八百五十年より同六十年に至るの間彼の古畫

の典雅入神の致あるを説き熱心に南歐美術の趣味を英國に輸入せんと力めき。
 “Architecture and Painting” (一八五四)及び“Political Economy of Art” (一八五八)は當時
 の講説の草稿なり。爾後引き續き “Unto the Last” (1861) “Munera Pulveris” (1862)
 “Sesame and Lilies” (1865) “The Cestus of Aglaira” (1865) “The Ethics of the Dust” (1866)
 “The Crown of Wild Olive” (1866) “Time and Tide by Wear and Tyne” (1867) “The Queen
 of the Air” (1869) “St. Mark's Rest” “Praetelita” (1885) 等の著あり。『近代畫家』は主
 として近代の英國派の風景畫を辯護せるものなり以爲へらく風景畫に於ては今
 人は却りて古人に優れりと。

ラスキンの著を讀む者の著く感ずるは著者に二方面あることなり。其の一は詩
 人たるの方面にして他の一は批評家美術家たるの方面なり。(彼れ又社會改革者
 としても多少思索する所なりしかどこに之れを略す)。ラスキンが著作は常に
 件の二方面より生れいで、美術の趣味と美の由來とを俗に傳ふるの効果を有し
 き即ち自然を觀察するの新眼光を廣く世人に授けしなり。而して其の影響は決
 して繪畫社會にのみ止まらずして文學上にも社交上にも殆ど繪の何たるを知ら

ざる社會にすらも及びたり。

フィリップ、ギルバート、ハマーントン曰はく

我か英國最近の古畫家にて其のいみトき者を韻語の詩人中に求めんカテニツンば蓋し
 第一に位しシエリー之れに次ぎバイロン、スコット、ウォルツサオス及びキーツまた之れに
 ぐ。而してこれを散文の作家に求むるに至りては吾々はラスキンを以て唯一人となさ
 ざるべからず。(中略)。ラスキンが散文を以て記叙論述をなすの技はあらゆる方面に於
 て驚歎するに堪へたり。

と。多少溢美の傾きありとするも華文的散文の寥々然たる今の時に方りて能く
 此の評を領有せんもの他に殆ど其の人なきは明かなり。以下少しく批評家美術
 家としてのラスキンをうかいはん。

ラスキンが美術に關する批評の特質ともなり兼ねて其の重なる價值ともなれる
 は其の美術論以外に出でて人生論に及ぶ所にあり。換言すれば一個の無上なる
 範疇の裡に倫理的と社會的と美術的とを結合する所實に彼れが審美論の長所に
 してまた其の短處なり。ラスキンが美術の職分兼ねて其の効用なりしとて證説
 せる所は甚だ高尙なり。彼れは美術の批評家たると同時に道德論者たり彼れの

美術品を品隲するや多少倫理的問題に干渉し人間の義務に説き及ばざるとなし。所詮彼れは美術を以て單に道義に關するものたるにとゞめずして神聖なるものとし又道義を以て管り善真なるものとのみせずして更に美なるものとせり。エルノンリーといふ匿名にて嘗てラスキンの美論を批評せしものあり曰はく、ラスキンは徳義と美術とを相關係せしめて双方を神聖ならしめんと欲し却りて双方を毀ひ了んぬ徳義はこれが爲めに荒寥たるものとなり美術はこれが爲めに陋劣なるものとなりぬ」と。此の評は酷に過ぎたれど幾分の眞理を有す。今こゝにラスキンが美論を詳説する能はずたゞ其の所説の要旨を紹介せん彼れは主張すらく「圓滿に美なるものゝ中には圓滿に善なるもの存す。かるが故に人若し眞に美なるものを知りて脱我してそれを愛することを得ば以て私慾の發動を防ぎ其の生活を潔うするに庶幾からん。夫れ善と美とは一ならずして相背けりされど其の根抵を探れば相親和すべき性質を具し相契合する所あり。抑々何故に人はこの缺陷多き人間界にありて美の研究に其の一生を委ねんとはするぞ。曰はく他なし道義を重んずればこそ美を研究せざるを得ざるなれ。蓋し道徳を

して愛重すべく若しくは鞏固ならしめんとせば管り美を知るを以て足れりとせずしてそれを研究し且つ愛好せざるべからず。云々。

言ふまでもなくラスキンが美術上の判断は悉く正確なるものにあらず。今人がラスキンの説を讀まば首肯しがたき點もとより屢々あるべきも兎も角も其の自然の精神を解釋し人間と自然との契合を論じあらゆる高尚なる美術品より來たる靈妙なる聲を解釋し私慾を破し我慢を難する條に至りては其の深と廣との點に於て英國過去の學者中には其の右に出づべきもの殆ど空しきのみならず之れを海外に見るも過去の學者中には競争者多からざるを覺ゆ。さはれラスキンが美論はもとより系統の整然たるものにあらず否其の所見は往々にして前後矛盾せり。彼れはみづから常これにこれを自覺しながらも尙且つ安然たりしものゝ如し。彼れ曰はく

凡そ重要な事柄は概して三面四面又は多々面を有す而して件の多面體の周邊を一步づゝ取調ぶることは頑なる人々にとりてはいとつらき業なるべし。予によりては何事にもあれそれに關する説を勤くも三度ばかり案下かへたる後にあらざれば妥當なりと安んずる能はず。

*J. R. Jefferies.

と。彼れは彼の靈妙不可思議にして無數の方面を有せる美といふ怪物に對して果して幾回の考察をか遂げたりし知るべからず。彼れが美の定義は到底曖昧にして捕捉し難きものなり。加之其の用語例毎に甚だ濫りなりき。要するにラスキンが所説は嚴正なる最近の科學的眼光に照せば條理紛雜見るに堪へざるものなりと雖も其の美術と宗教とを以て相離るべからざる姉妹なりとし兩者に關する眞正の領會の孤立しては得難かるべき由を述べたる一段の精神に至りては一二學者の論難を以て容易に覆すべからざるものあり。アーノルド、ラスキン等に比すれば品位も所説も共に復かの下級にあるも尙ほ批評壇に於て若干月日の間一種の異彩を放てりし者を^{チヨン、リチャード、デフリース}とす一千八百四十八年に生れ十八歳にして新聞事業に従事し“North Wilt's Herald”といふ雜誌に寄書家たりしこと十年餘りさて後ロンドンに上り同七十八年に“The Game-Keeper at Home”と題せる小品文集を著しき。此の書は多數の讀者を得る能はざりしかど一たび讀みし者の間には稱贊の聲低からざりき。かくて尙同種の作若干を著せし後轉じて半ば哲學の性質を帯びたる論文を著はし、其

*W. H. Pater.

の著常に冷遇せられ數奇不平の間に病を得てロンドンを去り一千八百八十七年齡僅かに三十九にして歿しき。其の名は其の訃と共に各所に喧傳し久しく塵底に埋葬せられたりし著書今や定價の四五倍にて數日間に賣盡され諸種の新聞雜誌争ひて其の文牋を模倣せし程に行はれき。かくの如き一時の^{デフリース}熱は忽ちにして冷却し今や其の著はまた再び饜棄せらるゝに至れり。蓋し^{デフリース}の詩人的性質は^{ウォルズトオス}よりは一層精微にして其の世界觀の哲學的な亦た^{ウォルズトオス}に超え其の華儼なる散文を以て且つ論じ且つ歌ふや其の成功せる者に至れば頗る見るべき者ありと雖も之れを以て彼のラスキンの巧妙辭に比すれば彼れは瓊葩綉葉の名花是れは名なく實なき枯木のかへり咲きに過ぎず。宜べなり其のラスキンと相并びて多く風騷の顧客を得る能はざりしや。然れども^{デフリース}も亦た一詞才なり其の派の論說と文牋とは饒かに一流をなせりき彼の^{ギルバート、ホワイト}及び^{グレー}の如きは此の派に屬したりしなり。

*^{ウォルター、ホレシモ、ヘーター}は一千八百三十九年に生れき。處女篇を“Studies in History of Renaissance”となす主題の旨深きと^臆裁の新しきと文致の巧妙なると

によりて大に讀書社會に注目せられき。其の文章の瑰麗にして詩的なるは或はラスキンにも過ぎたるべし。後“Marius the Epicurean”“Imaginary Portraits”“Appreciations”等の著なり何れも行文の典雅を以て聞えたり。“Marius the Epicurean”は或は其の傑作なりと稱せらる。ペーター初めは希臘の美術文學を愛好して殆ど耽溺せんばかりなりしが漸く最近思潮に感染し隨うて其の説も好尚も一變しき。“Imaginary Portraits”は美術の批判なるよりは寧ろ美術家が製作の瞬間に於ける心機の妙用をさながらに説明せんと試みしものなり。此等の諸篇其の最妙の個所に至ればラスキンの暢達に加ふるにトマスブラウン及びデクインシーの巧緻を以てせるが如きものなり但し説の幽微に入り高玄に向ふ所に至りてはラスキンの文の精にして大なるに及ばず。

*ジョン・アッチントン、シモンズはペーターと同一の派に屬せり其の説の精鍊は彼れに及ばざること一等なれども尙同代文士中の錚々たり。其の一生の名著“History of the Renaissance in Italy”は今尙は多數の讀者を有す。蓋しシモンズは南歐の文藝復興の事蹟につきては平生精しく考査する所ありき。シモンズの所論中頗る

*J. A. Symonds.

見るべきもの乏しからねどさすがに一家の學說と見做すべき程のものにもあらねばこゝには之れを細説せず。

*ウィルヤム・ミントーは千八百四十六年に生れて同九十三年に歿しき。ミントーは文學美術の品鑑に美學的觀察を用ふると少なく且つ文章を詩歌的に修飾する事少かりしは前の二人に比して異色ある所なり。嘗て“Examiner”(雜誌)の主筆となりしが同誌の批評文はこれより騷壇に重きを置かるゝに至りき。後ち去りて“Daily News”に入り暫らくにして辭して去りぬ。この間又小説若干をものしき“The Crack of Doom”傑作と稱せらる。是れより先き英國の韻語散文に關する論文をものし又彼の『エンサイクロペヂヤ、アリタニカ』の爲めに若干の寄稿をなしき。ミントーの特質は博く過去の文藝に通じ且つ深く最近の思想に感染せるにあり。其の史論及び文學論は全く兩者の融合より成れるものと評すべし。ミントーの文章は雅馴平淡よく其の言はんと欲する所を悉すを得たり。

*W. Minto.

第十七章 哲學壇及び神學壇

哲學界の文士—アエレミ、ペンサム—スチュワート、ミル—ミルの諸著—ミル

英國文學史 第五篇 近代の文學 第十七章 哲學壇及び神學壇

の特質——ウイリアム、ハミルトン——ヘンリ、マンセル——ホエトリとホウエル——
 法理學、經濟界の文士——オースチン——メロン——スチーヴン——神學界の文士
 ——ビニー——キーアール——ニューマン——其の略歴——其の諸著——所謂オックス
 フォード派の運動——文學家としてのニューマン——オックスフォード派の諸文士
 ——其の反對派の文士

文學を廣義に解して思想、感情、信仰等の文章となりて表はれたる一切を含む者と
 なす時は哲學上の著述の如きは思想の方面より神學上の書籍の如きは思想、兼、信
 仰の方面より文學上頗る重要な位置を保つべく隨うて其の變遷發達の跡を討
 ぬるは文學史家の忽にすべからざるとなるべし。さりながらさやうの文學史
 は純文學はいふに及ばず哲學宗教などの歴史をも含むものとなりて容易くは企
 つべからず。されば本講義の如きは哲學史宗教史などは全く引き離して單に
 純文學を中心とし只折々純文學と密接の關係ある哲學神學の思想感情并々に純
 文學と見做さるべき同種の著述のみを紹介せんとす。すなはちこゝには英國十
 九世紀間の哲學及び神學の著述家中にて純文學の方面より見ても大家と稱し得
 べき入々例へばミル、ハミルトン、ニューマン等を首とせる數人を略述すれば足る。

若し夫れ此れ等碩學が科學上に於ける事業功績を精察せんとせば須からく哲學
 史及び神學史を繕くべきなり。

*デレミ、ベンサム(一七四八生一八三三死)——ベンサムが倫理政治及び法律上の
 持論の中心となりし者は其の利用の說にして所謂利用論。即ちユリチリテリヤン、
 シオリ(功利主義)是れ也。彼れはブリストレイが用ひし陳套の語を借り來り
 て、最大多數に最大幸福を與ふるとをば其の倫理論の眼目となしにき。而も其の
 多數といふ意義如何(例へば小人八十名を占め君子僅かに二十なる國に於ては如
 何)所謂幸福とは何ぞや厚生利用の眞義如何等の如き重大なる問題に就きては一
 たびも精説せず所詮上に言へる如き漠然たる語に基く孟浪の說を建てしのみな
 りきと雖も當時英國の社會は隣國の革命によりて人心頗る騷然たりし時なりし
 かばベンサムが説く所此の機に應じて多少精神界に貢獻する所ありしや疑ひな
 し。嚴にいへば彼れは政治哲學などいふべき者にあらずして一の政論家たりし
 のみ。其の文章は頗る華やかにして力ありシドニー、スミスが名篇にも伯仲す
 べきものあり。兎も角も一時多數の讀者を感動せしめしは事實なり。

*ジョン・スチュワート・ミル(二八〇六生一八七三死) ミルが壯年の著は新聞雑誌の爲めに物せしもの多し自らも“London and Westminster Review”と云へるを發行して盛に其の健筆を揮ひき。彼れは一たびも筆を創作に試みしことなく哲學政治乃至文學の評論のみをものしき。“A System of Logic, Ratiocinative and Inductive” “Political Economy” “Liberty” “Dissertations and Discussions”の著あり。はじめ彼は佛のコントと其の説を一にせりしが晩年に至りてはコント偏僻に流れしかばミル之れを辯析するに至りしなり。彼れが辯析の筆はやがて一層の鋭を加へて蘇のハミルトンの哲學に及びぬ。“Examination of Sir William Hamilton's Philosophy”なるものは是れなり。晩年の著書中にて名高きは“Representative Government”及び“Subjection of Women”等にして其の自傳は歿して後ちに世に出でき。

以上の著述中に含まれたるミルが所見はすべて學說として頗る注意すべきものなり就中經濟學上の説の如きは今こそは稍棄てられたれ一時は殆ど争ふべからざる眞見のやうに激賞せられき。彼れは論理學の史上に於ても明かに一席を占むべき大家なるだけありて其の文の精緻明晰古今の文壇に比少なく一たび其の

根本思想に同意すれば其の何れの著を讀むも徹頭徹尾殆ど悉く首肯せざるを得ざるに至るの概あり。而して彼の議論を進むるや論理術を右にし左には修辭の方則を控へ天稟の文才を以て之れを行ふ故に整々堂々險を馳せず邪を行かず滔々として大河の百流を集めて下流するが如く觀る者おのづから神氣の爽然を覺ゆ。之れをマコーレーが文に比せん其の明快流暢は兩者異なる所なしと雖も彼れには全軀に於て事理の脈絡時としては模糊たるものもあり間其の思想の朦朧を示す然るに此れは飽くまでも瑩然洞然事理徹透して微塵も隠す所なし。即ちミルが文にはマコーレーの華麗なくアインシーの濃淡なく又ラムの輕妙なしと雖も讀みて誤解すべからざる明晰と讀過の記不可言の快を覺ゆる暢達とは他の文人に其の例を見る稀なるものとす。宜なり今に至りても尙議論文の範たるや。

*ウィルヤム・ハミルトンは一千七百八十八年に生れき。一千八百二十年ウィルソンと大學に於ける倫理學科の教授たるの位置を競争して敗れ一時は「エヂンバラ評論」の寄書家となりて哲學上の評論を擔當せしが同三十六年遂にウィルソンに代りて

大學に入り倫理學及び形而上學を擔當して名聲頗る高く其の講說筆記は處々に傳はりてもはやされき。されど如何なる故ありてか彼れは之れを印行せず且つ他にだつさはりし業務もありて其の一生中著述といふは僅かに“Dissertations”と題せる一篇の論集あるに過ぎず。一千八百五十九年に歿しぬ其の講說録は友人の手によりて死後初めて出版せられき。ミルがハミルトンを論評せしは重に此の書に關せしなりき。

ハミルトンの哲學は“Philosophy of the Conditioned”と名稱せらる是れヒュームに反對して嘗てトマスリードが唱へいだしたりし所謂「蘇格士哲學」を援助せんが爲めに立論せしもの要するにカントを祖述せるなり。こゝには其の梗概をだにも叙する能はず唯其の所説のトマス、スペンサー、ベインズ及びヂェームス、フレデリック、フェリヤ等數家に感化を與へたりし事を記しおかんのみ。文章家としては殆んど取りどころなし。思索家としてはデ、クインシー、コールリッジ等の如きまがひ日耳曼通とは同日に談ずべからず彼れは眞成に日耳曼的研究法を用ひたり隨うて語法文脈まで彼の國の科學ぶりを學び其の失までも傳へたり。

*H. L. Mansel.

*ヘンリ、ロングゲル、マンセルは或人々の間には英國十九世紀中の最大哲學者なりと稱せられ又たマーク、パッチソンよりは「仲買の長」(arbitrator)と毀られたれど現今に於ては兎も角も精緻たる思索家といふ公評に其の位置略、定まりたるが如し。惜い哉彼れ命甚だ長からず加ふるに大學校の事務多端なりしと生來や、怠惰なりしとによりて著書あまり多からず隨うて彼れが造詣の眞境は察するに由なし。マンセルは甚だ多方面なる學者にして滑稽の才もあり亦た世間智にも疎からざりき。是れ其の講說の大に學生に喜ばれ其の著書の學者をも益し且つ俗人にも解せられし所以なり。其の或人々に毀らるゝも亦た此の點にあり。學者としての其の本領は自家の哲學系を立て、一派の開山たらんよりも忠實に先人の哲學を傳へて精細に思想の變遷を叙説せんとするにありしなり。要するに彼れは雜誌の評論家當時にては随分正直にして随分偏狹ならざれば出來難き職業として餘りに周匠明晰の頭腦を有し又哲學組織家としてはソフリスト風の所皆無にては大哲學の組織は覺束なき者なるにあまりに精細なる論理癖を有しき。即ち彼れは忠實精細なる哲學史家たるに過ぎず。尙ほ當時に出でし哲學書の稍々文

學的價值あるものゝ名を擧ぐると下の如し。

Frederick Denison Maurice—“Moral and Metaphysical Philosophy” William Archer Butler—
“Lectures on the History of Ancient Philosophy” G. H. Lewes (ホリオット女史の夫) “Biographical History of Ancient Philosophy”

哲學科學及び神學上の著述に關して時を同うしてオックスフォードとカムブリッジとより各々一俊才を出だしき。ホエートリー及びホイウエル是れなり。兩者各々其の學校の特色を備へたりし故に一見明かなる相異の點あり前者は創意に富みたれど博通に於て缺ぐる所あり後者はやゝ其の反對たり但し二人共にデモンソン風の獨斷家たることは一即ち同様の論法を以て歴史を論じ哲學を論じ宗教を論じ又教育を論じき。

*リチャードホエートリーはロンドンの人一千七百八十七年に生れき。著作は多からぬ方なれどいづれも名あるものなり。“Historic Doubts relative to Napoleon Bonaparte” は眼光の明透と論鋒の犀利とを以て稱せられ講話筆記“Party Feeling in Religion”は之れに次ぎ『論理學』及び『美辭學』亦た頗る名あり。概觀せんに彼れはシドニー、

*R. Whately.

スミスに同じくオックスフォード學風の結果として觀察の細緻と所見の博大とを缺きたり但し批判眼と文方とは決して貧なりしにあらず。

*ウィルヤム、ホイウエルは工匠の子なりき。彼れは科學にも哲學にも數學の才を應用して頗る發明するところありき。“The History” (1837) “The Philosophy of the Inductive Sciences” (1840) “Astronomy and Physic in Reference to Natural Philosophy” (1833) 及び “Plurality of Words” (1853) 等皆名なり。其の文章は取りいていふに足らず。純正哲學の名家を擧げ來たりし以上は應用哲學と稱すべき法理學、經濟學の大家をも併せてこゝに序すべきなれど紙數に限りあれば只其の最も著れたるもの二三のみを紹介して止まん。

*ジョン、オーステン(一七九〇—一八五九) “Province of Jurisprudence Determined” を著して世に知られき。功利派の法理家なり。其の夫人また文才あり “Story Without an End” を首とし數編の好著作あり。夫の歿後其の講說草案を集め匿名にして刊行しき “Lectures on Jurisprudence” 『法學講說』是れなり。オーステンの文章は明精晰刻但し何となくせしこましく和らぎなき筆致なり一は其論理法と思想の

*W. Whewell.

*J. Austin.

性質との然らしめし所なるべし。

ヘンリ、チェームス、サムマー、メーン(一八二二—一八八) 著述は法學、政治學等に涉りて頗る多し最も名あるものを“*Ancient Law*”(1861)“*Village Communities*”(1871)“*Early Law and Custom*”(1883)及び共和政治を痛論せる“*Popular Government*”(一八八五)等とす。文牒亦た老成なり。

チェームス、フィッツチェームス、スチーヴン(一八二九—一九四) 其の著には政治神學などに關する評論多く頗る批判に長じき。“*Liberty, Equality, and Fraternity*”(一八七三)は其の一例なり。又チェームス、スチーヴンも亦た有名なる評論家にしてケムブリヂにて近世史の教授をなし、傍ら“*Essays in Ecclesiastical History*”及び“*Lectures on the History of France*”等の著ありき。

尙ほこの他に『人口論』の著者トマス、ロバート、マルサスの如きあり『論理學』『貨幣論』の著者デブンスの如きありいづれも文章家としても推重するに足る。さて神學の方面を觀るに當時に於て最も注目を惹きしものは「オックスフォード派」と稱する一派なりき。こは半ば聖典派に反動し半ば改進黨と自由派に反對して

起りしものにて最も名あるものをヒューター、キーゾル及びニューマンの三家とす。

*エドワード、フリーエリー、ヒューターは一千八百年に生れき。ニューマン、キーゾル等と相結托して宗教上の事につきて盡瘁すること數年著述少ならず。中にも“*Sermons*”及び“*Eirenicon*”この二は文學的價値に乏しからず。其の文章はニューマン、キーゾル等のは頗る異なれり或は露骨或は晦澁と刺られたりしが今日の目を以て見れば必しも然らざるが如し。

*チモン、キーフル(一七九二—一八六六)は牧師の子なりき。キーフルの著作は“*The Christian Year*”の他に“*Lyra Innocentium*”および詩集“*Miscellaneous Poems*”あり。

キーフルの詩才はロセチ女史に似て而も彼れの神秘的傾向に代ふるに博大なる學者風を以てしたりき。彼れは又ウォルゾオスの感化を受けしこと少からずされど其の模倣者たるに止まずして別に一家の風をなせり。

キーフルが著作に従事せしことは大に其の批評眼の發達を資けたりき。彼れは實に詩歌の批評家中に於て當時錚々たる一人なりき。其の名著“*Praelectiones Academicæ*”は惜むらくは學者社會の例によりて羅句語にて綴りしが故に讀者甚だ

*E. B. Pusey.

*J. Keble.

少く隨うて世の注意を惹くこと少かりしも其の英文にてもせし批評文は衆の注視する所となりき。彼れが教授せし美學は大に倫理論の色彩を帯びたりきと雖もさりとして彼れは一切の詩歌を道義の原則によりて律し去らんとせしものにあらず。但し彼れは飽くまでも宗教的事業を其の本領となせりしが故に勢ひ全力を文學的批評に用ふるには能はざりき。

*デモン、ヘンリ、ニューマンはロンドンの人にして一千八百一年に生れき。ニューマンがホーキンズに嗣ぎてセントメリー校の教師の職に在りし十六年間の事業はオックスフォード派運動の歴史の骨子となれるものなり。該派運動は當時の宗教的局面を一變せんとせしものなりされば物議紛然辨難沸くが如く前後此問題に關して世に出でたりし諸著を蒐めば殆ど一圖書館を成すに足るべしといふ而も之れに對する終局の斷案は今尙ほ定まらざる有様なり。ニューマンは一千八百四十三年にハイレル、フルードと共に南歐に赴きしが此の漫遊中心機一轉し歸來セントメリー院を去りオックスフォードを去り爾後三十二年間は同校に飯り來ることなかりき。按ふに是れ彼れが精神上の大煩悶、大苦闘の秋なりしなり。晩年に至りて彼れ

が眞意も初めて世に知られしかば其の死を悼惜するもの無慮數万人、學者僧侶の別なく賛辭を列ねて其の墓碑を飾りき。程なく其の著述全集上梓せられしが書翰及び隨筆の類を除きてすらも大冊四十卷を成すに足りき。今少し之れによりて彼れが思想と文章とを畧評せん。

ニューマンが著の大部分はいふまでもなく散文の論說なれども彼れは韻語の作者としても文學史上裕かに一の地位を占むるに足るなり。中にも“*The Pillar of Cloud*”の如きは優美巧妙なる讚美歌にして宗教上の理想を詩化したる技巧同代比少なしと稱せられて頗る人口に膾炙す。次に“*The Dream of Gerontius*”は最も長篇にしてまたそが一生の傑作と稱せらる。按ふに是れそが複雑多様な行路の絶所を過ぎて今や靜かに來し方をふりかへり見し時の作なればなるべし。韻語の作以前の美文にては傳奇的物語“*Callista*”及び“*Loss and Gain*”の二篇あり措辭に巧妙なる個處少からねど教訓の目的を寓したる跡あまりにあらはにして餘情乏し且つ多數人に讀ましめんことを專とせしが爲めに趣致の俗に流れたるは惜しむべし。

さて其の著作の大部分を占めたる神學上の文章につきて觀るに處々にてもせし講説集十二卷セントメレー院にてもせし通俗説教集八卷論文集四卷歴史論三卷其の他翻譯神學論辯難等十餘卷あり。其の最も不得意なりしは史學なりき。彼れは他の史を重んずる者を好古癖の論者として一喙に附せしことさへありき。隨うて自家所論中には史上の事實を引證すこと少く稀れに有るも年代などを誤れるが多かりき。以下彼れが宗教上の意見を覗はん。

ニューマン及び其の徒は彼の十七世紀の清淨教徒に對しては些の同情を有せざりき。クラップの記する所に據れば人若しオックスフォードに於て「ミルトンは大詩人なり」と立言して同意を求めんとするも恐らくは一人の之れに應ずる者なかりしならんと。彼れが清淨教徒に對する反感はかばりなりき。然れども此のオックスフォード派の首領たるニューマンは或意味に於ては或は眞正の意味に於ては清淨教徒たりしなり。ニューマンの起ちて教導に従事せしや其の事業の標的は當時の世俗のあまりに卑俗なるを匡正して宗教の眞旨を振興せんとするにありき。所謂眞旨とは宗教の峻嚴なる方面是なり。彼れは曰はく「方今誰れか上帝に對して眞

に畏敬の念を持するものぞ。誰れか熱情を以て其の神聖を認る者ぞ。唯れか眞の罪惡を嫌ふべきものぞ。誰れか罪人を見て眞に恐怖震慄する者ぞ。誰れか上帝を褻瀆する異端の卑むべく且つ憫むべきを知る者ぞ。畧言すれば今の時に於て誰れか宗教の嚴肅を知るものぞ」と。是れ豈に一種の清淨教徒の言ならざらんや。然りニューマンの率ゐたるオックスフォード派の舊教徒は實に新教的舊教ともいふべきもの若しくは十九世紀的新教といふべきものなりき。ニューマン曰はく「予はあくまでもリベラリズム(自由神學派)と戦はんと欲す聖儀を非し聖典を議する我意放埒の一派及び其の一段進歩せるものと戦はんと欲す」と。又以爲へらく盡く聖典を疑はば聖典なきに如かず吾曹の依從すべきは此の唯一の聖典なり黒藤々裡の大悲の御手なり云々。

此の説の當否はこゝに評せざるべし但し爲我の念世界の全面に汜濫し安心依據の本地までも爲に覆殺せんとし十九世紀の精神界の如何に混亂紛擾の有様を呈せしかはニューマンが立脚地によりても之れを察するを得べしニューマンが所説は兎も角も英國十九世紀精神界の一側面を代表するものとして永く史上に記せら

るゝに足らん。

ニューマンは文章家としても一世に冠たりき。彼れは一派の文人の如く格を破りて文を修飾する弊なし意の赴くに隨うて筆を進むれども行文皆典據ありて一語苟もせず讀者の易解を主として平順明正を第一とせり。されば文章中形容詞の數いと少く直喩、隱喩、證例の如きも動もすれば險に陥り易しとて常に力めて之れを避けき。されば一種の批評家はあまりに平明なりと貶するものもありしが彼れが天賦の詩才は始終其の文に現はれ温潤和光の趣致酌めども盡きざるの觀あり。加之主題によりてはよく此の平板を脱し曲折波瀾の妙を盡したる場合も少からず。

尙ほオックスフォード派中の有名なる文士を擧ぐればカーチナルマンニング(一八〇八―九三)リチャード、ハーレル、フルード(一八〇三―三六)アイザック、ウィルヤムス(一八〇二―六五)ウィルヤム、ジョーエル、ウァード(一八一二―八二)チーン、チャーチ(一八一五―九二)ヘンリ、バーリ、リットン(一八二九―九〇)ウィルバークス Samuel Wilberforce (一八〇五―七三)アーサー、スタンレー(一八一五―八三)マーク、バッチソン(一八一三―八四)

ベンチャミン、デューット(一八一七―九四)トマス、チャルマーズ、エドワード、アーギンク(一七九二―一八三四)等今一々詳述せず。

第十八章 科學壇の文才

博言學乃至古語學界の文士—ブライヤント—ウエイクフィールド—
ボオソン—コニングトン—マンロー—セラ—スミス—理化學
界の文士—デーギ—フエアファガス—ダーキン—チャムバース—
ヒュー、ミラー—ハックスレー

第一に擧ぐべきは彼の博言學、古語學者の人々なり。按ずるに中世の頃には所謂古學未だ興らず殆ど一人の之れを專攻するものなかりしが降りて學藝復興期に至れば苟も操觚の業に従ふ者にして多少これを修めざりしはなく就中彼のエラスマスの如きは古學興隆の初期に於て最も著名なる學者なりき。爾來一方には國文學發達し一方には希臘拉典の古文學盛んに研究せられ十七十八世紀のころに至りては所謂古學は普通の文學と立離れて特に專攻せらるべき者となりぬさもあれ文學者にして古學の知識なきは尙不具者と見做さるゝ有様にて其の分離

も未だ全きを得ざりしが十九世紀の初めに至りて古學は遂に全く普通文學と立離れて科學の部分に入るとなりぬ。下に述ぶるは分離以後の學者につきてなり。まづ最も聞えたりしはチャコフ、フライヤント、ギルバート、ウエイクフィールド及びリチャート、ボオソンの三家なり。但し此の中の二家は専門學者としての功績は著大ならず。

*J. Bryant.

*チャコフ、フライヤント(一七一五—一八〇四)は當時遺却せられたりし古代の神話を研究せし人として記すべし。ギルバート、ウエイクフィールド(一七五六—一八〇一)は多く古學に關する書を著し斯道を益せしこと尠からず。中にも“*Silva Critica*”は最も名高かりき。リチャード、ボオソン(一七五九—一八〇八)は其の文章の流麗を以て著はれたりき。學者として最も貴重すべき精確の知識、銳利の洞察力を有し其の文章また得易からざりしが惜い哉生來の酒癖は年と共に長じ正則の業務に堪ふる能はざりきそれが爲め著作の見るべきものを遺さずして逝りぬ。以上三家の歿後オックスフォード、カムブリッジ及びエヂンバラより各々一名の古文學者を出だしたり。

*W. Y. Sellar. *H. A. J. Munro. *J. Conington.

オックスフォードより出でしはジョン、コニングトン(一八二五—一六九)にしてホレウス、ホーマー及びブーサル等の翻譯を首として南歐の古文學を紹介して文壇を益せしこと尠からず。其の古學に於ける學風は日耳曼の學者のごとく精緻なるを得ずまた英倫の學者の如く堅實なるを得ざりきと雖も多く子弟を啓發して遺憾なく古學の堂奥を窺はしめし伎倆と彼の死記死誦の弊實を脱してよく古文學を現文學に復活せしめたりし功績とは共に長く忘るべからざるものなり。

カムブリッジより出でしはヒュー、アンドリュース、チンストロイン、マンロー(一八一九—一八二)なり。或は Inorenius を翻譯し或は ホレウス、カタラス (Catullus) 等を評論し其の他古學の研究に屬する斷篇少からず中にも希臘古典の詩歌を國詩に翻譯し、伎倆は當時獨歩なりき。たゞ其の風調の妙を傳ふる能はざりしを遺憾となすのみ。エヂンバラより出でしはウィルヤム、ヤングセラ(一八二五—一九〇)なり。其著述は以上三家のに比して一段文學的趣味に富めり。“*Roman Poets of the Republic*”は同種の作中空前の名著なりと稱せらる。後ちブーサル、ホレウス、チバラス Tibullus 及び プロペルテウス Propertius 等に關する評論を著しぬ。

*W. R. Simth.

さるほどに古學の研究は一步を進めて或はエジプトの古文學を研究し或はセミチック族の古語を討ね更に印度を中心として東洋諸國の語學を修め兼ねて其の文學宗教等を紹介するもの現るるに至りしが一々語るに遑あらず。下にはウィルヤム、ロバートソン、スミッスの上をのみを畧叙して他の科學者に移らんとす。

*ウィルヤム、ロバートソン、スミッスは 文壇に立ちては獨逸風の評論に知られたり。彼れの最も長じたりしは東洋の古典にして新約書に關する重んずべき考證少からず。その他 “Kinship and Marriage in Early Arabia” 及び “The Religion of Semites” の二著なり。文致は少くも當時の第二三流に列するを得べし。

さて理化學壇の文士に移らんにハムフレードーギー(一七七八一—一八二九)は先づ第一に紹介すべき人ならん。彼れは有名なる化學者にして炭坑用の安全燈を首めとして諸種の發明あり廿三歳の時選ばれてロンドンなる、ロイヤル、インスチテューションの講師となりしが其の講話の趣味に富めるは前後比ひ尠なかりき。後には彼の有名なるフアラデー、チンデルも其の講話を助けたりき。著書は“Salmonia”及び“Consolation in Travel”の二冊あるのみなれど何れも當時歡迎せられ其の他

*H. Davy.

*M. Fairfax.

の小著にもまた文材の見るべきものあり。

デーギーと同時に出て數學、天文、地文等の學者として文名噴々たりしはメレィ、フエヤックス(Mrs. Somerville)なり。其の自傳は筆致流麗有趣味の記事に富めるを以て稱せらる。其の他にては David Brewster (1781—1868) 數學理學の専門家 John Herschel (1792—1871) 天文學者 Charles Lyell (1797—1875) 地質學者 Robert Murchison (1802—1871) 同上 John Tyndall (1820—93) 物理學者等なるが皆文名ありき。

されども時の科學界の泰斗にして文名また一世に高かりしはダーキンとハックスレーに超ゆるものなし。

*チャールズ、ダーキン(一八〇九生—一八八二死) は彼の十八世紀中韻語を以て著はれ兼ねて科學の造詣淺からざりしエラスマス、ダーキンの孫なりその有名なる “Origin of Species” 及び “The Descent of Man” の二著は世界を聳動せし十九世紀の最大著述と稱せらる。

晩年に至りて其の人に語りし所に據れば彼れはいたく文學を好みことにシェイクスピアを愛誦せりき而かも其の詩文を耽讀せしは老後よりも寧ろ少壯のころな

りきといふ。それが文學的素養の文學と最も縁遠き學術研究の當時にありきとは奇ならずや。彼れが英氣の旺盛たる少壯時には其の勢を潜めたりしが老成一家の見を樹つるに及びて煥發せりき。"Voyage of the Beagle" "The Origin of Species" "The Descent of Man" 等一として文致の老成を見ざるはなし。ダーキンの文牘は明晰と強健とを旨として無要の修飾を加ふるとなし而も其の事を叙し理を論ずるや主客整然緊張宜しきを得て宛らに其が學說の真相を發揮し來る。ダーキンより前に出で、早くもダーキンのまがひの一進化説を "Vestiges of Creation" と題せる一書にて唱へ忽ち世俗に喧傳せられ學者より手痛き攻撃を受けし者あり。其の名はロバート・チャムベイスといひてエヂンバラにて其の兄と共に多年通俗にして有益なる種々の書籍を刊行して名ありし人なり。件の書は科學説といはんよりは寧ろ隨感録の整ひたるものともいふべきものなるだけに讀みての趣味は少からず。説の斬新なる文の感情的なるいづれも時の讀書社會を動かすの力ありき。此の人の著は尙ほあれどいづれも此の著には遠く劣りたり。チャムベイス及びダーキン等が説に對する攻撃はさまざまなりしが中に最も激しく反對

せし者はいふまでもなく時の宗教家なりき。而して "Vestiges" の攻撃者中にて最も力ありしはヒュー・ミラー(一八〇二—五六)なりき。彼れは半ば宗教的半ば科學的なる見地に立ちて根本的に其所謂邪説を顛覆せんとなしき。ミラーは當時の英才にして觀察の周細を以て著はれ地質學を専攻しながちも侮るべからざる文才を有し多年新聞雜誌の編輯寄書に従事して論難に老練なりし人なればチャムベイスの薄弱なる議論の如きは忽ちに挫け敗れき。ミラーは中ごろ神經衰弱の餘り發狂し遂に自殺して失せたりしかば其の専門的著述は "Old Bed Sandstone" (一八四一)の外多く見るべきものを残さずして了りぬされども其の通俗ながら雅馴明快なる文致は多とするに足るべきものなり。さて十九世紀科學壇の彬々たる文才の殿として餘業の今尙顯著たる者をトマス・ヘンリ・ハックスレーとなす。ミラーよりは二十年ダーキンよりは十五年の後に生れて世に重んぜらるゝと四十年一千八百九十五年に齡七十一歳にして歿しき。彼れが科學界の功業は彼の進化説を特殊の見地より見て確立不動のものとなしを第一として其の外枚擧するに暇あらず。其の博覽強記にして根柢の廣く固

きは更にもいはず其の断案の力ありて確かなるなどは皆人の稱ふる所なり。彼れが批評家としての伎倆は一千八百七十八年『英文豪列傳』：“British Men of Letters”の爲めに著し、『ヒーム傳』に於て知らる。引證該博議論雄大にして情理透徹文致亦た之れに副へり彼れもまた一世の文豪たるに恥ぢざるなり。

第十九章 脚本

十八世紀以前の脚本と十九世紀の脚本との相違——インテポールド
 女史の作——サモン、オキーフの作——ペーリー女史——技巧悲劇——傳奇劇
 復興運動——學者劇——シェリダンの諸作——リットンの諸作——
 梨園外の作劇家

第十六世紀このかたの英國脚本を通覽せる者は必ずや其が第十九世紀に至りて一大變化を経過したるを覺らん。按ずるに十八世紀以前に在りては脚本と演劇とは大抵相一致せりき即ち脚本として作られたるものは大抵必ず演ぜられ演ぜらるゝものは讀み物としても亦興味ありしが第十八世紀の末より十九世紀へかけては兩者次第に相分離し机上に巧妙の文學として持て囃さるゝ脚本は舞臺にか

*J. O'Keefe.

けては成功せざるが多く舞臺に面白く演ぜらるゝ脚本は讀みては興味の索然たるを常とするに至りぬ。要するに脚本中に演ぜべき脚本と讀むべき脚本との二種を生ずるに至りたり。奇なる現象といひつべし。今其の原因を尋ぬるに先だち演劇と脚本との實況を語るべし。
 一千七百九十年より一千八百十年に至る間に於ける舞臺に上りし演劇の臺帳は一千八百十一年インテポールド女史の手にて“Modern British Theatre.”と題せる十卷の冊子となりて世に出でしが其の眞詩趣に乏しきこと甚だし。いづれも凡作といふものから實用上より觀るときはホールクロフト及びコールマンなどの如きもや、堪能の作家なり其の他の作者の伎倆はた幾分か取るべきものありオキーフの如きも蓋し其の尤なるものか。
 *ジョン・オキーフ(一七四八—一八三三) 大小五十種の作多くは滑稽劇にして眞喜劇の趣に近きものと單に一場の戯謔に過ぎざるものとあり。其の直接の文學的價値はいと少けれど何れも舞臺上に當りを博せしものなれば脚本として多少參考するに足るものなり。

*Joana Baillie.

さて前にもいへる文學と劇との分離を生ぜし端緒はベリリー女史(一七六二—一八五一)が作せし頃にありといふべし。女史當時閨秀として一世に讚美せられし女にて其作に多少見るべきものあり。女史が作は概して演じてよりも寧ろ讀みて趣味あり。其悲劇の無韻律語は辭は精練なれども熱誠の神興に乏しく且つ多くは一地方の特風乃至一時代の特風に偏しヒザンチン、サクソン又は學藝復興等の一時一處の類型的人物を主とせるが故に個人の性格は漠として捉へ難きを常とせり。喜劇の作には時に無邪氣の可笑味なきにはあらねどこれはた科白上の滑稽に乏しく且つ破綻乃至和解の因縁を人物の性格に置かざりしが爲に興味深からず。要するに女史が一世に名を成し、其の作の價值ありしが爲めにあらで寧ろ恰も文學の間歇期なるが爲めなり。

かくて十九世紀の初めつかたより所謂技巧悲劇 Artistic tragedy (Artistic Comedy) に対して云ふ起り劇界に新現象(好現象)とはいはずを呈しぬ。其由來を尋ぬるに氣鋭の作家等が當時の劇の或は價值なき佛劇の摸倣にとまり或は荒唐なる夢幻劇の類ひにして到底爲すに足らざるを感じ翻然遠く十七世紀に沂りたいちにシェイク

*J. S. Nowles.

スピヤを摸範として之れに十九世紀の新思想を注ぎ以て一新劇を興さんと企てしに因したり。按ふに是れ傳奇派運動の一波たるに外ならねど流石に此種の劇の起りしは偶然にあらざりしなり。既に之れより先きにもチャールス、ラム、ゴト井、パイロン、スコット、シェリー、コールリッチなど皆多少作劇の筆を染めその概ね失敗の引きつゞきしにも拘らず演劇をして若しくはせめて劇詩をして趣味多からしめんの企圖は常に息まず如何にもしてこれを實現せんと欲せしは明かなる時の需なりき。こゝに於てか或はベッドフォードが傳奇劇復興(エリザベス朝の人にあざれば到底夢幻劇の成功覺束なきこと猶ほ我が今日の夢幻劇の新作の到底元祿享保の夢幻劇に及ぶ能はざるが如きものなるに拘らず)となり或は所謂學者劇となりぬ。ミルマンが "Fazio"、タルフィールドが "Tom" などは學者劇の標本なり。而していづれの方にも一として成功の著きものはなかりき。タルフィールドは寧ろプラウニングが新作の紹介者となりて彼の神韻幽渺たる "Satanstoe" 及び情感深刻なる "Blot in the Scutcheon" を上場せしめし功勞に關して記憶せらるべきなり。かくて當世紀上半の文學と劇とをして全く分離せしめしはシェリダンのノールズ(一

七八四—一八六二)なり。其の作は當時殆ど格言視せられし劇場の實際知識なく
ては好脚本をものする能はずといふこと文學の才に秀でし人は不思議にも劇場
に意を得ざる世なりと言ふとを實證せり。但しこは反面より實證せしにて彼
れが作は其の劇の實際に通じたりし爲めに舞臺には成功したりしが文學上の價
値は甚だ乏しかりしなり。其が悲劇中にて最も著名なるは“*Virginus*”にして作
として佳なるは“*Caius Gracchus*” (一八三六)及び“*William Tell*” (一八三四)なり。
而して喜劇の傑作は“*The Hunchback*” (一八三二)及び“*Love Chase*” (一八三六)等
づれも例の“*artificial Comedy*”をや、改善せるものと見るべし。本來神興により
て筆を馳せしことなきが上にあまりに多く舞臺の事情に拘束せられし爲め其の
人物動作等いつも型に拘したるものとなり文學上美術上の價值を損じたるは亦
た己むを得ざる結果なりき。

*B. Lytton,

舞臺上の成功はシエリダンに次ぎ文學上の價值は流石にシエリダンよりも優りし
はペルワーリットの脚本なり。“*The Lady of Lyons*” “*Richelieu*” (一八三八) “*Money*”
二八四〇)等はけだし其の傑作なるべし他は一と言ふに足らず。以上の作者はシエ

リダンを除く外は大抵専門の劇作者にあらずいはゞ劇の極衰期にいでしが爲め
に多少の名をなし、門外文士なり。しかるにこゝに門外文士にして流れくゝて竟
に劇界文士となりしもの一人ありフランスは是れなり(一七九六—一八八〇)。もと
古物學者にして多少の名ありしが一千八百十八年頃より著作に従事し翻譯創作
の長短篇合せて百餘に及びそのうち劇の作は正劇より端物に亘りて頗る多し
いづれも輕妙以上の讚辭を與へがたし。

此の外當中脚本に指を染めし者を挙げ來らばミットフォールドよりテニンソンに至
るまで詩人小説家の名若干を擧ぐべき筈なれど彼等の作は其の本領にもあらず
且つは劇壇を輕重せし作にもあらねば今は總て省くこととせり。

第二十章 總收

十九世紀文學の價值—詩歌變遷の五期—自然主義—ロマン派—
詩人の輩出—テニンソンとアラウニンゲ—模倣と創作—プリ、ラファエ
ル派の運動—詩歌の全盛期—小説界の變遷—文學と生活—定期出
版物の發達—匿名の流行—歴史文學—劇文學—神學—科學—美學
其他—現未の疑問

既に論述したるが如く第十九世紀の新文學は前世紀の末に起りし歐洲革命の所産にして其の萌芽は既に十八世の末にあり就中一千七百八十年より一千八百年までの間に此の氣運最も著かりしなり。此の間にいでし著作は單に文學のみの上より見れば價值多きものにあらず。所謂文學鑑賞家等は以爲へらく此の期の文學中ホスエルが『デヨシンン傳』バインズが詩歌の數篇及び“Lyrical Ballads”等を除くの他は亦た大に見るべきなしと。又以爲へらく小説の如きも大抵は荒唐蕪雜稚氣を脱せざるもの多しと。さもあれ比較研究の態度を取れる文學史家乃至國史家などの見地より見來れば流石に作の價值以外に幾多の取りどころあるをおぼゆ。例へはクラフ若しくはクーバーをとりてゴールドスミス若しくはトムソンと比較せば如何。更らに之れをウォルツチオス若しくはコールリッチと比較せば如何。斯くの如く比照すれば當時の諸作家が小品だにも別に新意義を生む來る。况んやバインズ、ブレイクが新聲をばサウザト、コールリッチ、ウォルツチオスが初期の作と比照したる場合をや。所詮過渡時代の作の價值は作其の物の上のみ存せずして後の傑作の導火線たりし上に存す。

當期の小説界の狀況またこれにひとし當時の小説家等が後代の作家を指導せしかは多少詩人らに劣りたれども其の勞苦の度は彼れらに越えたり。ベッドフォードが物語はバインズが詩歌と對すべくホールクロフトゴドギン等の小説はクーバー以下の作と相照らすべし。而してスコットが小説上の新事功に至りてはウォルツチオス、コールリッチ等の韻語上の功蹟よりも或意味に於ては一段困難なる事功なりしなり。且つや當時の韻語詩人にありては若し十八世紀の無氣力爛熟に厭きたらん場合には直ちに古に復りて其の師表を紀元前四五世紀の希臘に求むるを得べく中世の伊太利に求むるを得べく學藝復興時代の各國に求むるを得べかりしが特に小説家はさる便宜を得る能はざりしなり。按ふに小説作家の則るべかりしものは十八世紀の自國作物かさなくは佛蘭西伊太利の物語類ありしのみ。而してこれ等の作はた新小説の創製に對しては殆ど何の裨益する所もなかりしなり。彼等は徒らに闇黒中を摸索したりき。後世がスコットの功を多とすべき所以は蓋し此に存す。

評論壇、神學壇などの模様も亦詩歌小説壇の趣と大差なし。要するに件の二十年

間は文學界全躰が未だ緒に着かざりし時なり。

そのころより今日までの間に詩歌界は變遷の五期を劃せり。其の第一期第三期及び第五期には創才ある詩人彬々として輩出し第二期と第四期とには彼等が名作相接踵して出版せられき。即ち第一期は一千七百八十九年代即ちスコット及び湖上派詩人を首としてシェリ、キーツなどの出生せし時代也。第二期はこれにつゞ十五年間にして第三期は一千八百十年より以後の十五年なり。第四期はそれより一千八百三十六年まで第五期はモーリスの生れし年より今日までなり。件の第一期に於てはロマン、マン、ス(傳奇的詩歌)復古の勢ひめざましく中世文學の復活佛蘭西革命の影響及び神秘的觀念の勃興等は之れを助けて力ありき。自然に復れ、新たに立脚地を自然界に求めよなどいふ聲はまづ半無意識にクーバーとクラッパとによりて揚げられバインズとフレックとによりて他方面より助長せられ程なく“Lyrical Ballads”は出版せられ遂に確然たる精神的のものととなりてウォルヅテオス、コールリッチ、シェリー及びキーツよりスコット、バイロン以下サウマ、カムベル、リ、ハント、モーア等に傳はりたり。要するに當時の詩壇は自然主義を以て一貫した

りきといふも可なり。而して其の派の詩人が社會に及ぼし、勢力の多少は必しも件の精神を享受せりし度合には關せず。スコット、バイロンの如きは詩人としてはウォルヅテオス、コールリッチ、シェリー、キーツの下にあり其の自然主義はた四家のに及ばざれども其の社會上に得たる名聲に至りては遙かに彼等が上にありしなり。リ、ハントも詩人たるの天才技倆は更らに一段の下にありしも其の一時の感化力はウォルヅテオス、バイロンに越ゆるものありき。

さてこゝに注意すべきことあり何れの代にても名匠巨手の輩出したるあとには騷壇の景氣一時沈落するに至るかさなくば小手腕の作家が摸倣の作のみはひくが常なるに當期に於ては毫もさることなかりしこと是れなり。テニソン、ブラウニング、アーノルド、ロセツチ、モオリス、スフィンバインの如き俊才がウォルヅテオス以下前代名家の後嗣として一層の光彩を門戸に生じたりしは更にもいはず、フレッド、マコーレー、テローア、ダーリー、ベトリス、小コールリッチ、ホオン等の如き第二流の詩人すら各々特得の伎を有して他の摸擬を事とせず兎も角も一家の詩躰を持して此の間に參はりしは奇觀とすべし。彼等群詩人のウォルヅテオスに對す

るはエリザ晩朝の詩人等のチンソン、フレッチャーに對し若しくはスペンサーに對せしが如くならざりしのみならず寧ろ新生面を開き來りて英國の詩歌を富贍ならしめき。彼等の作は一つ／＼に取りいでゝは見どころも少けれ引きくるめて評すれば容易に得難き吟詠集とたゞへつべし。

さて次ぎにあらはれしテニソンとブラウニングとは共に詩歌の俊才といはんよりは寧ろ神才といふべきものにして全く同時に出て同行路を取り作詩に従事すること共に六十年且つ修養の爲めに久しく作を絶ちしこと其の修養の大效ありしこと爾來致々として作詩に従事し終生之れを怠らざりしこと等に於て兩者相ひとしかりしのみならず其の作詩の質に於ても二人の差はチソーサー、スペンサー、ウォルヅヲオス、シェリー等の個々の間に存する差異ほどに著大なるにあらず。二人共に自意識して現在を歌ひ又未來を歌へり。其の差等は此の未來を謳歌せし深淺と詩の技倆特質とにあるのみ。かくも同様なる天才の同時代に出て同一方面にあらはれて半世紀以上の文壇を飾りしは稀有の盛觀といふべきなり。テニソンとブラウニングが作を誦するに方りて毎に回起せらるゝはキーツが功蹟なり。

彼れが著作の量は多からず又社會に對して勢力ありしものにあらず。然れども彼れは明かに第三期の首に坐せりしもの彼の十九世紀詩歌の特質の一たる歴史美術文學を歌ふとは主としてキーツによりて端を發かれしが如し。人或はキーツが作を以てテニソンが作の父なりとなすかゝる意味より言はゞ或はブラウニングが作の祖なりともいつべし。

テニソン、ブラウニングの二文木が枝を交へ葉を重ねて一世間の文園を蔽ひし時幾多の名草芳樹其の下蔭に生長しき。曰はく詩才に兼ねるに批評眼を以てせるマツシュ、アーノルド曰はくロセツチ兄弟一家、曰くモオリス、スフィンバイン曰くクラフ、ロッカー、リットンの諸英。

テニソン、ブラウニングに至りて十九世紀の詩歌は其の頂點に達しこれより暫時また衰期に向はんとする徴ありしは第一期第二期には影もなかりし摸倣といふ事の此の時に起れるを見ても知るべし。もとより大詩人の作は或は想に於て或は形に於て後代に影響すること夥しく現にウォルヅヲオスの如きは殆ど一百年間多數人(散文家をも含む)の間に大なる勢力を有しシェリーの如きも久しく盛んに摸倣

せられたりしとあれど概して言へば第一期第二期の作者は或一二家を標的とせ
 ザ寧ろこれを階段として一層の高處に登らんと試みしなり。然るにテニン、ブ
 ラウニク出づるに及びては十九世紀詩人のなし得べき頂點ほこゝに定まり
 しか只管に二人を師表とせんとするもの續出しき。想に於て二人の如くならん
 と勉むるは或は可なるべし晦澁險怪なるアラウニクが詩形を學びてそも何ご
 とをか爲さんとすらん。

この摸倣の卑しきを知り獨して自家の感想を歌ふべしといふ主意を立て、健氣
 にも現はれし瘴擊派と謂ふ一派ありしが惜しむらくは此の派のうち偉大なる
 詩才なかりしかば何のしてかしたることもなくて衰へにき。かゝりしかば摸倣
 の潮勢は倍々其の甚しきを致したりき。リットンリットンの如きは明かに前人摸倣の弊に
 陥りしものなり。かゝる例は尙其の他にもあまたありき。第四期に於て最も注
 意すべきは先ラフ、エル派の事なり。此の派の生起せし發端は美術界にあり。繪
 畫彫刻界に於ては今尙其の勢力盛んなり。而して詩歌界に於ける其の代表者
 をロセッチロセッチ兄妹、モオリス、スキャンパーン四家とす。十九世紀後半に於て此の派の勃

興せし伏線を尋ねれば近くはテニン遠くはスコット更に遠くはパーシイの中古
 文學鼓吹にあり。按ふに此の派の主義は單に復古たるに止まらざりしなり。彼
 等は趣向に言語に過去を學びし外に更に更におのゝ其の見る所によりて新生面を開
 きたり。ロセッチの多感にして感情燃ゆるが如きロセッチ女史の宗教的にしてやさ
 しくみやびたるは更らにもいはずスキャンパーンの妙辭流るゝが如くにして韻調
 鏘然たるモオリスの物語歌の美妙にして温雅なる何れも近代の佳什にして上代
 にも稀れに見る所の珍品たり。要するに此の派の詩歌は彼の荒唐無稽なる併し
 ながら天真爛漫たる中古詩歌の骨髓を取りて之れに加味たるに十九世紀的精緻
 と深遠とを以てしたる者といふを得べし。

第十九世紀は實に詩歌の全盛期英國詩歌の全盛期なり。其の量より見るも其質
 より見るも其の主題の範圍より見るも古今内外かばかりの盛況に達したりし例
 はあらず。試に“Ancient Mariner”より“Crossing the Bar”に至る九十年間の作物を見
 よ。其の價値の度の上より見るも世界中何れの國の詩歌か能くこれに凌駕すべき。
 其の詩風の上より見るもシェリー、ウォルツオスの如きは他國に其の等比を見易か

らざるに非ずや。加ふるに往昔行はれたりし長篇の物語歌に妙趣あるを認めて之れを再興せんと圖る者ありき。すなはち詩歌は及ばん限りあらゆる方面に於て發暢を試みられたり其の成功せざりしは僅かに彼の劇詩を韻語もて綴ること、深刻なる諷刺詩を試る事との二ありしのみ。所謂應用詩歌の類すらも興らざるなかりき。所詮十九世紀の英國抒情詩は其の圓滿なるとに於て殆ど希臘の昔に接近するものといふべく其の範圍の廣きとに於て世界の詩風を籠蓋せるものといふべきなり。詩中の詩たる抒情詩に於て此の域に達したる英國の功蹟贊美すべし。

さて小説^①の上を言はんは十九世紀の小説は其の興隆の初めには確乎たる標準なかりしが爲め五里霧中にありしことは前にもいへるが如し。十八世紀末二十年間及び十九世紀の初め十五年間に於て見るべきもの僅かにエドモンド・オース女史の作など二三篇に過ぎず。スコットが韻語より散文に轉ずるに及びて近代小説はロマン派の一風を加へ今に至りて絶えず。其の作「Waverley」の如何に成功せしか其成功の如何に急速に歴史小説を誘起せしか歴史小説の如何に時風小説を誘起

せしかこれと共に起こりしシオドリア・ブックが滑稽小説は如何この兩者の間に立ちしリットンは何さて十九世紀の中葉に至りて歴史小説の火氣一たび想み如何にキングスレーが作新光焰を揚げしかこれと共にサッカー・ブロンテ女史、ウォーレス、エリオット、アンソニー、トロップ、ヂッケンス等の起こりし模様は如何現今に於ける諸種の小説の區分如何等は略々既に説きおきたれば今これを重説せざるべし。只注意すべきは詩歌の全盛と小説の全盛との關係なり。

詩歌と小説とは共に十九世紀英文學の大現象にして共に近代大革命の影響によりて現はれしものにはあれど詩歌と小説とは元來其の勃興の動機を異にせる由を知らざるべからず。古今東西を問はず人の或境に臨みて詩情を催すは天性なれど人は必しも他の詩歌を玩讀するを好むものにあらず。かるが故に古今東西詩歌は頗る多けれども其の後世に傳はるはいと少し。其の同時代に傳播する範圍また知るべきのみ。幸ひにして多數の讀者を得る作者だにもこれのみによりて生計を立つるは難し。然るに古今東西斬新にして趣味ある話説を好むは人の天性なりこれを語るもの之れを聞くもの、多き言を俟たず而も之れを組織し又

は之を文に草して一部の小説となす伎倆あるものに至りては割合に少數なり。此等の事情によりて詩歌と小説とを比較せんに前者は需要少くして供給多く後者は供給少くして需要多し。かるが故にホーマーは食を市に乞ひリットンは一作十萬金を得たりき。

以上は通じて見たる詩歌小説と讀者との關係なるが今之れを英國の十九世紀に見んか文明の進歩は日に月に著く教育は急に普及し國民の大かたは文字を解するに至り世間一般に生活の餘裕生じたりしかばこゝに娛樂を求むる心起こり人々小説類を歓迎しき。かるが故に少しく文才機智あるものにして筆を小説に染むれば其の作としての價値は兎も角もあれ相應に一生を支ふるを得たりき。こゝに於てや僅々五六十年間に由りし作其の數に於て過去全體の幾十倍するに至りぬ。此の間に由りたりし小説は必ずしも悉く拙劣なる急作にはならず其の質に於て概して十七八世紀の幼稚なるものより進歩せるはさらにもいはず更にこの五六十年の間にも進歩したり。要するに小説の作は今より大凡そ三十五年乃至四十年前の頃を極盛の期となす。 Dickens、Sawyer、Shirley、Eliot、Trollope、

Thackeray、Kingsley、Palmer、Disraeli等の名家は皆千八百五十年代に最も多く作せしものにて彼の小説を以て文學の生命となせる佛國すら當時は及ぶ能はざりきこれより二十年が程のうちにはSawyer、Dickens相次ぎて歿しTrollopeもEliotもまた大作をものせざるに至りKingsley、Palmer將た漸く老衰するに至りしかば作の質稍下落せし觀あり。但し第二流の作の量に至りては寧ろ前代に倍せんとし世間の歡迎は愈々加はり遂には單に書物といへば小説のとと解する者も生じ若しくは文學と小説とを同一視する者夥しくなりぬ。而して一世紀の前に於て率先して小説界の蓁莽を開き此の全盛の種子を蒔きしは主としてスコットの力なりといふも過言にあらじ。

かく詩歌と小説とが等しく全盛を極めたりし動機は如何。前者は全く自動的に革命の潮氣に感じて續發せしにて後者は重に他動的に社會の要求に應じて起りしなり。

次に注意すべきは定期出版物の進歩なり。彼の新聞雜誌的小冊子の政治界などに頗る勢ありしは遙かに前の時代にして當時は其の數もいと少かりしがアチ

ソンスキフトさてはアフォーなどの頃は斯業大に衰へ一般に價值なきものと見做され掲載の記事なども纒かに：“Robinson Crusoe” “Sir Launcelot Greaves.”等の持て囃されしのみにて評論文の如きは一向に世に冷遇せらるゝ様になりしが十八世紀の末に至り一葦水を隔て、佛蘭西革命の大活劇の演ぜらるゝや英國國民は争ひて其の事相を知らんと欲し新聞紙の勢力はこゝに一轉するとなりき。(これにはまた讀書社會の擴張などいふ内部の因縁の添ひしはいふを俟たず)。かくて讀者の歡迎につれて發行者もまた成るべく記事に興味を加へて讀者を誘ひつゝき起る他の出版物と競争するに至りこゝに定期刊行物の亂發を來しき。時しもチャコピン黨は新聞雜誌を機關とし政治界の活動をはじめたり。是に於て反對黨も亦た同じく新聞類に據りて議論を闘はするとなりいよく世界の注意を惹きぬ。後程なく便利なる新聞紙條例定まり印刷術の進歩と共に價額も減じ其の隆盛加はりたり。さる程に定期出版物は文學の全類を集め詩歌小説の創作より歴史哲學、宗教、科學の評論に至るまで大概の著作は其の單行する前に一たびは新聞雜誌に掲載せられずといふことなく毎日毎週毎月毎季等の出版物を通覽すれば文學

の全貌窺ひ得てほゞ遺漏なきに至りぬ。

定期出版物と文學との關係はこれに止まらず其の盛んなる頃は大抵の文士は皆これに關係を有するに至り小作家小評論家もなほこれによりて生活し彼のケラアストリートの文學ごろつきの如きは全く其の跡を絶つに至りぬ。或意味よりいへば定期出版物の力が文學者の地位を高めしなり。さてこれら定期出版物に掲載せし文章詩歌には大かた匿名を用ひたりしかば所謂文學通にこそ其の論旨筆致等によりて大凡の見當もつきたれど普通の讀者は曉る能はず人を離れて文のみを讀みにき。後には此れが一種の愛嬌と見做されて知名の文人等もわざと幟衣を用ひ遂には大雜誌の主筆さへも異様なる別號にて社説をものせしことありき。かくていつしか此の風止みて本名を署することゝなりしが其の何時頃よりなるか明知し難し。批評文の如きは今日に至るまでも以前と異ならず。投評文に匿名を用ふるときは何となく記事に責任軽くようせずは刺傷嘲諷の道具となりさらでも作或は作者の眞價を穩當に論定するよりは寧ろ自家が着眼の奇警を衒はんとするが如き傾向となるは必然なれどさりとて全く本名を署すると

としては其の寄書もかれがれとなるべく讀者の快味を減少すべし。要するに定期出版物の状況はすべて今の我が邦の新聞雜誌に徴して大かたは察知せらるべし。

さて又或意味に於て科學に屬すれどもまた文學に密接の關係あるいは、純文學と科學との中間にある歴史。史につきては十九世紀中には目覺ましき事もなし。されど其の研究の勞力及び其の未來の史家に供給せし便宜などにつきて考ふれば其の功必しも多く他の文學に讓るべくもあらず。ケムブリッジ大學教授アクトン嘗て學生に語りていはく「歴史は今や歴史家と離れて獨立す」とこの語はよく十九世紀史學の得失兩方面を蔽へる者といふべし。これを希臘羅馬の古へに徴するに有名なるシューシチヂニス、ヘロドタスなど歴史は單に直接に聞觀せる事柄又は自家が讀みて感激する所ありし傳説等によりて綴れるものにして今の歴史家の眼を以て見れば到底不具なるを免れず。而して爾後數百年の後に至るまでも歴史は各國共に同様の有様なりき。是の如くにして成れりし歴史は史家が知見と感情との範圍内に於ける歴史即ち主觀の歴史にして眞正の客觀的歴史にはあらず。

十七世紀の末より十八世紀の初めへかけて英のギボンギボンは卓越の識見を持して史の研究に佛蘭西派の風を用ひ周到密一に事實の採拾に従ひしが當時獨逸にても此の種の研究行はれ大勢茲に改まり遂に十九世紀に至りては其の極端まで推進するに至りたり。マコーレー、カーライルの著の如何に經營慘憺たるものなりしかを見れば此の理明かならん。往時は荒唐蕪謔の臆語として棄てられし傳説古記録の類も今や史料の最上級を占め出所不明の逸話すらも拾撫して博を銜ふものさへにいき。傳説古記録の類はもと杜撰なるが多し相互の矛盾もあり意外の過誣もあり之れを統べ之れが隱微を解釋し之れに有機体的生命を賦與するは一に史家の手腕を要す。然らざれば死記死誦の徒が千百の機械的考證のみ何の爲す所かあるべき。主觀に偏して詩歌的なりし往古の歴史は今や客觀に偏して無機無生のものとならんとしき。皆これ歴史攻究法の不備より來れるもの也。歴史が歴史家を離れて獨立するはよし而も歴史家は到底活人情活世相と離るべからざるなり。彼のマコーレー、カーライル、フルード等の史は幸にして如是死物とならざりしも尙餘りに同事物の考證に密なりしが爲めに十二年間の記事に四

卷を費し五六十年間の歴史に十二卷を費したり時弊を免れざりきといふべし。要するに十九世紀中の史的事業は過去の獨斷の風を矯めんが爲めにあまりに機械的に流れたりし憾あれども夥多の史家が銳意に研究し出だし、史料は今や積みみて山の如く以て後の眞史家の出づるを待てるが如くなれば歴史の地盤はやゝこゝに固きを待たりといふべきなり。

十九世紀に於て最も振はざりしものは劇文學なり。其の量の上より見れば敢て前世紀に譲らざれど臺帳となりて舞臺に演ぜられしものに至りてはいと稀なり。劇の形式上の工夫古傑作の研究などは大に歩を進めたりしも新作に至りては大抵は凡上劇學者、劇文學、劇たるに止まりにき。學者はさまざまに其の原因を求めて調停の運動もありしかどさせる効果もなくて今日に至りぬ。案ふにこは作劇そのものゝ困難なるに由れるなり。シユリゲン以後英國に眞の劇詩家の出でざりしは主として之れに因る。

さて應用文學の他の一つなる神學につきて見るに其の振はざりしこと遙かに歴史の下にあり。單に出版物につきて見れば其の分量他種のものに譲らずと雖も

これを文學的方面より見れば其の價值いよ／＼少なく彼の讚美歌なども現今のに至りては情高きにあらず趣清きにあらず辭妙なるにあらず否無意味にして乾燥なるを常とせり。此の間たゞ僅かに歴史熱の餘炎によりて著されたる高僧の傳記宗派分裂の由來若しくは教義の變遷等を録せるものに讀むべきものあるのみ。有名なるアーキング、チャルマース等の如きも寧ろ人物として秀でたりしのみ。著述の上より見て大なりしはたゞニューマン一人のみ。さて又文學とは最も縁遠き科學の壇上に當時二三の文章家を出だしたりしは頗る奇なり。科學本來の性質より言へば其の説明に美文を要することはなかるべき筈なれど科學者の或者につきて見れば天性文學の嗜好に富みし者あり若しくは其文章の自からにして修辭の法にかなへるもあり。第十九世紀の科學者中にはハックスレーを首としてかゝる文章家鮮からず。

終りに科學よりは文學に縁近き美術家、博言家等につきて一瞥するに其の聰明なる一二を除くの外は蛙鳴蟬噪の徒にして未だ文園を飾るに足らざりき。以而非美學家が二三の書物によりて得たる覺束なき知識を基礎として一足飛びに批

評壇に上り自家が賞鑑力、判別力の不具なるを知らず、拘子定規の批評を試るの片腹いたきは更にもいはず、純文學の修養もなき博言家が手當り次第に外國文學をとりて紹介若しくは批評して俗耳を驚かすなど、何れの國にもありがちなが、特に英國近代の騷壇に此の輩の跳梁の盛んなりしを見る。蓋し文學全盛の春風にふきあげられにし大路の塵埃ならんのみ。

近代文學の概況はほゞ以上に盡きたりと信ず。こゝに一言を加へたきは、第二、十世紀に於ける英文學は如何なるべきかの問題なり。

つらく、現今の英文壇を見渡すに此の世紀の初めつかたに生れ出でし名家は大抵筆を易へ中ごろに出でし人々のみが現騷壇の牛耳をとれる次第なるが、暫く眼を轉じて過去の一百年を一瞥すれば多少深感なき能はざるものあり。見よ詩壇に小説壇に批評壇に其の他あらゆる文學準文學の壇に何ぞ名家の秋天の星の如く多かりし。正に是れ芳芬張天の春スコットや、バイロンや、マコーレーや、ヂッケンズや、サッカレーや、エリオットや、キングスレーや、枚舉に遑あらず。これを今の文壇に見んか彼の今尙生存せる二三の老作家を除くの外は満目悉く黄茅白葦然らざれば

春華の艶を摸して及ばざる狂花のかへり咲きに過ず。是に於て人或は曰はく、現今の文壇は沈息せりと又曰はくこれ更らに一轉するの兆と。沈息にあるか轉機にあるかは疑問ならめど兎に角に文壇の振はざるは事實なり。六百年間文學隆盛期として未曾有の長日月榮えにし文壇は更らに百尺竿頭一步を進むるを得べきか否か。十八世紀末より十九世紀の始めへかけて起りしが如き世界的大革命の再び起ることなくして沈着なる英國人が大に奮發することあるべきか否か。彼の如き動機なく彼の如き素養なく彼の如き感奮、激怒、恐怖、希望等なくして更らにかの如き革新運動を試ることを得べしや否や。これ現未の問題なり。講者は輕々しく此の大問題に答ふることを好まず。且らく未決のまゝに之れを存して更に讀者と共に研鑽討究を重ねん。

英國文學史 終

62
385

文
五
二

終

